

**調査2 虐待ケースに関する児童相談所  
への悉皆調査によるケース分析**



## 本調査の概要

### 【目的】

児童虐待を疑われて全国児童相談所から通告された事例について調査し、最近の事例の虐待状況の特徴や親子の個体要因および環境要因を明らかにする。

### 【方法】

全国 211 の児童相談所における通告事例について調査によりケース分析を行った。調査期間は平成 30 年 11 月 1 日～平成 31 年 1 月 25 日に行った。平成 30 年 5 月 14 日から 5 月 31 日の 2 週間で児童虐待を疑われて全国児童相談所通告された事例（再受理を含む）に関する記録を参考に、通告時と同年秋（9 ないし 10 月）における事例の状態や推移について回答を依頼した。具体的な質問項目は「アンケート調査票（p.25）」に示す通りである。

### 【主な結果と考察】

全国 211 児童相談所のうち 202 児童相談所から回答を得た調査票からほぼ無回答なものを除いた合計 7636 件を分析対象とした。主要な所見と考察を以下に記した。

- ① **通告される虐待事例の変化、特に DV 目撃による心理的虐待事例について：** 今回の事例の虐待種別での「心理的虐待（DV 目撃）」は 33.5% で、H25 年の 16.7% と比べると倍増していた。また、通告した者（機関）では、H25 年度に比べ「警察」の通告等が 2.5 倍以上に増加していた。主たる虐待者は、実母 46.1%、実父 40.8% であったが、平成 25 年調査のデータ（実母 51.1%、実父 34.4%）と比較すると、実母の割合が 1 割低下し、実父の割合が 1 割増加していた。これは、DV 法施行や児童虐待防止法の改正に伴い、警察が配偶者からの暴力が疑われるなどの通報を受けた場合に必要な措置を講じるようになったことを反映した結果と推察される。さらに心理的虐待（DV 目撃）虐待の事例に関して今回のデータをもとに詳しく分析したところ、心理的虐待（DV 目撃）は、他の虐待種に比べて虐待通算期間が 1 か月未満と評価される事例が多く、「援助方針を決定し終結」の報告頻度が多くなっていた。その一方で、虐待重症度では「虐待の危惧あり」という軽いレベルと「中度虐待」という重いレベルの両方が他の虐待種より多い傾向がみられた。これは、DV 加害者の暴力傾向は深刻な場合もあるが、被害者と児童が別居や離婚などで家をできれば虐待事例としての対応は終結するケースが多いためであると思われる。しかし DV 問題では、加害者と母子が一旦分離しても、離婚調停や面会交流などで関係が継続したり、付きまといや再同居が深刻な結果につながる場合があり、理想的には長期的な視点でのリスク評価が必要である。しかし、今回のデータによれば、心理的虐待（DV 目撃）への対応をみると、他の虐待に比べて、主たる虐待者への面接が行われる場合が少なく、保護者や児童への援助や一時保護がなされない事例の割合が高いことが示されており、児童相談所みの対応では限界があると考えられる。その分、DV 被害者支援機関や区市町村、警察などとの連携が重要になると思われ、今回のデータでも DV 被害者支援機関への紹介が全体の 1 割程度行われていた。しかし、虐待通告として最多になった DV 事例に対しては、関連機関（警察や DV 被害者支援機関や区市町村など）との連携など、DV と児童虐待の両方の問題への包括的な支援の体制を構築することが必要になっていると思われる。

- ② **189の使用の状況と効果:** 児童相談所へ通告された虐待事例の中で、189 が用いられていた事例は、515 件 (6.7%) であり、まだ使用率は高いとは言えないものの、「近隣知人」「児童本人」「その他の家族、親族」では比較的高い割合で用いられており、加害者や子ども自身が訴えられるという点では 189 ならではの有効性が発揮され始めていると思われた。
- ③ **虐待者のリスク要因:** 虐待者のもつリスク要因として、乳幼児健診の受診が確認されないこと、精神的問題 (精神障害や知的障害や発達障害など) やその疑いがあること、経済的困難、不安定な就労、夫婦間不和、育児疲れ、ひとり親家庭、DV、養育者の別居、孤立、劣悪な住環境、頻繁な転居、アルコール等の乱用者、親自身の被虐待体験などが存在し、虐待重症度や虐待の種別とも関係していた。精神的な問題への治療を行っているかどうかや虐待の重症度と関係していることが確かめられ、こうしたリスク要因へ対応することで虐待の重症化や再発を予防できる可能性がある。
- ④ **被虐待児童の状態やリスク要因:** 被虐待児の心身の問題は、全体としては評価が難しいこともあり「不明」「ない」とされる場合が多い。しかし心身の問題は同時に虐待の重症度・種別やその他生育期の問題と関係しており、子どもの心身の状態をもとに虐待の発見や支援計画を立てることが重要であることが改めて確認された。
- ⑤ **対応・援助とその効果:** 今回の事例における新規受理ケースは 61.1%であった。また以前虐待受理経験があり今回も虐待で受理されたケースは 31.8%に及び、前回は別の相談で虐待としては今回が初受理という事例も 6.4%であった。9 割以上のケースで 48 時間以内の安全確認が行われていた。児童や主な虐待者への面接は半数以上で行われ、保護者や子どもに対して、医療機関、生活保護、DV 被害者支援機関、保育所などへつなぐサービスが 24.8%に行われていたが、要保護対策協議会のケース検討会は 15.0%にとどまった。虐待者は調査時点では 6 割が援助側の働きかけに応じ、最初は抵抗していても次第に受け入れ、虐待の停止に至る事例も 7~8 割に及んだ。一方で、一旦虐待が止まっても再発の恐れがある事例は 4 割、虐待の自覚なく、介入や支援を受け入れない一群も 1 割程度存在した。安全な状況が確保されない場合や調査を更に必要とする場合は一時保護 13%が行われていた。2 割は継続指導や施設入所という形での支援を継続していた。もともと虐待重症度が中度あるいは重度の事例の場合は介入しても虐待が止まらないままである場合が 2.4%、8.5%存在していた。働きかけを受け入れない事例等困難な事例への介入方法の開発が必要であるが、改善が難しく、再発の可能性がある事例を的確に評価し、虐待的な行動の継続や再発から子どもを保護する体制を組めるようになることが重要であると考えられた。

### 【まとめ】

H30 年度のケース分析では、警察などによる心理的虐待 (DV 目撃) の通告が増え、主な虐待者が実父である事例が増えるなどの変化があることがわかった。また、189 が始まったことで、虐待者や児童本人などからの通告も増えて、より多様なケースが事例として顕在化していることが確かめられた。さらに調査では、虐待者のリスク要因 (乳幼児健診の受診が確認されないこと、精神的問題、経済的困難、不安定な就労、夫婦間不和、育児疲れ、ひとり親家庭、DV、養育者の別居、孤立、劣悪な住環境、頻繁な転居など) や子どものリスク要因 (発達障害疑い、問題行動あり、精神発達の遅れ、分離体験予期しない妊娠など) が虐待の重症度や種別などと関係することが改めて確かめられ、これらを的確に評価、支援していくことで虐待の停止や再発防止の可能性が高められると考えられた。現時点での児童相談所での働

きかけにより、虐待者の 6 割はある程度これに応じており、虐待の停止に到っているいると判断される事例が 7 割以上であった。しかし一方で、一旦は虐待が止まっても再発の恐れがある事例が 4 割あり、虐待の自覚がなく、介入や支援を受け入れない事例も 1 割程度存在していた。DV 加害者や男性事例の増加は、育児ストレスで抑うつ的になる母親の虐待に対する働きかけの手法とは異なる手法が必要になってくると思われる。こうした困難な事例への行動変容をはかる介入方法の開発の開発とともに、改善が難しかったり再発の可能性がある事例を的確に評価し、虐待的な行動の継続や再発から子どもを保護する体制を組めるようになることが重要であると考えられた。

## 調査 2

### 1. 調査の目的

児童虐待を疑われて全国児童相談所に通告された事例について調査し、事例の通告時および調査時における特徴および親子の個体要因・環境要因を明らかにする。

### 2. 調査実施機関

本調査は、平成 30 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業の国庫補助協議の助成を受け、筑波大学医学医療系社会精神保健学准教授森田展彰が実施する。なお、調査内容の検討、調査結果の分析、まとめについては、調査検討委員会を設置して対応した。(〇〇ページ「調査実施経過／研究者一覧」参照)

### 3. 調査対象

全国 211 の児童相談所および全国 69 の児童相談所設置自治体の主管課および児童相談所内の人材育成部門

### 4. 調査期間

平成 30 年 11 月 22 日～平成 31 年 1 月 25 日

### 5. 調査内容

虐待ケースについて児童相談所への悉皆調査によりケース分析

### 6. 調査項目

「アンケート調査票」(25 ページ)に記載の通り。

### 7. 調査方法

平成 30 年 5 月 14 日から 5 月 31 日の 2 週間で児童虐待を疑われて全国児童相談所に通告された事例の記録に関する調査を施行し、事例の通告時および調査時における事例の持つ親子の個体要因および環境要因に関するデータを収集した。

### 8. 調査結果

報告する調査項目は、平成 30 年 5 月 14 日～5 月 31 日までの 2 週間に全国 202 の児童相談所が「児童虐待相談」として受理(再受理を含む)された全事例について、記録調査を基に集計したデータに基づく。

### 8.1. 解析対象ケース数

- 基本的には調査の有効回答数 7636 を全ケース数として扱ったが、設問によって異なる。
- Q1 から Q6（虐待の有無を尋ねる設問）までは 7636 ケースを全数として解析対象とした。
- Q7 以降は、Q6 で「虐待あり」「不明（調査中含む）」と回答した 6300 ケースを全数として解析対象とした。
- 途中で前の設問の回答に回答条件が限定される設問がいくつか存在するが、その場合はその設問に該当するケースを全数とし、ケース数を項目冒頭に記した。

### 8.2. 実施した解析について

- 度数分布表とグラフの作成
  - 全設問において回答分布を示す度数分布表とグラフ（8.1 で記述した各設問において扱ったケース数を 100 としたときの％）を掲載した。
- 基本統計量（平均値・標準偏差）の掲載
  - 数値解答を求めるもの（例：年齢）については、平均値・標準偏差を本文中に記載した。
- クロス表の作成
  - 設問によっては、他の重要な要因（例：主たる虐待種別、虐待重症度等）との関連を検討するためにクロス表を作成した。
  - クロス表を作成する際、取り扱った 2 つの要因の関連を検討するために、統計学的解析手法として  $\chi^2$  検定（カイ 2 乗検定）もしくは Fisher の直接確率計算および残差分析を行った。統計的有意水準は 5% ( $p < .05$ ) を用いた。
    - ◇  $\chi^2$  検定や残差分析の考え方：「もし 2 つの要因に全く関係がない場合、クロス表への回答はどうか（期待度数）」を計算したうえで、実際に回答された度数と期待度数のズレの大きさを評価する手法。ズレが大きければ大きいほど、そのクロス表の各セル（クロス表で数値を表記するマス目の単位）の度数は偏って分布し、2 つの要因をクロスさせることでどこかに偏りが生まれた（つまり何らかの関連が見られる）と考える。
    - ◇  $\chi^2$  検定が有意で、かつ各セルについて実施した残差分析の結果が有意（統計学的に判断して 2 つの要因のどこかにズレがある可能性が高い）だった場合、基本的にはクロス表上の表記でそれを明示した。
      - 太字の場合、そのセルが期待度数に比べ統計的に多い度数であることを示す。
      - イタリックの場合、そのセルが期待度数に比べ統計的に少ない度数であることを示す。
- 分散分析
  - 数値回答を求める設問（例：一時保護日数）において、他の要因との関連（例：主たる虐待種別）を検討するために、数値回答を求める設問を従属変数と設定し一要因配置の分散分析を実施し、多重比較法として Tukey の b 法を使用した。統計的有意水準は 5% ( $p < .05$ ) を用いた。

## ■クロス表について

### 1. 通常のコロス表

一時保護の有無と児童共通ダイヤルのクロス表

**Q40 一時保護の有無と児童共通ダイヤル（189）の使用のクロス集計表**

		189使用	189不使用	不明	合計
一時保護を行った	頻度	<u>17</u>	696	13	726
	カテゴリ別の%	17.9%	30.6%	41.9%	30.3%
一時保護中である	頻度	1	39	0	40
	カテゴリ別の%	1.1%	1.7%	0.0%	1.7%
一時保護は行っていない	頻度	<u>77</u>	1539	18	1634
	カテゴリ別の%	81.1%	67.7%	58.1%	68.1%
総数		95	2285	31	2411

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

- ① 「頻度」はクロス表の特定の箇所（セル）に該当する人数を示す  
（例：「189 使用」で「一時保護を行った」人数は 17 名）
- ② 「カテゴリ別の%」は基本的には列（タテ）を合計すると 100%になるように配置。  
（いくつか表記上の理由で行（ヨコ）を合計すると 100%になるよう記載する部分もある）。
- ③ **太字**で表されているところは（残差分析の結果）統計的に頻度が高く、イタリックで表されているところは統計的に頻度が低いと出た部分。

### 2. 複数回答の設問を含むクロス表（タイトルに「複数回答」と明記）

援助機関（複数回答）と年齢カテゴリのクロス表

**Q44-4 援助機関と年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表**

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
児童相談所	頻度	<u>37</u>	190	307	204	88	826
	カテゴリ別の%	79.7%	84.1%	90.9%	89.4%	91.3%	88.1%
児童相談所以外	頻度	<b>26</b>	<u>91</u>	<u>92</u>	61	29	299
	カテゴリ別の%	56.8%	38.4%	25.3%	25.1%	37.7%	31.9%
総数		47	224	342	227	98	938

\***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは低い頻度を示したものの。

- ① 回答選択肢ごとに「あてはまる（○をつけた場合）= 1」「あてはまらない（○をつけない場合）= 0」の 2 値としてコード化。各回答選択肢ごとに $\chi^2$ 検定を行う。
- ② クロス表に掲載したのは各回答選択肢の「あてはまる」回答数値のみ。「児相」選択肢に「あてはまる」と答えた人数、「児相以外」選択肢に「あてはまる」と答えた人数…のように並べる。総数から各回答の「頻度」を引いた数が「あてはまらない」数。  
（「1 歳未満」で「児童相談所」で援助を受けた者 37 名、受けない者 10 名（総数 47-受けた者 37））
- ③ したがって「カテゴリ別の%」は各回答において「総数を全体として、その設問に「あてはまる」と答えた人」の%。
- ④ 複数回答なので、各設問の度数の合計は総数（一番下の行）とは一致しない。

## I. 被虐待児について

Q1～Q6 までの回答は基本的に総ケース数 7636 を全数として計算した。

### Q1. 被虐待児の性別

- 総ケース数 7,636 件のうち、被虐待児の性別は「男児」4,007 人（52.5%）、「女児」3,561 人（46.6%）で男児の方が 5.9%多くなっていた。

Q1 性別			
	度数	%	%グラフ
男性	4007	52.5	
女性	3561	46.6	
無回答	69	0.9	
合計	7636	100	

#### \*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査では、全ケース 11,257 人のうち、無回答を除いた 7,434 人のうち、男児 3,779 人（50.8%）、女児 3,602 人（48.5%）で、男児が 2.3%多くなっていた。

### Q2. 受理時の被虐待児年齢（実数回答）

- 総ケース数 7,636 件のうち、平均年齢は 7.25 歳（標準偏差は 4.83）、最小値は 0 歳 1 ヶ月未満、最大値は 18 歳であった。年齢を「1 歳未満」「1-5 歳」「6-11 歳」「12-14 歳」「15 歳以上」の 5 つのカテゴリに分類し、度数分布表を作成した。「1 歳未満」が 6.8%、「1～5 歳」が 36.0%、「6～11 歳」が 33.4%、「12～14 歳」が 14.3%、「15 歳以上」が 8.2%で、1～5 歳が最も多く、中学就学前にあたる 12 歳までが 7 割以上を占める結果となった。

Q2 年齢カテゴリ			
	度数	%	%グラフ
1歳未満	518	6.8	
1～5歳	2751	36.0	
6～11歳	2554	33.4	
12～14歳	1092	14.3	
15歳以上	624	8.2	
無回答	97	1.3	
合計	7636	100	

#### \*平成 25 年調査との比較

平成 25 年度調査においても、11 歳までの低年齢が 7 割を占めており今回と同様の傾向であった。

### Q3. 被虐待児の在学状況等

- 総ケース数 7,636 件のうち「小学校」が 33.5%と最も多く、「保育所その他の保育施設」が 20.8%、「家庭にいる乳幼児」15.1%と続いている。就学前の乳幼児（「家庭にいる乳幼児」「保育所その他の保育施設」「幼稚園」）があわせて約 4 割を占めていた。

Q3 在学状況			
	度数	%	%グラフ
家庭にいる乳幼児	1150	15.1	
保育所その他の保育施設	1592	20.8	
幼稚園	485	6.4	
小学校	2561	33.5	
中学校	1030	13.5	
高校	521	6.8	
その他	122	1.6	
不明	85	1.1	
無回答	90	1.2	
合計	7636	100	

#### \*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査でも、「小学校」が 36.5%と最も多く、「保育所その他の保育施設」が 18.6%、「家庭にいる乳幼児」15.7%であり、同様の傾向が続いている。

## Q4. 本ケースを児童相談所へ通告・送致・相談した者（機関）

- 設問：「虐待の疑いも含めて児相に通告・送致・相談した者（機関）は誰でしたか」
- 総ケース数 7,636 件のうち、児童相談所へ通告等した者（機関）については、「警察」が 46.4% とほぼ半数を占め、ついで「近隣知人」18.5%、「学校」8.2%、「その他家族・親族」7.3% の順であった。

Q4 通告者

	度数	%	% グラフ
虐待者本人	185	2.4	■
その他の家族・親族	554	7.3	■
児童本人	48	0.6	
近隣知人	1413	18.5	■
福祉事務所	94	1.2	■
民生・児童委員・主任児童委員	8	0.1	
保健所	25	0.3	
区市町村の児童相談部門	417	5.5	■
保育所・保健センター	77	1.0	■
幼稚園	13	0.2	
学校	626	8.2	■
放課後児童クラブ	4	0.1	
放課後等デイサービス	19	0.2	
学習塾等の学校外の教育機関	7	0.1	
児童発達支援センター	2	0.0	
医療機関	155	2.0	■
警察	3547	46.4	■
その他の児童福祉施設	14	0.2	
子ども食堂などの民間の居場所	4	0.1	
NPO等民間団体が開設する電話相談	1	0.0	
当該の児童相談所職員	69	0.9	■
その他	302	4.0	■
無回答	52	0.7	
合計	7636	100	

### \*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査では、「近隣知人」が 25.1% と最も多く、「警察」は 17.1% であり、5 年間で「警察」の通告等が 2.5 倍以上に増加している。これは、DV 法施行や児童虐待防止法の改正に伴い、警察が配偶者からの暴力が疑われるなどの通報を受けた場合に必要な措置を講じるようになったことを反映した結果と推察される。

### 通告者と虐待の有無のクロス表

総ケース数 7,636 件を対象に、通告者と虐待の有無についての関連を検討した。

結果、「警察」「学校」「虐待者本人」経由で通告があった場合は他と比して実際に虐待があるケースが多く、「近隣知人」「その他の親族」経由での通告は虐待ではないケースの頻度が高くなっていた。「保育所」「医療機関」からの通告は虐待であるかどうか判断に時間を要する「不明」の頻度が高くなっていた。

### 通告者と主たる虐待種別のクロス表

Q6（虐待の有無）に「虐待あり」「不明（調査中）」と回答した 6,300 件を対象に、通告者と虐待種別についての関連を検討した。

結果、身体的虐待は「虐待者本人」「学校」「幼稚園」「保育所」「医療機関」「児童本人」「その他の家族」「区市町村の児相」からの通告が多かった。ネグレクトは「区市町村の児相」「医療機関」「保育所」「福祉事務所」「近隣知人」からの通告が多かった。性的虐待は「医療機関」「学校」「区市町村の児相」からの通告が、心理的虐待は「近隣知人」「児童本人」「その他の家族・親族」からの通告が多くなっていた。DV 目撃については、特に「警察」からの通告ケースが多かった。

### 通告者と虐待重症度のクロス表

Q6（虐待の有無）に「虐待あり」「不明（調査中）」と回答した 6300 件を対象に、通告者と虐待重症度についての関連を検討した。

結果、「近隣知人」「警察」からの通告は虐待の危惧あり・軽度虐待などの軽度例の頻度が高かった。一方「児童本人」「区市町村の児童相談部門」「学校」「福祉事務所」からの通告は中度から重度レベルの虐待である頻度が高かった。また、「医療機関」経由で通告があった場合は重度虐待・生命の危機がある頻度が高くなっていた。

通告者と虐待の有無のクロス表
----------------

Q4 通告者と虐待の有無のクロス集計表

		虐待あり	不明	虐待なし	合計
虐待者本人	頻度	<b>160</b>	6	18	184
	カテゴリ別の%	87.0%	3.3%	9.8%	100.0%
その他の家族・親族	頻度	374	<b>46</b>	<b>130</b>	550
	カテゴリ別の%	68.0%	8.4%	23.6%	100.0%
児童本人	頻度	42	3	2	47
	カテゴリ別の%	89.4%	6.4%	4.3%	100.0%
近隣知人	頻度	675	<b>121</b>	<b>608</b>	1404
	カテゴリ別の%	48.1%	8.6%	43.3%	100.0%
福祉事務所	頻度	77	8	9	94
	カテゴリ別の%	81.9%	8.5%	9.6%	100.0%
民生・児童委員・主任児童委員	頻度	7	0	0	7
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
保健所	頻度	17	2	5	24
	カテゴリ別の%	70.8%	8.3%	20.8%	100.0%
区市町村の児童相談部門	頻度	340	31	46	417
	カテゴリ別の%	81.5%	7.4%	11.0%	100.0%
保育所・保健センター	頻度	57	<b>15</b>	5	77
	カテゴリ別の%	74.0%	19.5%	6.5%	100.0%
幼稚園	頻度	9	1	3	13
	カテゴリ別の%	69.2%	7.7%	23.1%	100.0%
学校	頻度	<b>517</b>	27	76	620
	カテゴリ別の%	83.4%	4.4%	12.3%	100.0%
放課後児童クラブ	頻度	3	1	0	4
	カテゴリ別の%	75.0%	25.0%	0.0%	100.0%
放課後等デイサービス	頻度	15	0	4	19
	カテゴリ別の%	78.9%	0.0%	21.1%	100.0%
学習塾等の学校外の教育機関	頻度	7	0	0	7
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
児童発達支援センター	頻度	1	0	0	1
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
医療機関	頻度	112	<b>14</b>	28	154
	カテゴリ別の%	72.7%	9.1%	18.2%	100.0%
警察	頻度	<b>3171</b>	110	244	3525
	カテゴリ別の%	90.0%	3.1%	6.9%	100.0%
その他の児童福祉施設	頻度	11	0	3	14
	カテゴリ別の%	78.6%	0.0%	21.4%	100.0%
子ども食堂などの民間の居場所	頻度	4	0	0	4
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
NPO等民間団体が開設する電話相談	頻度	1	0	0	1
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
当該の児童相談所職員	頻度	56	2	10	68
	カテゴリ別の%	82.4%	2.9%	14.7%	100.0%
その他	頻度	212	23	61	296
	カテゴリ別の%	71.6%	7.8%	20.6%	100.0%
全体	頻度	5868	410	1252	7530
	カテゴリ別の%	77.9%	5.4%	16.6%	100.0%

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

通告者と主たる虐待種別のクロス表
------------------

Q4 通告者と主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
虐待者本人	頻度	<b>79</b>	23	2	1	43	<u>18</u>	166
	カテゴリ別の%	47.6%	13.9%	1.2%	0.6%	25.9%	10.8%	100.0%
その他の家族・親族	頻度	<b>132</b>	64	6	5	<b>136</b>	<u>77</u>	420
	カテゴリ別の%	31.4%	15.2%	1.4%	1.2%	32.4%	18.3%	100.0%
児童本人	頻度	<b>19</b>	4	1	1	<b>19</b>	<u>0</u>	44
	カテゴリ別の%	43.2%	9.1%	2.3%	2.3%	43.2%	0.0%	100.0%
近隣知人	頻度	<u>126</u>	<b>194</b>	13	6	<b>411</b>	<u>35</u>	785
	カテゴリ別の%	16.1%	24.7%	1.7%	0.8%	52.4%	4.5%	100.0%
福祉事務所	頻度	<b>27</b>	<b>30</b>	2	<b>4</b>	16	<u>6</u>	85
	カテゴリ別の%	31.8%	35.3%	2.4%	4.7%	18.8%	7.1%	100.0%
民生・児童委員・主任児童委員	頻度	1	<b>3</b>	0	0	3	0	7
	カテゴリ別の%	14.3%	42.9%	0.0%	0.0%	42.9%	0.0%	100.0%
保健所	頻度	5	<u>7</u>	0	0	5	<u>2</u>	19
	カテゴリ別の%	26.3%	36.8%	0.0%	0.0%	26.3%	10.5%	100.0%
区市町村の児童相談部門	頻度	<b>127</b>	<b>124</b>	<b>24</b>	<b>9</b>	<u>70</u>	<u>17</u>	371
	カテゴリ別の%	34.2%	33.4%	6.5%	2.4%	18.9%	4.6%	100.0%
保育所・保健センター	頻度	<b>33</b>	<b>20</b>	<b>4</b>	0	11	<u>4</u>	72
	カテゴリ別の%	45.8%	27.8%	5.6%	0.0%	15.3%	5.6%	100.0%
幼稚園	頻度	<u>7</u>	2	0	0	1	<u>0</u>	10
	カテゴリ別の%	70.0%	20.0%	0.0%	0.0%	10.0%	0.0%	100.0%
学校	頻度	<b>248</b>	94	<b>22</b>	<b>15</b>	126	<u>37</u>	542
	カテゴリ別の%	45.8%	17.3%	4.1%	2.8%	23.2%	6.8%	100.0%
放課後児童クラブ	頻度	2	2	0	0	0	0	4
	カテゴリ別の%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
放課後等デイサービス	頻度	6	3	<b>3</b>	0	3	<u>0</u>	15
	カテゴリ別の%	40.0%	20.0%	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	100.0%
学習塾等の学校外の教育機関	頻度	2	0	0	0	3	2	7
	カテゴリ別の%	28.6%	0.0%	0.0%	0.0%	42.9%	28.6%	100.0%
児童発達支援センター	頻度	0	1	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
医療機関	頻度	<b>45</b>	<b>38</b>	3	<b>4</b>	26	<u>7</u>	123
	カテゴリ別の%	36.6%	30.9%	2.4%	3.3%	21.1%	5.7%	100.0%
警察	頻度	<u>499</u>	<u>340</u>	<u>37</u>	<u>8</u>	<u>550</u>	<b>1833</b>	3267
	カテゴリ別の%	15.3%	10.4%	1.1%	0.2%	16.8%	56.1%	100.0%
その他の児童福祉施設	頻度	1	4	<b>3</b>	0	2	1	11
	カテゴリ別の%	9.1%	36.4%	27.3%	0.0%	18.2%	9.1%	100.0%
子ども食堂などの民間の居場所	頻度	1	1	0	0	0	2	4
	カテゴリ別の%	25.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	100.0%
NPO等民間団体が開設する電話相談	頻度	0	0	0	1	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%
当該の児童相談所職員	頻度	15	15	<b>5</b>	0	9	14	58
	カテゴリ別の%	25.9%	25.9%	8.6%	0.0%	15.5%	24.1%	100.0%
その他	頻度	49	<b>70</b>	1	<b>6</b>	54	<u>53</u>	233
	カテゴリ別の%	21.0%	30.0%	0.4%	2.6%	23.2%	22.7%	100.0%
全体	頻度	1424	1039	126	60	1488	2108	6245
	カテゴリ別の%	22.8%	16.6%	2.0%	1.0%	23.8%	33.8%	100.0%

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したもの。全体に期待度数が5未満のセルが20%を超えるため、有意性の判断は参考程度に見ておく必要がある。

通告者と虐待重症度のクロス表
----------------

Q4 通告者と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
虐待者本人	頻度	25	91	38	7	2	3	166
	カテゴリ別の%	15.1%	54.8%	22.9%	4.2%	1.2%	1.8%	100.0%
その他の家族・親族	頻度	<u>59</u>	216	96	20	2	<u>24</u>	417
	カテゴリ別の%	14.1%	51.8%	23.0%	4.8%	0.5%	5.8%	100.0%
児童本人	頻度	<u>0</u>	20	<u>18</u>	3	0	4	45
	カテゴリ別の%	0.0%	44.4%	40.0%	6.7%	0.0%	8.9%	100.0%
近隣知人	頻度	<u>185</u>	<u>432</u>	86	<u>5</u>	1	69	778
	カテゴリ別の%	23.8%	55.5%	11.1%	0.6%	0.1%	8.9%	100.0%
福祉事務所	頻度	12	34	<u>30</u>	<u>9</u>	0	0	85
	カテゴリ別の%	14.1%	40.0%	35.3%	10.6%	0.0%	0.0%	100.0%
民生・児童委員・ 主任児童委員	頻度	0	<u>6</u>	0	1	0	0	7
	カテゴリ別の%	0.0%	85.7%	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	100.0%
保健所	頻度	6	<u>4</u>	6	2	0	1	19
	カテゴリ別の%	31.6%	21.1%	31.6%	10.5%	0.0%	5.3%	100.0%
区市町村の児童相談部門	頻度	<u>45</u>	<u>130</u>	<u>134</u>	<u>40</u>	3	11	363
	カテゴリ別の%	12.4%	35.8%	36.9%	11.0%	0.8%	3.0%	100.0%
保育所・保健センター	頻度	11	39	19	2	0	1	72
	カテゴリ別の%	15.3%	54.2%	26.4%	2.8%	0.0%	1.4%	100.0%
幼稚園	頻度	1	4	3	1	0	1	10
	カテゴリ別の%	10.0%	40.0%	30.0%	10.0%	0.0%	10.0%	100.0%
学校	頻度	<u>49</u>	263	<u>175</u>	<u>42</u>	1	<u>9</u>	539
	カテゴリ別の%	9.1%	48.8%	32.5%	7.8%	0.2%	1.7%	100.0%
放課後児童クラブ	頻度	0	3	1	0	0	0	4
	カテゴリ別の%	0.0%	75.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
放課後等デイサービス	頻度	2	4	7	2	0	0	15
	カテゴリ別の%	13.3%	26.7%	46.7%	13.3%	0.0%	0.0%	100.0%
学習塾等の学校外の 教育機関	頻度	2	1	<u>4</u>	0	0	0	7
	カテゴリ別の%	28.6%	14.3%	57.1%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
児童発達支援センター	頻度	0	1	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
医療機関	頻度	19	<u>36</u>	36	<u>14</u>	<u>13</u>	4	122
	カテゴリ別の%	15.6%	29.5%	29.5%	11.5%	10.7%	3.3%	100.0%
警察	頻度	<u>681</u>	1552	846	<u>82</u>	<u>4</u>	<u>81</u>	3246
	カテゴリ別の%	21.0%	47.8%	26.1%	2.5%	0.1%	2.5%	100.0%
その他の児童福祉施設	頻度	1	4	<u>6</u>	0	0	0	11
	カテゴリ別の%	9.1%	36.4%	54.5%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
子ども食堂などの 民間の居場所	頻度	2	0	2	0	0	0	4
	カテゴリ別の%	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
NPO等民間団体が 開設する電話相談	頻度	0	0	1	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%
当該の児童相談所職員	頻度	14	26	10	<u>6</u>	1	1	58
	カテゴリ別の%	24.1%	44.8%	17.2%	10.3%	1.7%	1.7%	100.0%
その他	頻度	<u>65</u>	<u>95</u>	48	10	0	<u>15</u>	233
	カテゴリ別の%	27.9%	40.8%	20.6%	4.3%	0.0%	6.4%	100.0%
全体	頻度	1179	2961	1566	246	27	224	6203
	カテゴリ別の%	19.0%	47.7%	25.2%	4.0%	0.4%	3.6%	100.0%

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの、全体に期待度数が5未満のセルが20%を超えるため、有意性の判断は参考程度に見ておく必要がある。

## Q4-1. 区市町村の児童相談部門における送致・援助要請・通知

(Q4「区市町村の児童相談部門担当」回答 417 ケース限定)

- 設問：「Q4 で区市町村の児童相談部門を選択した方にお聞きします。このケースは送致・援助要請・通知のどの取り扱いでしたか」
- 区市町村の児童相談部門において取り扱ったケース 417 件のうち、「援助要請」が 50.8%と最も多く、「送致」28.8%、「通知」15.8%と続いていた。

Q4-1 ケースの取り扱い (Q4「市町村の児相部門」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
送致	120	28.8	
援助要請	212	50.8	
通知	66	15.8	
無回答	19	4.6	
合計	417	100	

## Q5. 児童相談所全国共通ダイヤル（189）の使用

- 設問：「Q4 の通告は、児童相談所全国ダイヤル（189）を用いたものでしたか」
- 全ケース 7,636 件のうち、児童相談所全国共通ダイヤル（189）を使用したのは 515 件（6.7%）であり、8 割以上が他の手段での通告となっている。189 がある程度機能し始めていることを示すが、まだその使用は限られているといえる。

Q5 児童共通ダイヤル（189）の使用

	度数	%	%グラフ
はい	515	6.7	
いいえ	6433	84.2	
不明	124	1.6	
無回答	564	7.4	
合計	7636	100	

### 通告者と児童共通ダイヤル（189）使用のクロス表

通告者と 189 使用についての関連を検討した結果、「近隣知人」「児童本人」「その他家族・親族」が 189 を使用する頻度が全体に比して高く、189 が新たな虐待窓口として一定の機能を果たしていることが示唆された。

Q5 通告者と児童共通ダイヤル（189）の使用のクロス集計表

		189使用	189不使用	不明	合計
虐待者本人	頻度	<b>32</b>	141	6	179
	カテゴリ別の%	17.9%	78.8%	3.4%	100.0%
その他の家族・親族	頻度	<b>61</b>	449	12	522
	カテゴリ別の%	11.7%	86.0%	2.3%	100.0%
児童本人	頻度	<b>9</b>	30	2	41
	カテゴリ別の%	22.0%	73.2%	4.9%	100.0%
近隣知人	頻度	<b>376</b>	903	76	1355
	カテゴリ別の%	27.7%	66.6%	5.6%	100.0%
福祉事務所	頻度	0	87	0	87
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
民生・児童委員・主任児童委員	頻度	1	6	0	7
	カテゴリ別の%	14.3%	85.7%	0.0%	100.0%
保健所	頻度	0	22	0	22
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
区市町村の児童相談部門	頻度	0	<b>401</b>	7	408
	カテゴリ別の%	0.0%	98.3%	1.7%	100.0%
保育所・保健センター	頻度	1	<b>75</b>	0	76
	カテゴリ別の%	1.3%	98.7%	0.0%	100.0%
幼稚園	頻度	0	12	0	12
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
学校	頻度	2	<b>587</b>	3	592
	カテゴリ別の%	0.3%	99.2%	0.5%	100.0%
放課後児童クラブ	頻度	0	4	0	4
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
放課後等デイサービス	頻度	0	19	0	19
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
学習塾等の学校外の教育機関	頻度	0	3	0	3
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
児童発達支援センター	頻度	0	1	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
医療機関	頻度	3	<b>143</b>	0	146
	カテゴリ別の%	2.1%	97.9%	0.0%	100.0%
警察	頻度	12	<b>3187</b>	14	3213
	カテゴリ別の%	0.4%	99.2%	0.4%	100.0%
その他の児童福祉施設	頻度	2	10	0	12
	カテゴリ別の%	16.7%	83.3%	0.0%	100.0%
子ども食堂などの民間の居場所	頻度	0	3	0	3
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
NPO等民間団体が開設する電話相談	頻度	0	1	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
当該の児童相談所職員	頻度	0	<b>63</b>	0	63
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
その他	頻度	11	<b>258</b>	2	271
	カテゴリ別の%	4.1%	95.2%	0.7%	100.0%
全体	頻度	510	6405	122	7037
	カテゴリ別の%	7.2%	91.0%	1.7%	100.0%

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q6. 虐待の有無

➤ 設問：「実際このケースに虐待はありましたか」

- 全ケース 7,636 件のうち、実際に虐待があったのは 5,886 件（77.1%）であり、「虐待なし」の 16.6% の約 4.8 倍となっていた。

	度数	%	% グラフ
虐待あり	5886	77.1	
不明（調査中含む）	414	5.4	
虐待なし	1266	16.6	
無回答	70	0.9	
合計	7636	100	

### \*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査では、総サンプル 11,257 人のうち、「虐待あり」が 7,418 件（65.8%）、「虐待なし」が 2,971 件（26.7%）であり、今回の調査の方が「虐待あり」の比率が高くなっている。後に述べるように平成 25 年と比べ、DV の目撃を心理的虐待として警察が通報するケースが急激に増えており、通告事例について「虐待あり」と判断されるケースが増えていると推測される。

これ以降の全設問への回答は Q6 に「虐待あり」「不明（調査中）」と回答したケースに限定される。

したがって基本的には全数=6300として計算を行った。

## Q7. 虐待の種別

- Q6で「虐待あり」「不明（調査中）」と回答のあった 6,300 ケースの虐待種別の内訳は、「心理的虐待（DV 目撃）」が 2,111 人（33.5%）と最も多く、「心理的虐待」が 1,493 人（23.7%）、「身体的虐待」が 1,433 人（22.7%）、「ネグレクト（同居人等による虐待の放置以外）」が 1,043 人（16.6%）であった。

Q7 主たる虐待種別

	度数	%	%グラフ
身体的	1433	22.7	
ネグレクト	1043	16.6	
ネグレクト（同居人の虐待放置）	126	2.0	
性的虐待	61	1.0	
心理的虐待	1493	23.7	
心理的虐待（DV目撃）	2111	33.5	
無回答	33	0.5	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査では、「虐待あり・不明」7,434 件のうち、「身体的虐待」が 2,434 件（32.7%）と最も多く、「ネグレクト（虐待放置以外）」が 1,921 件（25.8%）、「心理的虐待（DV 目撃除く）」が 1,363 件（18.3%）、「心理的虐待（DV 目撃）」が 1,245 件（16.7%）であった。今回の調査では、心理的虐待の占める割合が高くなっていることが分かる。警察が DV が生じている／疑われる家庭において、子どもがいる場合に虐待として児童相談所へ通告する方針になったことが、大きく心理的虐待の通告件数増加につながっていると思われる。

調査 2

**虐待種別と性別のクロス表**

主たる虐待種別と性別の関連について検討した。結果、「身体的虐待」は男児のほうが報告頻度が高く、「ネグレクト」「性的虐待」については女児の方が報告頻度が高いことが明らかとなった。

**Q7 主たる虐待種別と性別のクロス集計表**

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
男児	頻度	<b>851</b>	<b>509</b>	62	<u>9</u>	776	1090	3297
	カテゴリ別の%	25.8%	15.4%	1.9%	0.3%	23.5%	33.1%	100.0%
女児	頻度	<b>577</b>	<b>531</b>	64	<b>52</b>	708	1014	2946
	カテゴリ別の%	19.6%	18.0%	2.2%	1.8%	24.0%	34.4%	100.0%
全体	頻度	1428	1040	126	61	1484	2104	6243
	カテゴリ別の%	22.9%	16.7%	2.0%	1.0%	23.8%	33.7%	100.0%

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

**虐待種別と被虐待児の年齢のクロス表**

主たる虐待種別と年齢の関連について検討した。結果、「身体的虐待」は12~14歳、15歳以上、6~11歳で報告が多く、「ネグレクト」は1歳~5歳の報告が多かった。また「性的虐待」は15歳以上および12~14歳で報告が多かった。「心理的虐待」は各年代カテゴリでほぼまんべんなく報告され、「DV目撃」は1歳未満、もしくは1~5歳のケースでの報告が多かった。

**Q7 主たる虐待種別と年齢カテゴリのクロス集計表**

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
1歳未満	頻度	<u>49</u>	69	4	<u>0</u>	80	<b>195</b>	397
	カテゴリ別の%	12.3%	17.4%	1.0%	0.0%	20.2%	49.1%	100.0%
1~5歳	頻度	<b>344</b>	<b>411</b>	<u>36</u>	<u>3</u>	539	<b>861</b>	2194
	カテゴリ別の%	15.7%	18.7%	1.6%	0.1%	24.6%	39.2%	100.0%
6~11歳	頻度	<b>539</b>	346	52	18	538	<u>679</u>	2172
	カテゴリ別の%	24.8%	15.9%	2.4%	0.8%	24.8%	31.3%	100.0%
12~14歳	頻度	<b>316</b>	142	20	<b>22</b>	<u>200</u>	<u>231</u>	931
	カテゴリ別の%	33.9%	15.3%	2.1%	2.4%	21.5%	24.8%	100.0%
15歳以上	頻度	<b>174</b>	<u>66</u>	13	<b>18</b>	124	<u>137</u>	532
	カテゴリ別の%	32.7%	12.4%	2.4%	3.4%	23.3%	25.8%	100.0%
全体	頻度	1422	1034	125	61	1481	2103	6226
	カテゴリ別の%	22.8%	16.6%	2.0%	1.0%	23.8%	33.8%	100.0%

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待種別と在学状況のクロス表

主たる虐待種別と在学状況との関連について検討した。結果、「身体的虐待」は中学校・高校・小学校で多く報告されていた。「ネグレクト」は乳幼児の報告が多かった。「性的虐待」は高校・中学校の報告が多かった。「DV目撃」は乳幼児・保育所・幼稚園の報告ケースが多かった。

Q7 主たる虐待種別と在学状況のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
家庭にいる	頻度	<u>88</u>	<u>180</u>	<u>10</u>	<u>1</u>	200	<u>404</u>	883
乳幼児	カテゴリ別の%	10.0%	20.4%	1.1%	0.1%	22.7%	45.8%	100.0%
保育所その他の	頻度	<u>249</u>	231	24	<u>2</u>	304	<u>489</u>	1299
保育施設	カテゴリ別の%	19.2%	17.8%	1.8%	0.2%	23.4%	37.6%	100.0%
幼稚園	頻度	<u>58</u>	<u>49</u>	5	<u>0</u>	<u>108</u>	<u>164</u>	384
	カテゴリ別の%	15.1%	12.8%	1.3%	0.0%	28.1%	42.7%	100.0%
小学校	頻度	<u>546</u>	346	50	19	542	<u>675</u>	2178
	カテゴリ別の%	25.1%	15.9%	2.3%	0.9%	24.9%	31.0%	100.0%
中学校	頻度	<u>303</u>	134	<u>25</u>	<u>21</u>	<u>185</u>	<u>215</u>	883
	カテゴリ別の%	34.3%	15.2%	2.8%	2.4%	21.0%	24.3%	100.0%
高校	頻度	<u>157</u>	<u>50</u>	7	<u>14</u>	99	<u>123</u>	450
	カテゴリ別の%	34.9%	11.1%	1.6%	3.1%	22.0%	27.3%	100.0%
その他	頻度	23	<u>37</u>	1	<u>3</u>	17	<u>13</u>	94
	カテゴリ別の%	24.5%	39.4%	1.1%	3.2%	18.1%	13.8%	100.0%
不明	頻度	<u>2</u>	8	0	0	<u>24</u>	<u>8</u>	42
	カテゴリ別の%	4.8%	19.0%	0.0%	0.0%	57.1%	19.0%	100.0%
全体	頻度	1426	1035	122	60	1479	2091	6213
	カテゴリ別の%	23.0%	16.7%	2.0%	1.0%	23.8%	33.7%	100.0%

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待種別と児童共通ダイヤル (189) 使用のクロス表

主たる虐待種別と児童共通ダイヤル (189) 使用との関連について検討した。結果、「身体的虐待」と「心理的虐待」は189を使用したケースが多く、「ネグレクト」「DV目撃」は189を使用しないケースの頻度が多くなっていた。

Q7 主たる虐待種別と児童共通ダイヤル (189) 使用のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
189使用	頻度	<u>96</u>	<u>35</u>	4	4	<u>163</u>	<u>31</u>	333
	カテゴリ別の%	28.8%	10.5%	1.2%	1.2%	48.9%	9.3%	100.0%
189不使用	頻度	<u>1220</u>	<u>936</u>	97	51	1207	<u>1908</u>	5419
	カテゴリ別の%	22.5%	17.3%	1.8%	0.9%	22.3%	35.2%	100.0%
不明	頻度	21	11	<u>7</u>	0	<u>38</u>	<u>4</u>	81
	カテゴリ別の%	25.9%	13.6%	8.6%	0.0%	46.9%	4.9%	100.0%
全体	頻度	1337	982	108	55	1408	1943	5833
	カテゴリ別の%	22.9%	16.8%	1.9%	0.9%	24.1%	33.3%	100.0%

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q8. 虐待の重症度

- 虐待の重症度について回答のあった 6,300 ケースのうち、「軽度虐待」が 2,972 件（47.2%）、「中度虐待」1,570 件（24.9%）、「虐待の危惧あり」1,184 件（18.8%）であり、「重度の虐待」も 247 件（3.9%）あった。

	度数	%	%グラフ
虐待の危惧あり	1184	18.8	
軽度虐待	2972	47.2	
中度虐待	1570	24.9	
重度虐待	247	3.9	
生命の危機あり	27	0.4	
不明	225	3.6	
無回答	75	1.2	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年調査との比較

平成 25 年調査では、「虐待あり・不明」7,434 件のうち、「軽度虐待」が 3,078 件（41.1%）と最も多く、「中度虐待」が 1,745 件（23.5%）、「虐待の危惧あり」が 1,560 件（21.0%）であった。「生命の危機あり」も 1.5%であったが、今回の調査では 0.4%へ減少していた。これは決して深刻な事例が減っているわけではなく、DV に関する通告による心理的虐待の急激な増加が増えて、「軽度虐待」とされる事例が増えたことで相対的に「重度虐待」や「生命の危険あり」の割合が減少したと考えられる。

### 虐待重症度と被虐待児年齢のクロス表

虐待重症度と年齢カテゴリとの関連について検討した。結果、1 歳未満は「虐待の危惧」「生命の危機あり」の双方の報告頻度が高かった。1-5 歳では「虐待の危惧」の報告頻度が相対的に高かった。6-11 歳では、「軽度虐待」の報告頻度が高かった。また 15 歳以上において、中度虐待の報告頻度が高くなっていた。

Q8 虐待重症度と年齢カテゴリーのクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
1歳未満	頻度	<b>91</b>	<u>155</u>	103	20	<b>14</b>	12	395
	カテゴリ別の%	23.0%	39.2%	26.1%	5.1%	3.5%	3.0%	100.0%
1~5歳	頻度	<b>458</b>	1018	526	79	7	83	2171
	カテゴリ別の%	21.1%	46.9%	24.2%	3.6%	0.3%	3.8%	100.0%
6~11歳	頻度	401	<b>1080</b>	539	75	<u>1</u>	<u>65</u>	2161
	カテゴリ別の%	18.6%	50.0%	24.9%	3.5%	0.0%	3.0%	100.0%
12~14歳	頻度	<u>141</u>	461	240	47	4	32	925
	カテゴリ別の%	15.2%	49.8%	25.9%	5.1%	0.4%	3.5%	100.0%
15歳以上	頻度	85	240	<b>158</b>	24	1	18	526
	カテゴリ別の%	16.2%	45.6%	30.0%	4.6%	0.2%	3.4%	100.0%
全体	頻度	1176	2954	1566	245	27	210	6178
	カテゴリ別の%	19.0%	47.8%	25.3%	4.0%	0.4%	3.4%	100.0%

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待重症度と在学状況のクロス表

虐待重症度と在学状況との関連について検討した。結果、乳幼児は「虐待の危惧」と「生命の危機」の双方の報告頻度が高かった。また小学校では「軽度虐待」が、高校では「中度虐待」の報告頻度が高くなっていった。

Q8 虐待重症度と在学状況のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
家庭にいる	頻度	<b>198</b>	<u>365</u>	235	42	<b>10</b>	25	875
	カテゴリ別の%	22.6%	41.7%	26.9%	4.8%	1.1%	2.9%	100.0%
乳幼児	頻度	257	640	302	43	3	41	1286
	カテゴリ別の%	20.0%	49.8%	23.5%	3.3%	0.2%	3.2%	100.0%
保育所その他の 保育施設	頻度	85	185	<u>76</u>	12	1	18	377
	カテゴリ別の%	22.5%	49.1%	20.2%	3.2%	0.3%	4.8%	100.0%
小学校	頻度	399	<b>1078</b>	545	76	<u>1</u>	68	2167
	カテゴリ別の%	18.4%	49.7%	25.1%	3.5%	0.0%	3.1%	100.0%
中学校	頻度	<u>131</u>	439	235	44	4	27	880
	カテゴリ別の%	14.9%	49.9%	26.7%	5.0%	0.5%	3.1%	100.0%
高校	頻度	75	203	<b>132</b>	16	1	17	444
	カテゴリ別の%	16.9%	45.7%	29.7%	3.6%	0.2%	3.8%	100.0%
その他	頻度	20	<u>32</u>	26	<b>11</b>	<b>5</b>	0	94
	カテゴリ別の%	21.3%	34.0%	27.7%	11.7%	5.3%	0.0%	100.0%
不明	頻度	4	<u>7</u>	10	0	1	<b>24</b>	46
	カテゴリ別の%	8.7%	15.2%	21.7%	0.0%	2.2%	52.2%	100.0%
全体	頻度	1169	2949	1561	244	26	220	6169
	カテゴリ別の%	18.9%	47.8%	25.3%	4.0%	0.4%	3.6%	100.0%

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待重症度と児童共通ダイヤル（189）使用のクロス表

虐待重症度と児童共通ダイヤル（189）使用の関連について検討した。結果、「虐待の危惧」では189使用頻度が高く、「中度虐待」「重度虐待」では189使用頻度が低くなっていた。

Q8 虐待重症度と児童共通ダイヤル（189）使用のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
189使用	頻度	<b>84</b>	173	<u>51</u>	<u>2</u>	1	<b>19</b>	330
	カテゴリ別の%	25.5%	52.4%	15.5%	0.6%	0.3%	5.8%	100.0%
189不使用	頻度	<u>973</u>	<u>2562</u>	<b>1409</b>	<b>226</b>	25	<u>188</u>	5383
	カテゴリ別の%	18.1%	47.6%	26.2%	4.2%	0.5%	3.5%	100.0%
不明	頻度	18	<b>49</b>	<u>7</u>	2	0	5	81
	カテゴリ別の%	22.2%	60.5%	8.6%	2.5%	0.0%	6.2%	100.0%
全体	頻度	1075	2784	1467	230	26	212	5794
	カテゴリ別の%	18.6%	48.0%	25.3%	4.0%	0.4%	3.7%	100.0%

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待重症度と主たる虐待種別のクロス表

虐待重症度と主たる虐待種別との関連について検討した。結果、身体的虐待は「軽度虐待」「重度虐待」「生命の危機あり」の報告頻度が高くなっていた。ネグレクトは「重度虐待」の報告頻度が高かった。性的虐待も「中度虐待」「重度虐待」の報告頻度が高くなっていた。心理的虐待は「虐待の危惧あり」「軽度虐待」の報告頻度が、DV目撃は「虐待の危惧あり」「中度虐待」の頻度が高くなっていた。

Q8 虐待重症度と主たる虐待種別のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
身体的虐待	頻度	<u>121</u>	<b>808</b>	356	<b>74</b>	<b>18</b>	44	1421
	カテゴリ別の%	8.5%	56.9%	25.1%	5.2%	1.3%	3.1%	100.0%
ネグレクト	頻度	194	503	239	<b>56</b>	7	40	1039
	カテゴリ別の%	18.7%	48.4%	23.0%	5.4%	0.7%	3.8%	100.0%
ネグレクト (同居人の虐待放置)	頻度	25	<u>41</u>	41	<b>14</b>	1	3	125
	カテゴリ別の%	20.0%	32.8%	32.8%	11.2%	0.8%	2.4%	100.0%
性的虐待	頻度	7	<u>7</u>	<b>26</b>	<b>18</b>	0	3	61
	カテゴリ別の%	11.5%	11.5%	42.6%	29.5%	0.0%	4.9%	100.0%
心理的虐待	頻度	<b>355</b>	<b>793</b>	227	<u>26</u>	<u>1</u>	<b>68</b>	1470
	カテゴリ別の%	24.1%	53.9%	15.4%	1.8%	0.1%	4.6%	100.0%
心理的虐待 (DV目撃)	頻度	<b>479</b>	<u>812</u>	<b>681</b>	<u>58</u>	<u>0</u>	<u>60</u>	2090
	カテゴリ別の%	22.9%	38.9%	32.6%	2.8%	0.0%	2.9%	100.0%
全体	頻度	1181	2964	1570	246	27	218	6206
	カテゴリ別の%	19.0%	47.8%	25.3%	4.0%	0.4%	3.5%	100.0%

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q9. 虐待の通算期間

- 虐待の通算期間については、「不明」が1,957件（31.1%）と最も多く、「1か月未満」1,644件（26.1%）、「1～3年未満」759件（12.0%）、「1～3か月未満」471件（7.5%）となっていた。

Q9 虐待の通算期間

	度数	%	%グラフ
1か月未満	1644	26.1	
1～3か月未満	471	7.5	
3～6か月未満	305	4.8	
6か月～1年未満	437	6.9	
1～3年未満	759	12.0	
3年以上	649	10.3	
不明	1957	31.1	
無回答	78	1.2	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「1か月未満」が18.5%、「3年以上」が15.1%、「1～3年未満」が14.9%であった。今回、「1か月未満」が31.4%と高くなっているのは、早期発見の割合が上がった可能性がある。

### 虐待の通算期間と年齢カテゴリーのクロス表

年齢1歳未満では通算期間が「1年未満（特に1ヶ月未満）」が多く、5歳までは「1-3年未満」、6歳以上は「3年以上」の期間報告が多くなっていた。年齢以上の期間の虐待は生じ得ないため自然な結果である。注目されるのは「不明」の割合が各年代とも3割前後にのぼっていることである。特に1-5歳において「不明」が他の年代よりも相対的に割合が高く、この年代の虐待の把握の難しさを示している。

Q9 虐待の通算期間と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
1か月未満	頻度	<b>144</b>	<b>621</b>	<b>512</b>	<b>211</b>	143	1631
	カテゴリ別の%	36.1%	28.6%	23.8%	22.8%	27.1%	26.4%
1～3か月未満	頻度	<b>52</b>	160	150	72	32	466
	カテゴリ別の%	13.0%	7.4%	7.0%	7.8%	6.1%	7.5%
3～6か月未満	頻度	<b>50</b>	102	110	<b>23</b>	17	302
	カテゴリ別の%	12.5%	4.7%	5.1%	2.5%	3.2%	4.9%
6か月～1年未満	頻度	<b>36</b>	170	137	60	34	437
	カテゴリ別の%	9.0%	7.8%	6.4%	6.5%	6.4%	7.1%
1～3年未満	頻度	<b>8</b>	<b>298</b>	269	127	55	757
	カテゴリ別の%	2.0%	13.7%	12.5%	13.7%	10.4%	12.3%
3年以上	頻度	<b>0</b>	<b>113</b>	<b>277</b>	<b>158</b>	<b>100</b>	648
	カテゴリ別の%	0.0%	5.2%	12.9%	17.1%	18.9%	10.5%
不明	頻度	109	<b>711</b>	696	<b>275</b>	147	1938
	カテゴリ別の%	27.3%	32.7%	32.4%	29.7%	27.8%	31.4%
総数		729	2127	2122	822	379	6179

\***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待の通算期間と主たる虐待種別のクロス表

虐待の種類と期間では、「身体的虐待」「性的虐待」が他の虐待種に比べ通算期間「3年以上」という報告が多かった。「心理的虐待」では「不明」が最も多いことと比べると、「身体的虐待」「性的虐待」は「心理的虐待」よりも行為の評価が明確であり期間が比較的定めやすいためと思われた。一方「ネグレクト」は、他の虐待種よりも「6ヶ月～1年未満」「1～3年未満」という報告が有意に高かった。これは世話をされていないという認定が、低い年代の児童の方が明確になりやすく、期間として1か月以下や3年以上にあてはまりにくいことが影響していると思われる。

Q9 虐待の通算期間と主たる虐待種別クロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト ネグレクト (同居人の 虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計	
1か月未満	頻度	397	251	27	<u>1</u>	<u>340</u>	<u>625</u>	1641
	カテゴリ別の%	28.0%	24.4%	21.4%	1.8%	23.0%	29.9%	26.5%
1～3か月未満	頻度	116	70	<u>22</u>	1	99	162	470
	カテゴリ別の%	8.2%	6.8%	17.5%	1.8%	6.7%	7.8%	7.6%
3～6か月未満	頻度	63	61	<u>13</u>	3	62	103	305
	カテゴリ別の%	4.4%	5.9%	10.3%	5.3%	4.2%	4.9%	4.9%
6か月～1年未満	頻度	91	<u>99</u>	14	<u>8</u>	110	<u>114</u>	436
	カテゴリ別の%	6.4%	9.6%	11.1%	14.0%	7.4%	5.5%	7.0%
1～3年未満	頻度	157	<u>148</u>	13	<u>19</u>	169	251	757
	カテゴリ別の%	11.1%	14.4%	10.3%	33.3%	11.4%	12.0%	12.2%
3年以上	頻度	<u>187</u>	98	13	<u>12</u>	162	<u>176</u>	648
	カテゴリ別の%	13.2%	9.5%	10.3%	21.1%	10.9%	8.4%	10.5%
不明	頻度	<u>408</u>	303	<u>24</u>	13	<u>538</u>	657	1943
	カテゴリ別の%	28.8%	29.4%	19.0%	22.8%	36.4%	31.5%	31.3%
	総数	1419	1030	126	57	1480	2088	6200

### 虐待の通算期間と主たる虐待重症度のクロス表

虐待の重症度と通算期間の関係では、「1か月未満」では「生命の危機あり」と「虐待の危惧あり」という最重度と最軽度の双方で最も高い割合を占めた。「生命の危機」については、通算期間の短い乳幼児において緊急の対応をすべき最重度の事例が集中していることを意味している。一方「虐待の危惧」は、虐待の期間も重症度でも低いレベルにとどまる1群が存在することを意味している。「3年以上」という最も通算期間の長い群は、「中度」「重度」虐待の頻度が多く報告されていた。

Q9 虐待の通算期間と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
1か月未満	頻度	<u>421</u>	788	<u>313</u>	<u>40</u>	<u>13</u>	46	1621
	カテゴリ別の%	35.9%	26.8%	20.2%	16.3%	48.1%	20.7%	26.3%
1～3か月未満	頻度	<u>111</u>	226	113	12	1	<u>6</u>	469
	カテゴリ別の%	9.5%	7.7%	7.3%	4.9%	3.7%	2.7%	7.6%
3～6か月未満	頻度	50	<u>125</u>	<u>106</u>	17	3	<u>4</u>	305
	カテゴリ別の%	4.3%	4.2%	6.8%	6.9%	11.1%	1.8%	5.0%
6か月～1年未満	頻度	76	202	122	21	2	11	434
	カテゴリ別の%	6.5%	6.9%	7.9%	8.6%	7.4%	5.0%	7.0%
1～3年未満	頻度	<u>105</u>	385	210	<u>46</u>	1	<u>8</u>	755
	カテゴリ別の%	9.0%	13.1%	13.5%	18.8%	3.7%	3.6%	12.3%
3年以上	頻度	<u>78</u>	<u>266</u>	<u>229</u>	<u>63</u>	0	<u>11</u>	647
	カテゴリ別の%	6.7%	9.0%	14.8%	25.7%	0.0%	5.0%	10.5%
不明	頻度	<u>331</u>	952	458	<u>46</u>	7	<u>136</u>	1930
	カテゴリ別の%	28.2%	32.3%	29.5%	18.8%	25.9%	61.3%	31.3%
	総数	1172	2944	1551	245	27	222	6161

## Q10. 受理時点の子どもの虐待の認知

- 子どもの虐待認知について回答のあった 6,212 人のうち、「不明」2,165 人 (34.4%)、「意思が確認できない」1,709 人 (27.1%)、「ひどいことをされたと感じていない」1,160 人 (18.4%) であり、「不当にひどいことをされた」と認知しているのは 795 人 (12.6%) に過ぎなかった。虐待を受けたことを子どもが認識することの困難さの表れと言えよう。子どもにとっては、あくまで「親が行っていることが正しい」と考えがちであり、「ひどいことをされた」と感じなかったり、「子どもの方が悪い」と考えてしまうことがある。これは虐待の発見の難しさを意味するとともに、子どもの自己否定的な認知が自尊心などの発達に悪影響を与える可能性を示すものといえる。

Q10 受理時の子どもの虐待認知

	度数	%	% グラフ
不当にひどいことをされたと思っている	795	12.6	
ひどいことをされたが自分が悪いから仕方がないと思っている	383	6.1	
ひどいことをされたと感じていない	1160	18.4	
意思が確認できない	1709	27.1	
不明	2165	34.4	
無回答	88	1.4	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査でも、「不明」30.3%、「意思が確認できない」26.9%とほぼ同様であった。「不当にひどいことをされた」と回答したのは 16.8%であり、今回の結果の方が低い。

### 子どもの虐待認知と主たる性別のクロス表

回答されたものの中では、女兒は自分が被害を受けたことを明確に意識できているケースが多く、一方男児は自分にも責任があると考えるケースが多かった。

Q10 受理時子どもの虐待認知と性別のクロス集計表

		男児	女兒	合計
不当にひどいことを されたと思っている	頻度	<u>364</u>	<u>429</u>	793
	カテゴリ別の%	11.1%	14.7%	12.8%
ひどいことをされたが自分が 悪いから仕方がないと思っている	頻度	<u>222</u>	<u>161</u>	383
	カテゴリ別の%	6.8%	5.5%	6.2%
ひどいことをされたと 思っていない	頻度	619	536	1155
	カテゴリ別の%	19.0%	18.3%	18.7%
意思が確認できない	頻度	<u>936</u>	<u>765</u>	1701
	カテゴリ別の%	28.7%	26.2%	27.5%
不明	頻度	1124	1030	2154
	カテゴリ別の%	34.4%	35.3%	34.8%
	総数	3265	2921	6186

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 子どもの虐待認知と年齢カテゴリーのクロス表

「ひどいことをされたと思っている」という正しい認識は、「12-14歳」「15歳以上」において3分の1くらいに達しており最も多い割合になっている。「6-11歳」では「ひどいことをされたと思っている」は13.0%にとどまり、「ひどいことをされたと思っていない」が24.5%を占め、他の年齢層よりも多い。「6-11歳」では「不明」が最も多く、「1歳未満」および「1-5歳」では「意志が確認できない」が最多であった。年齢が低いほど、虐待を受けたという認識を持ってないことが示されている。

Q10 受理時子どもの虐待認知と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
不当にひどいことをされたと思っている	頻度	<u>2</u>	<u>56</u>	279	<b>274</b>	<b>180</b>	791
	カテゴリ別の%	0.5%	2.6%	13.0%	29.8%	34.2%	12.8%
ひどいことをされたが自分が悪いから仕方がないと思っている	頻度	<u>2</u>	<u>39</u>	<b>205</b>	<b>89</b>	<b>46</b>	381
	カテゴリ別の%	0.5%	1.8%	9.5%	9.7%	8.7%	6.2%
ひどいことをされたと思っていない	頻度	<u>15</u>	<u>358</u>	<b>528</b>	175	<u>79</u>	1155
	カテゴリ別の%	3.8%	16.5%	24.5%	19.0%	15.0%	18.7%
意志が確認できない	頻度	<b>298</b>	<b>884</b>	<u>346</u>	<u>111</u>	<u>61</u>	1700
	カテゴリ別の%	74.9%	40.8%	16.1%	12.1%	11.6%	27.6%
不明	頻度	<u>81</u>	<b>832</b>	796	<u>271</u>	161	2141
	カテゴリ別の%	20.4%	38.4%	37.0%	29.5%	30.6%	34.7%
	総数	398	2169	2154	920	527	6168

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 子どもの虐待認知と主たる虐待種別のクロス表

「身体的虐待」、「性的虐待」、「ネグレクト（同居人による虐待）」は、「不当にひどいことをされた」という認識率が他の種類よりも高く、被害を被害として認識しやすいといえる。しかし、「身体的虐待」「性的虐待」では、「ひどいことをされたが自分が悪いので仕方がない」も他の種類より高く、「被害を受けた」と認識しながらも「その原因を自分にもある」と考えがちであるといえる。一方「心理的虐待」は「不当にひどいことをされた」と感じにくい。「ネグレクト」は、「不当にひどいことをされた」は6.6%であるのに対して、「ひどいことをされたと思っていない」が33.3%で他の種類よりも高い。以上より心理的虐待やネグレクトは子どもがそれを虐待と認識しにくいといえる。

Q10 受理時子どもの虐待認知と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計	
不当にひどいことをされたと思っている	頻度	<b>386</b>	<u>68</u>	<b>35</b>	<b>40</b>	<u>149</u>	<u>116</u>	794
	カテゴリ別の%	27.3%	6.6%	28.2%	66.7%	10.1%	5.6%	12.8%
ひどいことをされたが自分が悪いから仕方がないと思っている	頻度	<b>238</b>	<u>31</u>	<b>14</b>	2	78	<u>18</u>	381
	カテゴリ別の%	16.8%	3.0%	11.3%	3.3%	5.3%	0.9%	6.2%
ひどいことをされたと思っていない	頻度	<u>150</u>	<b>320</b>	17	5	267	401	1160
	カテゴリ別の%	10.6%	31.0%	13.7%	8.3%	18.1%	19.2%	18.7%
意志が確認できない	頻度	<u>282</u>	<b>315</b>	32	<u>5</u>	388	<b>680</b>	1702
	カテゴリ別の%	20.0%	30.5%	25.8%	8.3%	26.3%	32.6%	27.5%
不明	頻度	<u>357</u>	<u>299</u>	<u>26</u>	<u>8</u>	<b>593</b>	<b>870</b>	2153
	カテゴリ別の%	25.3%	28.9%	21.0%	13.3%	40.2%	41.7%	34.8%
	総数	1413	1033	124	60	1475	2085	6190

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 子どもの虐待認知と虐待重症度のクロス表

虐待の重症度と子どもの虐待認知の関係を見ると、「中度虐待」「重度虐待」では「不当にひどいことをされた」という報告が多く、一方「虐待の危惧あり」ではそのような報告は少ない。これは虐待の重症度が高い方が、「被害を受けた」という認識が明確になることを示している。しかし、重度の虐待でも「自分が悪い」という認識を持つ者が10%おり、また「ひどいことをされたと思っていない」の回答も15%程度認められ、重度であっても必ずしも正確な認識を持っているとは限らないといえる。

Q10 受理事時子どもの虐待認知と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
不当にひどいことを されたと思っている	頻度	<u>67</u>	367	<u>273</u>	<u>77</u>	1	7	792
	カテゴリ別の%	5.7%	12.5%	17.6%	31.3%	3.7%	3.2%	12.9%
ひどいことをされたが自分が 悪いから仕方がないと思っている	頻度	<u>35</u>	<u>207</u>	110	<u>25</u>	2	<u>0</u>	379
	カテゴリ別の%	3.0%	7.1%	7.1%	10.2%	7.4%	0.0%	6.2%
ひどいことをされたと思 っていない	頻度	<u>293</u>	567	<u>231</u>	37	<u>1</u>	<u>25</u>	1154
	カテゴリ別の%	25.0%	19.3%	14.9%	15.0%	3.7%	11.3%	18.8%
意思が確認できない	頻度	<u>388</u>	791	<u>392</u>	69	<u>19</u>	<u>32</u>	1691
	カテゴリ別の%	33.2%	27.0%	25.2%	28.0%	70.4%	14.4%	27.5%
不明	頻度	387	1000	548	<u>38</u>	<u>4</u>	<u>158</u>	2135
	カテゴリ別の%	33.1%	34.1%	35.3%	15.4%	14.8%	71.2%	34.7%
	総数	1170	2932	1554	246	27	222	6151

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q11. 被虐待児の家族構成（複数回答）

- 設問：「被虐待児の家族構成（受理時点で同居している人）。判明している家族構成員すべてをご回答ください」
- 「実母」のいる家庭は 90.6%（5,708 件）で、「実父」61.0%（3,840 件）を大きく上回っていた。
  - 「実の兄弟」がいる家庭は、62.6%（3,942 件）と半数以上を占めた。
  - 「実母」「実父」以外の家族では、「祖母」7.7%、「普通養子縁組の養父」5.5%の順に報告が多かった。

Q11 被虐待児の家族構成（複数回答項目）

	度数	%	%グラフ
実父	3840	61.0	
継父	193	3.1	
普通養子縁組の養父	343	5.4	
里父	3	0.0	
内縁の夫	283	4.5	
実母	5708	90.6	
継母	31	0.5	
普通養子縁組の養母	24	0.4	
里母	3	0.0	
内縁の妻	14	0.2	
実の兄弟	3942	62.6	
義理の兄弟	915	14.5	
祖父	282	4.5	
祖母	480	7.6	
おじ	81	1.3	
おば	81	1.3	
その他の同居家族	68	1.1	
その他	100	1.6	
不明	45	0.7	
該当ケース数	6300		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査では、「実母」86.9%であったのに比較して、今回の調査では 75.5%と 10%程度下回っている。DV の目撃などの心理的虐待が大きく増えたことにより、母親の養育が問題である事例のみでなく、父親の問題を中心とした事例が事例化するようになったことがこの変化につながっていると思われる。

### 家族構成（複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

「母親」「父親」「実のきょうだい」がどの虐待種でも多く回答された。各虐待種別の特徴を見ていくと、身体的虐待は「養父」「継父」「おじ」と同居しているとの報告が多く、「実母」との同居が他虐待種に比べてやや少なかった。心理的虐待は「実父」「実のきょうだい」と同居しているとの報告が多かった。また DV 目撃は、「実母」「実父」「実のきょうだい」と同居しているという報告が多かった。ネグレクトは、「祖母」「叔

父」「叔母」と同居しているとの報告が多く、ネグレクト（同居人の虐待放置）は「内縁の夫」と同居しているとの報告が多かった。全体としては、父親的な立場の男性が中心となって、身体的虐待・DV等において子どもにダメージを与えていることが伺える内容である。

Q11 家族構成と主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的 虐待	ネグレクト (同居人の 虐待放置)		性的虐待	心理的 虐待	心理的 虐待 (DV 目撃)	合計
			ネグレクト	ネグレクト				
実父	頻度	857	<u>419</u>	<u>45</u>	32	<b>956</b>	<b>1519</b>	3828
	カテゴリ別の%	59.8%	40.2%	35.7%	52.5%	64.0%	72.0%	61.1%
継父	頻度	<b>66</b>	28	<u>0</u>	2	44	53	193
	カテゴリ別の%	4.6%	2.7%	0.0%	3.3%	2.9%	2.5%	3.1%
普通養子縁組の養父	頻度	<b>99</b>	<u>41</u>	<u>0</u>	<b>15</b>	72	116	343
	カテゴリ別の%	6.9%	3.9%	0.0%	24.6%	4.8%	5.5%	5.5%
里父	頻度	1	1	0	0	1	0	3
	カテゴリ別の%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%
内縁の夫	頻度	65	42	<b>21</b>	4	<u>46</u>	105	283
	カテゴリ別の%	4.5%	4.0%	16.7%	6.6%	3.1%	5.0%	4.5%
実母	頻度	<u>1262</u>	<u>926</u>	117	53	1336	<b>1996</b>	5690
	カテゴリ別の%	88.1%	88.8%	92.9%	86.9%	89.5%	94.6%	90.8%
継母	頻度	12	6	1	0	5	7	31
	カテゴリ別の%	0.8%	0.6%	0.8%	0.0%	0.3%	0.3%	0.5%
普通養子縁組の養母	頻度	11	5	0	0	5	3	24
	カテゴリ別の%	0.8%	0.5%	0.0%	0.0%	0.3%	0.1%	0.4%
里母	頻度	2	0	0	0	1	0	3
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%
内縁の妻	頻度	2	1	1	0	5	5	14
	カテゴリ別の%	0.1%	0.1%	0.8%	0.0%	0.3%	0.2%	0.2%
実の兄弟	頻度	<u>853</u>	<u>624</u>	77	32	<b>985</b>	<b>1361</b>	3932
	カテゴリ別の%	59.5%	59.8%	61.1%	52.5%	66.0%	64.5%	62.7%
義理の兄弟	頻度	184	163	16	13	215	324	915
	カテゴリ別の%	12.8%	15.6%	12.7%	21.3%	14.4%	15.3%	14.6%
祖父	頻度	68	42	7	4	80	78	279
	カテゴリ別の%	4.7%	4.0%	5.6%	6.6%	5.4%	3.7%	4.5%
祖母	頻度	118	<b>98</b>	14	7	96	144	477
	カテゴリ別の%	8.2%	9.4%	11.1%	11.5%	6.4%	6.8%	7.6%
おじ	頻度	<b>26</b>	<b>22</b>	2	1	<u>6</u>	24	81
	カテゴリ別の%	1.8%	2.1%	1.6%	1.6%	0.4%	1.1%	1.3%
おば	頻度	20	<b>24</b>	1	1	12	22	80
	カテゴリ別の%	1.4%	2.3%	0.8%	1.6%	0.8%	1.0%	1.3%
その他の同居家族	頻度	19	17	3	0	8	21	68
	カテゴリ別の%	1.3%	1.6%	2.4%	0.0%	0.5%	1.0%	1.1%
その他	頻度	<u>14</u>	20	<b>12</b>	<b>3</b>	19	32	100
	カテゴリ別の%	1.0%	1.9%	9.5%	4.9%	1.3%	1.5%	1.6%
不明	頻度	5	5	0	0	<b>27</b>	<u>3</u>	40
	カテゴリ別の%	0.3%	0.5%	0.0%	0.0%	1.8%	0.1%	0.6%
	全体	1433	1043	126	61	1493	2111	6267

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q12①. 3~6 ヶ月健診の受診状況

- 可能性を含め「受診した」が50.1%で、「受診していない（可能性がある）」1.9%を大きく上回る。

Q12① 3~6ヶ月健診の受診状況

	度数	%	%グラフ
受診した（可能性が高い）	3158	50.1	
受診していない（可能性が高い）	121	1.9	
年齢未到達	102	1.6	
不明	2815	44.7	
無回答	104	1.7	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査では、「受診した（可能性がある）」が 37.9%であり、今回の調査結果の方がやや上回っている。また、平成 25 年調査では、「不明」が 57%と半数以上を占めたが今回は 37.3%と受診の有無を確認するようになってきたことがうかがわれる。

「不明」がそのまま未受診を意味しないにしても、半分以下の事例でしか 3-6 か月健診の施行が確かめられていないというのは、一般に乳幼児健診の受診率が 80%を超えていることと比較すると、虐待事例では極端に低い受診率であるといえる。

### 3~6 か月健診の受診状況と虐待種別のクロス表

身体的虐待は、受診状況が「不明」であるという報告が多く、ネグレクトは「受診していない」という報告が多かった。これは、健診に行けていないことが虐待的な状況のサインであることを示していると考えられる。ネグレクトが未受診と関係しているのは、ネグレクトが他の虐待よりも乳幼児年代に集中しているので健診状況の情報が得られているケースが多いためであると思われる。また心理的虐待（DV目撃）は「受診した」報告は高く、「受診していない」「不明」報告は低かったが、DV 事例が乳幼児の段階ではそれなりに家族が機能していることを示した結果だと思われる。

Q12① 3~6か月健診の受診状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
受診した（可能性が高い）	頻度	695	502	59	35	736	<b>1121</b>	3148
	カテゴリ別の%	49.3%	48.8%	46.8%	58.3%	50.3%	53.8%	51.0%
受診していない（可能性が高い）	頻度	22	<b>44</b>	6	0	23	<u>26</u>	121
	カテゴリ別の%	1.6%	4.3%	4.8%	0.0%	1.6%	1.2%	2.0%
年齢未到達	頻度	17	<b>32</b>	1	0	<u>12</u>	40	102
	カテゴリ別の%	1.2%	3.1%	0.8%	0.0%	0.8%	1.9%	1.7%
不明	頻度	<b>676</b>	450	60	25	693	<u>898</u>	2802
	カテゴリ別の%	47.9%	43.8%	47.6%	41.7%	47.3%	43.1%	45.4%
	総数	1410	1028	126	60	1464	2085	6173

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 3～6 か月検診の受診状況と虐待重症度のクロス表

虐待重症度の一番低い「虐待の危惧あり」は「受診した」報告が多く、中度虐待では「受診していない」報告が多かった。これは3～6 か月健診の受診状況が、虐待の重症度の指標になり得ることを示す所見といえる。また、重度虐待と生命の危険ありは「年齢未到達」との報告が多く、特に生命に危険のある事例においては、3～6 か月健診のチェックより早期のチェックが必要となることを意味する結果であると言えよう。

Q12① 3～6か月健診の受診状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
受診した（可能性が高い）	頻度	<b>649</b>	1504	758	124	11	<b>83</b>	3129
	カテゴリ別の%	55.7%	51.3%	48.9%	52.1%	40.7%	37.9%	51.0%
受診していない（可能性が高い）	頻度	17	53	<b>42</b>	5	1	1	119
	カテゴリ別の%	1.5%	1.8%	2.7%	2.1%	3.7%	0.5%	1.9%
年齢未到達	頻度	20	<b>37</b>	25	<b>9</b>	<b>9</b>	1	101
	カテゴリ別の%	1.7%	1.3%	1.6%	3.8%	33.3%	0.5%	1.6%
不明	頻度	<b>479</b>	1337	726	100	<b>6</b>	<b>134</b>	2782
	カテゴリ別の%	41.1%	45.6%	46.8%	42.0%	22.2%	61.2%	45.4%
	総数	1165	2931	1551	238	27	219	6131

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### Q12②. 1歳6か月検診の受診状況

- 「受診した（可能性が高い）」が44.9%で、「受診していない（可能性がある）」2.7%を大きく上回った。

Q12② 1歳6ヶ月健診の受診状況

	度数	%	%グラフ
受診した（可能性が高い）	2830	44.9	
受診していない（可能性が高い）	168	2.7	
年齢未到達	424	6.7	
不明	2647	42.0	
無回答	231	3.7	
合計	6300	100	

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「受診した（可能性がある）」が34.1%であり、今回の調査結果の方がやや上回っている。また、平成 25 年度調査では、「不明」が54.1%と半数以上を占めたが今回は35.0%と受診の有無を確認するようになってきたことがうかがわれる。

虐待事例で半数程度しか受診が確認できないことは、1歳6か月健診は一般の受診率は9割を超えていることを考えれば、非常に低いといえる。1歳6か月健診に来ないことが虐待リスクの指標になる可能性があらためて示唆される。

### 1歳6か月健診の受診状況と虐待種別のクロス表

3~6か月健診と同様に、身体的虐待では「不明」、ネグレクトでは「受診していない」報告が多かった。3~6か月健診と異なる所見としては、性的虐待で「受診した」報告が多いことである。これは性的虐待が、家庭機能や養育機能全体の低下とは別の要因で起きる虐待であることを示していると思われる。

Q12② 1歳6か月健診の受診状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
		頻度	665	449	57	<u>36</u>	687	
受診した (可能性が高い)	カテゴリ別の%	47.7%	44.4%	47.1%	60.0%	47.7%	45.9%	46.7%
受診していない (可能性が高い)	頻度	29	<u>60</u>	<u>8</u>	0	31	<u>40</u>	168
	カテゴリ別の%	2.1%	5.9%	6.6%	0.0%	2.2%	2.0%	2.8%
年齢未到達	頻度	<u>48</u>	79	4	<u>0</u>	<u>77</u>	<u>213</u>	421
	カテゴリ別の%	3.4%	7.8%	3.3%	0.0%	5.3%	10.5%	7.0%
不明	頻度	<u>651</u>	424	52	24	645	<u>840</u>	2636
	カテゴリ別の%	46.7%	41.9%	43.0%	40.0%	44.8%	41.5%	43.6%
	総数	1393	1012	121	60	1440	2022	6048

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 1歳6か月健診の受診状況と虐待重症度のクロス表

虐待重症度の一番低い「虐待の危惧あり」で「受診した」「年齢未到達」との報告が多く、中度虐待では「受診していない」との報告がやや多い。これは3~6か月健診と同様、1歳6か月健診の受診状況が、虐待の重症度の指標になり得ることを示している所見といえる。また生命の危機ありは「年齢未到達」との報告も多い。生命の危機が生じる事例が0歳代で頻出することの反映でもあり、このような事例のチェックには1歳6か月時の健診では遅い面があるといえる。

Q12② 1歳6か月健診の受診状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
		頻度	<u>569</u>	1372	<u>661</u>	122	<u>6</u>	
受診した (可能性が高い)	カテゴリ別の%	50.3%	47.6%	43.4%	52.1%	25.0%	34.6%	46.7%
受診していない (可能性が高い)	頻度	<u>19</u>	85	<u>55</u>	6	0	2	167
	カテゴリ別の%	1.7%	2.9%	3.6%	2.6%	0.0%	1.0%	2.8%
年齢未到達	頻度	<u>95</u>	<u>162</u>	117	22	<u>14</u>	9	419
	カテゴリ別の%	8.4%	5.6%	7.7%	9.4%	58.3%	4.3%	7.0%
不明	頻度	<u>448</u>	1266	690	<u>84</u>	<u>4</u>	<u>125</u>	2617
	カテゴリ別の%	39.6%	43.9%	45.3%	35.9%	16.7%	60.1%	43.6%
	総数	1131	2885	1523	234	24	208	6005

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### Q12③. 3歳児検診の受診状況

- 「受診した（可能性が高い）」が38.2%で、「受診していない（可能性が高い）」2.5%を大きく上回った。

Q12③ 3歳児健診の受診状況

	度数	%	%グラフ
受診した（可能性が高い）	2405	38.2	
受診していない（可能性が高い）	157	2.5	
年齢未到達	823	13.1	
不明	2585	41.0	
無回答	330	5.2	
合計	6300	100	

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査では、「受診した（可能性がある）」が 28.9%であり、今回の調査結果の方がやや上回っている。また、平成 25 年調査では「不明」が 52.5%と半数以上を占めたが、今回は 34.2%と受診の有無を確認するようになってきたことがうかがわれる。

#### 3歳児健診の受診状況と虐待種別のクロス表

1歳6か月健診と同様に、身体的虐待では「不明」の報告が、ネグレクトでは「受診していない」報告が、性的虐待は「受診した」報告がそれぞれ多くなっていた。

Q12③ 3歳児健診の受診状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
		頻度	<b>601</b>	387	45	<b>33</b>	578	
受診した（可能性が高い）	カテゴリ別の%	43.8%	39.0%	38.5%	55.0%	40.8%	37.9%	40.3%
受診していない（可能性が高い）	頻度	27	<b>45</b>	<b>7</b>	2	41	<u>35</u>	157
	カテゴリ別の%	2.0%	4.5%	6.0%	3.3%	2.9%	1.8%	2.6%
年齢未到達	頻度	<u>96</u>	149	10	<u>1</u>	174	<b>390</b>	820
	カテゴリ別の%	7.0%	15.0%	8.5%	1.7%	12.3%	19.6%	13.8%
不明	頻度	<b>648</b>	412	55	24	622	<u>813</u>	2574
	カテゴリ別の%	47.2%	41.5%	47.0%	40.0%	44.0%	40.8%	43.3%
	総数	1372	993	117	60	1415	1992	5949

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

**3 歳児検診の受診状況と虐待重症度のクロス表**

虐待の危惧あり・重度虐待・生命の危機ありでは、「年齢未到達」という報告が多かった。また生命の危機ありでは「受診した」報告が低かった。1 歳 6 ヶ月健診と同様、生命の危機が生じる事例は 0 歳代で頻出することの反映であり、3 歳児健診では、深刻な事例を見出す上では時期的に遅い場合が多いことを示していると思われる。

**Q12③ 3歳児健診の受診状況と虐待重症度のクロス集計表**

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
受診した（可能性が高い）	頻度	467	1173	574	98	<u>4</u>	<u>63</u>	2379
	カテゴリ別の%	42.1%	41.4%	38.2%	42.4%	16.7%	30.7%	40.3%
受診していない（可能性が高い）	頻度	29	79	42	5	0	2	157
	カテゴリ別の%	2.6%	2.8%	2.8%	2.2%	0.0%	1.0%	2.7%
年齢未到達	頻度	<b>179</b>	<b>349</b>	209	<b>43</b>	<b>16</b>	21	817
	カテゴリ別の%	16.1%	12.3%	13.9%	18.6%	66.7%	10.2%	13.8%
不明	頻度	<b>435</b>	1234	678	<b>85</b>	<b>4</b>	<b>119</b>	2555
	カテゴリ別の%	39.2%	43.5%	45.1%	36.8%	16.7%	58.0%	43.2%
	総数	1110	2835	1503	231	24	205	5908

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

**Q13. 母子手帳の交付**

- 「不明」が半数近く（48.4%）を占めていた。「不明」3,050 件を除いた 3,250 件のうち、母子手帳交付「あり」は約 98%と高い割合を示していた。

**Q13 母子手帳の交付**

	度数	%	% グラフ
あり	3046	48.3	
なし	69	1.1	
不明	3050	48.4	
無回答	135	2.1	
合計	6300	100	

**\*平成 25 年度調査との比較**

平成 25 年度も、「不明」「無回答」3,895 件を除いた 3,539 件のうち、母子手帳交付「あり」が 99%と今回と同様高い割合であった。

不明が半数程度であり、母子手帳の交付を受けていないことやそれが確認できないことが、虐待事例のサインとなり得る可能性を示唆する。

## 母子手帳の交付と虐待種別のクロス表

ネグレクトは母子手帳「交付あり」の報告が多かった。一方心理的虐待・DV目撃は「交付あり」という報告が相対的に少なく、「不明」報告が多かった。ネグレクトで母子手帳の交付が多いのは、一見矛盾するようだが、ネグレクトでは子どもが低年齢時に頻発するケースが多いため、調査として母子手帳の確認が取られやすいことと関係していると考えられる。一方心理的虐待は、比較的高年齢の子どもが対象になることが多く、母子手帳の確認が難しい事例がふえることがこの所見に結び付いていると思われる。

Q13 母子手帳の交付と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
あり	頻度	708	<b>557</b>	69	37	<b>681</b>	<b>986</b>	3038
	カテゴリ別の%	50.4%	54.4%	56.1%	60.7%	46.8%	47.5%	49.5%
なし	頻度	20	11	<b>5</b>	1	<b>9</b>	23	69
	カテゴリ別の%	1.4%	1.1%	4.1%	1.6%	0.6%	1.1%	1.1%
不明	頻度	677	<b>455</b>	<b>49</b>	<b>23</b>	<b>765</b>	<b>1067</b>	3036
	カテゴリ別の%	48.2%	44.5%	39.8%	37.7%	52.6%	51.4%	49.4%
総数		1405	1023	123	61	1455	2076	6143

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q14. 子供が属する家庭の経済状況

- 全体的には「課税世帯 (49.4%)」が最も高い値を示し、「不明 (33.4%)」「生活保護世帯 (10.0%)」「非課税世帯 (6.5%)」と続いていた。

Q14 子どもが属する世帯の経済状況

	度数	%	%グラフ
生活保護世帯	630	10.0	
非課税世帯	410	6.5	
課税世帯	3115	49.4	
不明	2103	33.4	
無回答	42	0.7	
合計	6300	100	

## \*平成 25 年度調査との比較

「課税世帯」が 40.7% で最も高く、次いで「生活保護世帯」16.5%、「特別区民税または市町村民税の非課税世帯」8.9%であった。前回と比して今回の調査では「課税世帯」の割合が増え、「生活保護世帯」の割合が減っている。一版と比べると生活保護の率はかなり高く、経済的問題が虐待の背景の 1 つであることが示唆される。

### 子どもが属する世帯の経済状況と虐待種別のクロス表

ネグレクト・同居人の虐待放置は「生活保護世帯」「非課税世帯」が多く報告された。一方身体的虐待・性的虐待・心理的虐待（DV目撃）は「課税世帯」が多く報告されていた。各虐待種別特有の主たる虐待者（身体的虐待は父親等男性が、ネグレクトは母親等女性が多い）の経済状況が反映された可能性がある。

Q14 子どもの世帯の経済状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
生活保護世帯	頻度	<u>120</u>	<b>241</b>	<u>37</u>	3	<u>108</u>	<u>119</u>	628
	カテゴリ別の%	8.4%	23.2%	29.6%	5.0%	7.3%	5.7%	10.1%
非課税世帯	頻度	<u>73</u>	<b>148</b>	<u>14</u>	2	<u>73</u>	<u>100</u>	410
	カテゴリ別の%	5.1%	14.2%	11.2%	3.3%	4.9%	4.8%	6.6%
課税世帯	頻度	<b>790</b>	<u>310</u>	<u>44</u>	<b>42</b>	762	<b>1155</b>	3103
	カテゴリ別の%	55.5%	29.8%	35.2%	70.0%	51.4%	54.9%	49.8%
不明	頻度	<u>440</u>	340	<u>30</u>	<u>13</u>	<b>540</b>	729	2092
	カテゴリ別の%	30.9%	32.7%	24.0%	21.7%	36.4%	34.7%	33.6%
	総数	1423	1039	125	60	1483	2103	6233

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 子どもが属する世帯の経済状況と虐待重症度のクロス表

虐待の危惧あり・軽度虐待では「課税世帯」が多く、中度虐待・重度虐待では「生活保護世帯」「非課税世帯」が多い傾向がはっきりと見て取れた。経済的な問題が虐待をより重症にせしめることを反映した結果である。

Q14 子どもの世帯の経済状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
生活保護世帯	頻度	<u>84</u>	293	<b>183</b>	<b>54</b>	1	<u>10</u>	625
	カテゴリ別の%	7.2%	9.9%	11.7%	22.1%	3.8%	4.5%	10.1%
非課税世帯	頻度	<u>61</u>	<u>173</u>	<b>132</b>	<b>33</b>	3	<u>5</u>	407
	カテゴリ別の%	5.2%	5.8%	8.4%	13.5%	11.5%	2.2%	6.6%
課税世帯	頻度	<b>646</b>	<b>1532</b>	<u>731</u>	<u>101</u>	11	<u>66</u>	3087
	カテゴリ別の%	55.1%	51.7%	46.7%	41.4%	42.3%	29.6%	49.9%
不明	頻度	382	963	518	<u>56</u>	11	<b>142</b>	2072
	カテゴリ別の%	32.6%	32.5%	33.1%	23.0%	42.3%	63.7%	33.5%
	総数	1173	2961	1564	244	26	223	6191

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## II. 虐待者について

### Q15. 虐待者の続柄等

- 設問：「虐待者が複数いる場合は、主な2人について「主たる者」「従たる者」として記入してください。虐待によって子どもに一番深刻な影響を与えている者を「主たる者」と判断してください」
- 主たる虐待者は、「実母」が2,904件（46.1%）と最も多く、次いで「実父」2,569件（40.8%）であり、実父母による虐待が9割近くを占めていた。複数の虐待者を報告したケースは2,085件に及んだ。
  - 従たる虐待者では、「実母」1,299件（20.6%）「実父」507件（8.0%）という順になっており、複数の虐待者の少なくともどちらかに一方に実父母がかかわる割合が高いことが伺える。

Q15 虐待者

	主たる虐待者			従たる虐待者		
	度数	%	%グラフ	度数	%	%グラフ
実父	2569	40.8		507	8.0	
継父	132	2.1		32	0.5	
普通養子縁組の養父	216	3.4		53	0.8	
里親	1	0.0		0	0.0	
母の内縁の夫	188	3.0		76	1.2	
実母	2904	46.1		1299	20.6	
継母	15	0.2		7	0.1	
普通養子縁組の養母	12	0.2		8	0.1	
父の内縁の妻	6	0.1		4	0.1	
実の兄弟	3	0.0		5	0.1	
義理の兄弟	1	0.0		2	0.0	
祖父	28	0.4		21	0.3	
祖母	33	0.5		36	0.6	
おじ	15	0.2		4	0.1	
おば	5	0.1		5	0.1	
その他の同居の家族	12	0.2		3	0.0	
その他	35	0.6		12	0.2	
不明	49	0.8		11	0.2	
無回答	76	1.2		4215	66.9	
合計	6300	100		6300	100	

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、7,434 件のうち「実母」が 3,828 件（51.1%）と最も多く、次いで「実父」2,556 件（34.4%）であった。平成 25 年調査と今回の調査を比較すると、実母の割合が 1 割低下し、実父が 1 割増加していた。心理的虐待（DV の目撃）で主たる虐待者として実父が特に多いことを踏まえると、実父の割合増加は主として心理的虐待（DV 目撃）の増加によるものと考えられる。

### 主たる虐待者と虐待種別のクロス表

主たる虐待者と虐待種別の関係を見ると、身体的虐待については、「実母」が最多であったが他の虐待種と比較すると有意ではなく、「継父」「普通養子縁組の養父」「継母」「祖父」「おじ」の割合が、他の種類の虐待と比べると多かった。さらに「実父」が主な虐待者であることが約 4 割で 2 番目に多いが、他の虐待種との比較では低い傾向である。「実父」が特に多いのは心理的虐待（DV）の場合（65.3%）であり、他の虐待種では相対的に低くなったと思われる。

ネグレクト・心理的虐待では、「実母」が最多であり、他の虐待種と比べても有意に多かった。性的虐待は、最多が「実父（48.4%）」で、次が「養父（24.2%）」であり、養父の割合が他の虐待に比べて高かった。心理的虐待（DV）では多い順に、「実父（65.3%）」、「実母（21.1%）」、「母の内縁の夫（4.7%）」、「養父（4.3%）」であり、他の虐待との比較では「実父」「養父」「母の内縁の夫」が高かった。

### 主たる虐待者と虐待重症度のクロス表

重症度で最も高い「生命の危機あり」では「実母（55.6%）」、「実父（25.9%）」が割合として多かった。重度・中度虐待では「実父」「実母」の順に多く、軽度虐待・虐待の危惧ありでは「実母」「実父」の順となる。1 歳未満が約 7 割を占める「生命の危機あり」以外においては、「実父」の方が重度の虐待を生じさせている傾向がうかがわれた。

## 主たる虐待者と虐待種別のクロス表

Q15 主たる虐待者と主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待 待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
実父	頻度	<u>537</u>	<u>151</u>	<u>19</u>	29	<u>465</u>	<u>1359</u>	2560
	カテゴリ別の%	37.8%	14.7%	15.1%	47.5%	31.4%	65.2%	41.3%
継父	頻度	<u>50</u>	<u>5</u>	0	<u>4</u>	25	48	132
	カテゴリ別の%	3.5%	0.5%	0.0%	6.6%	1.7%	2.3%	2.1%
普通養子 縁組の養父	頻度	<u>65</u>	<u>9</u>	<u>0</u>	<u>15</u>	<u>36</u>	<u>91</u>	216
	カテゴリ別の%	4.6%	0.9%	0.0%	24.6%	2.4%	4.4%	3.5%
里親	頻度	0	0	0	0	1	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%
母の内縁の夫	頻度	43	<u>2</u>	<u>14</u>	4	<u>26</u>	<u>99</u>	188
	カテゴリ別の%	3.0%	0.2%	11.1%	6.6%	1.8%	4.7%	3.0%
実母	頻度	658	<u>840</u>	<u>77</u>	<u>5</u>	<u>872</u>	<u>444</u>	2896
	カテゴリ別の%	46.4%	81.7%	61.1%	8.2%	58.8%	21.3%	46.7%
継母	頻度	<u>7</u>	3	1	0	2	2	15
	カテゴリ別の%	0.5%	0.3%	0.8%	0.0%	0.1%	0.1%	0.2%
普通養子 縁組の養母	頻度	3	4	0	0	4	1	12
	カテゴリ別の%	0.2%	0.4%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	0.2%
父の内縁の妻	頻度	0	0	1	0	<u>4</u>	1	6
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.8%	0.0%	0.3%	0.0%	0.1%
実の兄弟	頻度	0	<u>2</u>	0	0	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
義理の兄弟	頻度	0	<u>1</u>	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
祖父	頻度	<u>13</u>	1	1	1	4	8	28
	カテゴリ別の%	0.9%	0.1%	0.8%	1.6%	0.3%	0.4%	0.5%
祖母	頻度	9	5	2	0	12	<u>5</u>	33
	カテゴリ別の%	0.6%	0.5%	1.6%	0.0%	0.8%	0.2%	0.5%
おじ	頻度	<u>7</u>	0	1	<u>2</u>	4	<u>1</u>	15
	カテゴリ別の%	0.5%	0.0%	0.8%	3.3%	0.3%	0.0%	0.2%
おば	頻度	1	2	0	0	0	2	5
	カテゴリ別の%	0.1%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%
その他の 同居家族	頻度	4	0	<u>3</u>	0	4	1	12
	カテゴリ別の%	0.3%	0.0%	2.4%	0.0%	0.3%	0.0%	0.2%
その他	頻度	7	<u>1</u>	<u>7</u>	1	<u>2</u>	17	35
	カテゴリ別の%	0.5%	0.1%	5.6%	1.6%	0.1%	0.8%	0.6%
不明	頻度	15	<u>2</u>	0	0	<u>21</u>	<u>6</u>	44
	カテゴリ別の%	1.1%	0.2%	0.0%	0.0%	1.4%	0.3%	0.7%
	総数	1419	1028	126	61	1482	2085	6201

## 主たる虐待者と虐待重症度のクロス表

Q15 主たる虐待者と主たる虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危機 あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機 あり	不明	合計
実父	頻度	485	<u>1178</u>	<u>710</u>	102	7	<u>70</u>	2552
	カテゴリ別の%	41.3%	40.0%	45.8%	41.5%	25.9%	32.4%	41.4%
継父	頻度	29	58	36	6	0	2	131
	カテゴリ別の%	2.5%	2.0%	2.3%	2.4%	0.0%	0.9%	2.1%
普通養子 縁組の養父	頻度	33	<u>80</u>	<u>73</u>	<u>21</u>	2	6	215
	カテゴリ別の%	2.8%	2.7%	4.7%	8.5%	7.4%	2.8%	3.5%
里親	頻度	<u>1</u>	0	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
母の内縁の夫	頻度	27	91	46	<u>18</u>	1	<u>1</u>	184
	カテゴリ別の%	2.3%	3.1%	3.0%	7.3%	3.7%	0.5%	3.0%
実母	頻度	566	<u>1453</u>	<u>641</u>	<u>91</u>	15	99	2865
	カテゴリ別の%	48.3%	49.3%	41.3%	37.0%	55.6%	45.8%	46.5%
継母	頻度	1	7	4	1	<u>1</u>	1	15
	カテゴリ別の%	0.1%	0.2%	0.3%	0.4%	3.7%	0.5%	0.2%
普通養子 縁組の養母	頻度	1	7	3	1	0	0	12
	カテゴリ別の%	0.1%	0.2%	0.2%	0.4%	0.0%	0.0%	0.2%
父の内縁の妻	頻度	2	4	0	0	0	0	6
	カテゴリ別の%	0.2%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
実の兄弟	頻度	0	2	0	0	0	<u>1</u>	3
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%
義理の兄弟	頻度	0	0	1	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
祖父	頻度	6	13	7	0	0	2	28
	カテゴリ別の%	0.5%	0.4%	0.5%	0.0%	0.0%	0.9%	0.5%
祖母	頻度	6	21	3	1	0	1	32
	カテゴリ別の%	0.5%	0.7%	0.2%	0.4%	0.0%	0.5%	0.5%
おじ	頻度	1	10	4	0	0	0	15
	カテゴリ別の%	0.1%	0.3%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
おば	頻度	2	3	0	0	0	0	5
	カテゴリ別の%	0.2%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
その他の 同居家族	頻度	3	3	3	0	0	<u>3</u>	12
	カテゴリ別の%	0.3%	0.1%	0.2%	0.0%	0.0%	1.4%	0.2%
その他	頻度	7	<u>10</u>	12	<u>4</u>	0	2	35
	カテゴリ別の%	0.6%	0.3%	0.8%	1.6%	0.0%	0.9%	0.6%
不明	頻度	<u>3</u>	<u>6</u>	8	1	1	<u>28</u>	47
	カテゴリ別の%	0.3%	0.2%	0.5%	0.4%	3.7%	13.0%	0.8%
総数		1173	2946	1551	246	27	216	6159

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q15-2. 妊産婦検診の受診 (Q15 主たる虐待者「実母」2904 ケース限定)

- 無回答を除いた 800 件のうち「不明」が 518 件 (64.7%) を占めていた。不明を除いた 282 件では、97% が妊産婦健診を受診していた。特に年齢の高い児童の事例では十分な情報が得られていない面があると思われる。

Q15-2 妊産婦健診の受診状況 (Q15 主たる虐待者が実母のケースのみ)

	度数	%	% グラフ
受けた	274	9.4	
受けていない	8	0.3	
不明	518	17.8	
無回答	2104	72.5	
合計	2904	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、不明が 64.4% と高く、それを除いた件数では 95.4% の母親が妊産婦検診を受診していた。

## Q15-3. 出産時の状況 (Q15 主たる虐待者「実母」2904 ケース限定)

- 無回答を除いた 842 件のうち、不明が 510 件 (60.5%) と最も多く、「通常に病院等で出産」が 300 件 (35.6%) であった。不明を除いた 332 件では、「通常」は 90.3% と大半を占めた。

Q15-3 出産時の状況 (Q15 主たる虐待者が実母のケースのみ)

	度数	%	% グラフ
通常に病院等で出産	300	10.3	
病院等への飛び込み出産	6	0.2	
自宅分娩	24	0.8	
その他	2	0.1	
不明	510	17.6	
無回答	2062	71.0	
合計	2904	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査でも、「不明」「無回答」を除いた 1,621 件のうち、「通常に病院等で出産」が 1,544 件 (95.2%) と最も多く、今回の調査結果と同様であった。

これ以降出てくる「虐待者」は「主たる虐待者」についての回答となる。

## Q16. 虐待者の年齢（受理時）

- 主たる虐待者の平均年齢は 37.4 歳（標準偏差 8.9）であった。
- 30 代が 2,427 件（38.5%）と最も多く、次いで 40 代 1,810 件（28.7%）、20 代 1,228 件（19.5%）と続いており、20～40 代がほぼ 9 割を占めていた。

Q16 虐待者の年齢カテゴリ

	度数	%	% グラフ
10代	78	1.2	
20代	1228	19.5	
30代	2427	38.5	
40代	1810	28.7	
50代以上	361	5.7	
無回答	396	6.3	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、30 代が 40.5%と最も高く、次いで 40 代 28.8%、20 代 20.3%と続いており、20～40 代が過半数を占めており、今回の調査結果でも同様の傾向が示された。

## Q17. 虐待者の就労状況

- 主たる虐待者では、「正規就労」が 45.2%と最も多かった。

Q17 虐待者の就労状況

	度数	%	% グラフ
正規就労	2848	45.2	
非正規雇用	1078	17.1	
内職	19	0.3	
家事専念	627	10.0	
無職	686	10.9	
学生	6	0.1	
その他	59	0.9	
不明	870	13.8	
無回答	107	1.7	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年調査でも、「正規就労」が 35.1%と最も多く、無回答が含まれているため単純比較できないが、今回の調査結果の方が 10%ほど高くなっている。主たる虐待者として父親が増加した反映かもしれない。

### 虐待者の就労状況と虐待種別のクロス表

身体的虐待・DV 目撃・性的虐待では「正規就労」が、ネグレクトでは「無職」「非正規雇用」「家事専念」が多かった。心理的虐待でも「家事専念」が多く報告されていた。

Q17 虐待者の就労状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の 虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
正規就労	頻度	<b>690</b>	<b>188</b>	<b>34</b>	<b>40</b>	<b>563</b>	<b>1327</b>	2842
	カテゴリ別の%	48.6%	18.3%	27.2%	66.7%	38.4%	64.1%	46.0%
非正規雇用	頻度	267	<b>329</b>	<b>34</b>	4	273	<b>170</b>	1077
	カテゴリ別の%	18.8%	31.9%	27.2%	6.7%	18.6%	8.2%	17.4%
内職	頻度	7	5	0	0	7	<u>0</u>	19
	カテゴリ別の%	0.5%	0.5%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.3%
家事専念	頻度	148	<b>124</b>	10	<u>1</u>	<b>206</b>	<b>134</b>	623
	カテゴリ別の%	10.4%	12.0%	8.0%	1.7%	14.1%	6.5%	10.1%
無職	頻度	122	<b>257</b>	<b>33</b>	6	152	<b>114</b>	684
	カテゴリ別の%	<u>8.6%</u>	25.0%	26.4%	10.0%	10.4%	5.5%	11.1%
学生	頻度	2	2	0	0	0	2	6
	カテゴリ別の%	0.1%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%
その他	頻度	11	<b>18</b>	1	1	15	13	59
	カテゴリ別の%	0.8%	1.7%	0.8%	1.7%	1.0%	0.6%	1.0%
不明	頻度	<b>174</b>	<b>107</b>	13	8	<b>250</b>	310	862
	カテゴリ別の%	12.2%	10.4%	10.4%	13.3%	17.1%	15.0%	14.0%
	総数	1421	1030	125	60	1466	2070	6172

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待者の就労状況と虐待種別のクロス表

「虐待の危惧あり」は「正規就労」が多く、「軽度虐待」は「家事専念」、「中度虐待」は「正規就労」と「無職」が多い。「無職」は中度虐待以上のいずれでも報告頻度が高くなっていた。

Q17 虐待者の就労状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
正規就労	頻度	<b>572</b>	1324	<b>750</b>	113	<u>6</u>	<u>61</u>	2826
	カテゴリ別の%	49.3%	45.1%	48.4%	46.1%	23.1%	29.0%	46.1%
非正規雇用	頻度	185	541	265	50	5	<u>23</u>	1069
	カテゴリ別の%	15.9%	18.4%	17.1%	20.4%	19.2%	11.0%	17.5%
内職	頻度	4	7	8	0	0	0	19
	カテゴリ別の%	0.3%	0.2%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%
家事専念	頻度	134	<b>342</b>	<b>114</b>	<u>12</u>	1	16	619
	カテゴリ別の%	11.5%	11.7%	7.4%	4.9%	3.8%	7.6%	10.1%
無職	頻度	121	<b>281</b>	<b>201</b>	<b>55</b>	<b>7</b>	<u>13</u>	678
	カテゴリ別の%	10.4%	9.6%	13.0%	22.4%	26.9%	6.2%	11.1%
学生	頻度	1	3	2	0	0	0	6
	カテゴリ別の%	0.1%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
その他	頻度	14	33	<u>8</u>	0	0	4	59
	カテゴリ別の%	1.2%	1.1%	0.5%	0.0%	0.0%	1.9%	1.0%
不明	頻度	<b>130</b>	404	201	<u>15</u>	7	<b>93</b>	850
	カテゴリ別の%	11.2%	13.8%	13.0%	6.1%	26.9%	44.3%	13.9%
	総数	1161	2935	1549	245	26	210	6126

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q18. 虐待者の最終学歴

- 学歴が明らかな中では、「高校等卒業」が最も多い。「不明」が約 8 割と大半を占めている。

Q18 虐待者の最終学歴

	度数	%	% グラフ
中学校卒業	231	3.7	
高校等中退	227	3.6	
高校等卒業	388	6.2	
短大・高等専門学校卒業	154	2.4	
大学校卒業	234	3.7	
その他	24	0.4	
不明	5005	79.4	
無回答	37	0.6	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「不明」が 70.2%と最も多く、「高校等卒業」が 11.5%と今回よりも多かった。

### 虐待者の最終学歴と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」は高卒・専門・大卒が多く、「ネグレクト」「同居人の虐待放置」は中卒・高卒・高校中退が多く報告されていた。

Q18 虐待者の最終学歴と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
			ネグレクト					
中学校卒業	頻度	50	<b>89</b>	<u>9</u>	2	46	<u>35</u>	231
	カテゴリ別の%	3.5%	8.6%	7.1%	3.3%	3.1%	1.7%	3.7%
高校等中退	頻度	50	<b>81</b>	<b>13</b>	1	43	<u>39</u>	227
	カテゴリ別の%	3.5%	7.8%	10.3%	1.6%	2.9%	1.9%	3.6%
高校等卒業	頻度	<b>106</b>	<b>108</b>	<b>15</b>	4	84	<u>68</u>	385
	カテゴリ別の%	7.4%	10.4%	11.9%	6.6%	5.7%	3.2%	6.2%
短大・専門学校	頻度	<b>51</b>	23	1	2	<b>50</b>	<u>27</u>	154
	カテゴリ別の%	3.6%	2.2%	0.8%	3.3%	3.4%	1.3%	2.5%
大学校卒業	頻度	<b>74</b>	<u>21</u>	4	5	56	74	234
	カテゴリ別の%	5.2%	2.0%	3.2%	8.2%	3.8%	3.5%	3.8%
その他	頻度	6	<b>10</b>	0	1	2	5	24
	カテゴリ別の%	0.4%	1.0%	0.0%	1.6%	0.1%	0.2%	0.4%
不明	頻度	1088	<u>705</u>	<u>84</u>	46	1204	<b>1856</b>	4983
	カテゴリ別の%	76.4%	68.0%	66.7%	75.4%	81.1%	88.2%	79.9%
	総数	1425	1037	126	61	1485	2104	6238

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q19. 虐待者の精神障害の有無

- 調査時（受理時から約6ヶ月後）における精神障害の有無を尋ねる設問である。
- 約半数（53.9%）が「精神障害はないと思われる」であったが、18.9%で「精神障害又はその疑いがある」と報告されていた。
- 平成25年度調査では、心身の状態についての設問であり、精神状況については「精神障害又はその疑い」が16.4%と最も多かった。

Q19 虐待者の精神障害の有無

	度数	%	%グラフ
精神障害又はその疑いがある	1193	18.9	
精神障害はないと思われる	3394	53.9	
不明	1531	24.3	
無回答	182	2.9	
合計	6300	100	

### 虐待者の精神障害の有無と虐待種別のクロス表

精神障害が報告される頻度が多い虐待種として「ネグレクト」、精神障害はないと報告される虐待種としては「身体的虐待」がそれぞれ該当していた。「DV目撃」は精神障害かどうか不明という報告が多かった。

Q19 虐待者の精神障害の有無と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)			心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
			ネグレクト	性的虐待				
精神障害又はその疑いがある	頻度	264	<b>295</b>	33	8	305	<b>280</b>	1185
	カテゴリ別の%	18.8%	28.9%	26.6%	13.1%	21.2%	13.6%	19.4%
精神障害はないと思われる	頻度	<b>820</b>	556	63	34	815	<b>1100</b>	3388
	カテゴリ別の%	58.5%	54.4%	50.8%	55.7%	56.7%	53.6%	55.6%
不明	頻度	<b>317</b>	<b>171</b>	28	19	<b>318</b>	<b>672</b>	1525
	カテゴリ別の%	22.6%	16.7%	22.6%	31.1%	22.1%	32.7%	25.0%
	総数	1401	1022	124	61	1438	2052	6098

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待者の精神障害の有無と虐待重症度のクロス表

虐待重症度が高くなるほど（中度虐待以上）精神障害が報告される頻度が高く、比較的重症度が軽度であるほど（危惧あり・軽度虐待）精神障害はないと報告される頻度が高くなっていった。

Q19 虐待者の精神障害の有無と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
精神障害又はその疑いがある	頻度	<b>185</b>	<b>507</b>	<b>382</b>	<b>81</b>	<b>11</b>	<b>19</b>	1185
	カテゴリ別の%	16.1%	17.4%	24.9%	33.1%	40.7%	10.0%	19.5%
精神障害はないと思われる	頻度	<b>717</b>	<b>1727</b>	<b>750</b>	<b>109</b>	12	<b>52</b>	3367
	カテゴリ別の%	62.5%	59.2%	48.8%	44.5%	44.4%	27.4%	55.5%
不明	頻度	<b>246</b>	<b>684</b>	404	55	4	<b>119</b>	1512
	カテゴリ別の%	21.4%	23.4%	26.3%	22.4%	14.8%	62.6%	24.9%
	総数	1148	2918	1536	245	27	190	6064

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q19-1. 虐待者の精神障害の治療・相談

(Q19「精神障害又はその疑い」回答 1193 ケース限定)

- 精神障害に対する治療・相談について回答のあった 1,193 件のうち、496 件 (41.6%) が治療・相談に行っていた。しかし、「不明」を含む「治療不十分」「治療していない」ケースも半数以上を占めていた。

Q19-1 虐待者の治療相談 (Q19「精神障害がある」と回答ケース限定)

	度数	%	% グラフ
治療・相談に行っている	496	41.6	
治療・相談に行ったが不十分なもの	229	19.2	
治療していないと思われる	325	27.2	
不明	82	6.9	
無回答	61	5.1	
合計	1193	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、心身の状況に対する治療・相談について「定期的受診」「不定期の受診」は 2 割未満であり、過去 5 年間で「治療・相談」の割合が高くなっていると考えられる。

### 虐待者の精神障害の治療相談と虐待重症度のクロス表

精神障害またはその疑いがあるとされた 1193 名を対象として、治療相談の有無と虐待重症度の関連を検討したところ、中度虐待において「治療していない」との報告が多く見られた。また重度虐待においては「治療に行ったが不十分」との報告が多かった。

治療相談の有無と虐待種別の関連も同様に検討したが、明確な関連は認められなかった。

19-1 虐待者の精神障害の治療相談と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危 惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危 機あり	不明	合計
治療・相談に 行っている	頻度	83	213	155	29	4	8	492
	カテゴリ別の%	46.4%	45.2%	42.0%	37.7%	44.4%	42.1%	43.8%
治療・相談に行ったが 不十分なもの	頻度	36	84	71	<b>25</b>	2	9	227
	カテゴリ別の%	20.1%	17.8%	19.2%	32.5%	22.2%	47.4%	20.2%
治療していないと 思われる	頻度	<u>37</u>	136	<b>123</b>	23	2	<u>2</u>	323
	カテゴリ別の%	20.7%	28.9%	33.3%	29.9%	22.2%	10.5%	28.7%
不明	頻度	<b>23</b>	38	<u>20</u>	<u>0</u>	1	<b>0</b>	82
	カテゴリ別の%	12.8%	8.1%	5.4%	0.0%	11.1%	0.0%	7.3%
総数		179	471	369	77	9	19	1124

\***太字**はカイ2乗検定 (もしくはFisherの直接確率計算) および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q19-2. 虐待者の精神障害の種類

(Q19「精神障害又はその疑い」回答 1193 ケース限定：複数回答)

- 報告が多い順に、「感情障害・うつ症状」が39.6%、「パーソナリティ障害」13.2%、「発達障害」13.2%、「アルコール使用障害」11.1%、「知的障害」10.5%、「不安障害・強迫性障害」10.6%、「統合失調症」7.5%であった。また「不明」が7.2%あり、診断の確認できないケースも少なくなかった。
- 平成 25 年度調査の「精神病又はその疑い」を今回は細かく診断名を尋ねたところ、「感情障害・うつ症状」が4割以上を占めていることが明らかになった。さらに「感情障害・うつ症状」はすべての虐待種別で4～5割を占め、特に実母に多いことが示された。

Q19-2 精神障害の種類 (Q19に「精神障害がある」と回答したケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
統合失調症やその類縁疾患	89	7.5	
感情障害・うつ症状	472	39.6	
不安障害・強迫性障害	126	10.6	
身体表現性障害・心身症	11	0.9	
PTSD・適応障害	35	2.9	
摂食障害	14	1.2	
パーソナリティ障害	158	13.2	
知的障害	125	10.5	
発達障害	158	13.2	
アルコール使用障害	132	11.1	
薬物使用障害	39	3.3	
ギャンブル障害	11	0.9	
インターネット依存症	2	0.2	
その他	50	4.2	
不明	86	7.2	
該当ケース数	1193		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

障害のカテゴリーが異なるため、単純に比較できないが、精神障害を持つケースが多いことについては同様の傾向を確認したといえる。「感情障害・うつ症状」が4割存在することが確かめられ、それに対する治療が必要であることが明示された。

調査 2

**虐待者の精神障害（複数回答）と虐待種別のクロス表**

全体としては、「感情障害・うつ症状」がまんべんなく全ての虐待種で4-5割を占めている。また「ネグレクト」において「知的障害」「発達障害」「アルコール使用障害」が多いこと、「DV目撃」において、「アルコール使用障害」が多いことが示された。

**Q19-2 虐待者の精神疾患と主たる虐待種別のクロス集計表**

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)		性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
統合失調症	頻度	14	22	2	0	27	20	85	
	カテゴリ別の%	5.3%	7.5%	6.1%	0.0%	8.9%	7.1%	7.2%	
感情障害・うつ症状	頻度	116	120	14	4	127	<u>88</u>	469	
	カテゴリ別の%	43.9%	40.7%	42.4%	50.0%	41.6%	31.4%	39.6%	
不安障害・強迫性障害	頻度	34	32	1	0	35	23	125	
	カテゴリ別の%	12.9%	10.8%	3.0%	0.0%	11.5%	8.2%	10.5%	
身体表現性障害・心身症	頻度	3	5	2	0	0	0	10	
	カテゴリ別の%	1.1%	1.7%	6.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	
PTSD・適応障害	頻度	7	7	3	0	8	10	35	
	カテゴリ別の%	2.7%	2.4%	9.1%	0.0%	2.6%	3.6%	3.0%	
摂食障害	頻度	7	3	0	0	3	1	14	
	カテゴリ別の%	2.7%	1.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.4%	1.2%	
パーソナリティ障害	頻度	30	35	4	0	41	48	158	
	カテゴリ別の%	11.4%	11.9%	12.1%	0.0%	13.4%	17.1%	13.3%	
知的障害	頻度	22	<u>57</u>	6	2	29	<u>9</u>	125	
	カテゴリ別の%	8.3%	19.3%	18.2%	25.0%	9.5%	3.2%	10.5%	
発達障害	頻度	44	<u>25</u>	2	0	45	42	158	
	カテゴリ別の%	16.7%	8.5%	6.1%	0.0%	14.8%	15.0%	13.3%	
アルコール使用障害	頻度	34	<u>25</u>	2	0	<u>23</u>	<u>48</u>	132	
	カテゴリ別の%	12.9%	8.5%	6.1%	0.0%	7.5%	17.1%	11.1%	
薬物使用障害	頻度	7	8	3	0	7	14	39	
	カテゴリ別の%	2.7%	2.7%	9.1%	0.0%	2.3%	5.0%	3.3%	
ギャンブル障害	頻度	1	6	0	0	4	0	11	
	カテゴリ別の%	0.4%	2.0%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	0.9%	
インターネット依存症	頻度	0	2	0	0	0	0	2	
	カテゴリ別の%	0.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	
その他	頻度	6	10	1	<u>2</u>	<u>20</u>	11	50	
	カテゴリ別の%	2.3%	3.4%	3.0%	25.0%	6.6%	3.9%	4.2%	
不明	頻度	15	14	1	1	<u>30</u>	25	86	
	カテゴリ別の%	5.7%	4.7%	3.0%	12.5%	9.8%	8.9%	7.3%	
	全体	264	295	33	8	305	280	1185	

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待者の精神障害（複数回答）と虐待重症度のクロス表

精神疾患の種類と虐待の重症度との間には、特にはっきりとした関連は見いだせなかった。「虐待の危惧」は「疾患不明」との報告頻度が高かった。

Q19-2 虐待者の精神疾患と主たる重症度のクロス集計表

		虐待の危 惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危 機あり	不明	合計
統合失調症	頻度	15	35	30	4	1	1	86
	カテゴリ別の%	8.1%	6.9%	7.9%	4.9%	9.1%	5.3%	7.3%
感情障害・うつ症状	頻度	77	185	165	29	5	9	470
	カテゴリ別の%	41.6%	36.5%	43.2%	35.8%	45.5%	47.4%	39.7%
不安障害・強迫性障害	頻度	16	53	36	16	0	3	124
	カテゴリ別の%	8.6%	10.5%	9.4%	19.8%	0.0%	15.8%	10.5%
身体表現性障害・ 心身症	頻度	3	2	6	0	0	0	11
	カテゴリ別の%	1.6%	0.4%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%
PTSD・適応障害	頻度	9	<u>9</u>	8	5	1	<u>2</u>	34
	カテゴリ別の%	4.9%	1.8%	2.1%	6.2%	9.1%	10.5%	2.9%
摂食障害	頻度	2	5	3	1	0	<u>2</u>	13
	カテゴリ別の%	1.1%	1.0%	0.8%	1.2%	0.0%	10.5%	1.1%
パーソナリティ障害	頻度	19	64	54	17	2	2	158
	カテゴリ別の%	10.3%	12.6%	14.1%	21.0%	18.2%	10.5%	13.3%
知的障害	頻度	11	52	46	10	3	2	124
	カテゴリ別の%	5.9%	10.3%	12.0%	12.3%	27.3%	10.5%	10.5%
発達障害	頻度	27	61	53	12	1	1	155
	カテゴリ別の%	14.6%	12.0%	13.9%	14.8%	9.1%	5.3%	13.1%
アルコール使用障害	頻度	16	62	47	6	1	0	132
	カテゴリ別の%	8.6%	12.2%	12.3%	7.4%	9.1%	0.0%	11.1%
薬物使用障害	頻度	3	18	14	4	0	0	39
	カテゴリ別の%	1.6%	3.6%	3.7%	4.9%	0.0%	0.0%	3.3%
ギャンブル障害	頻度	0	6	5	0	0	0	11
	カテゴリ別の%	0.0%	1.2%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%
インターネット依存症	頻度	0	0	2	0	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
その他	頻度	9	18	13	<u>10</u>	0	0	50
	カテゴリ別の%	4.9%	3.6%	3.4%	12.3%	0.0%	0.0%	4.2%
不明	頻度	<u>21</u>	49	<u>12</u>	2	0	<u>2</u>	86
	カテゴリ別の%	11.4%	9.7%	3.1%	2.5%	0.0%	10.5%	7.3%
	全体	185	507	382	81	11	19	1185

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

虐待者の精神障害（複数回答）と主たる虐待者のクロス表
----------------------------

Q19-2 虐待者の精神疾患と主たる虐待者のクロス集計表（前半）

		実父	継父	普通養子縁組 の養父	母の内縁の夫	実母	継母	普通養子縁組 の養母	父の内縁の妻
統合失調症	頻度	11	0	0	0	73	0	1	0
	カテゴリ別の%	3.9%	0.0%	0.0%	0.0%	8.8%	0.0%	20.0%	0.0%
感情障害・うつ症状	頻度	<u>82</u>	6	6	2	<u>360</u>	1	<u>4</u>	0
	カテゴリ別の%	28.9%	46.2%	26.1%	25.0%	43.6%	50.0%	80.0%	0.0%
不安障害・強迫性障害	頻度	19	2	0	0	102	0	0	0
	カテゴリ別の%	6.7%	15.4%	0.0%	0.0%	12.4%	0.0%	0.0%	0.0%
身体表現性障害・ 心身症	頻度	2	0	0	0	9	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%
PTSD・適応障害	頻度	5	0	1	0	27	<u>1</u>	0	<u>1</u>
	カテゴリ別の%	1.8%	0.0%	4.3%	0.0%	3.3%	50.0%	0.0%	100.0%
摂食障害	頻度	0	0	0	0	14	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.7%	0.0%	0.0%	0.0%
パーソナリティ障害	頻度	28	1	4	0	121	2	1	0
	カテゴリ別の%	9.9%	7.7%	17.4%	0.0%	14.7%	100.0%	20.0%	0.0%
知的障害	頻度	28	0	0	0	92	0	0	0
	カテゴリ別の%	9.9%	0.0%	0.0%	0.0%	11.2%	0.0%	0.0%	0.0%
発達障害	頻度	<u>67</u>	1	<u>7</u>	0	<u>75</u>	0	0	0
	カテゴリ別の%	23.6%	7.7%	30.4%	0.0%	9.1%	0.0%	0.0%	0.0%
アルコール使用障害	頻度	<u>64</u>	0	5	<u>4</u>	<u>56</u>	0	0	0
	カテゴリ別の%	22.5%	0.0%	21.7%	50.0%	6.8%	0.0%	0.0%	0.0%
薬物使用障害	頻度	9	0	0	2	26	0	0	0
	カテゴリ別の%	3.2%	0.0%	0.0%	25.0%	3.2%	0.0%	0.0%	0.0%
ギャンブル障害	頻度	5	<u>2</u>	0	0	<u>4</u>	0	0	0
	カテゴリ別の%	1.8%	15.4%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%
インターネット依存症	頻度	0	0	0	0	2	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%
その他	頻度	14	1	1	0	33	0	1	0
	カテゴリ別の%	4.9%	7.7%	4.3%	0.0%	4.0%	0.0%	20.0%	0.0%
不明	頻度	24	1	1	<u>2</u>	<u>57</u>	0	0	0
	カテゴリ別の%	8.5%	7.7%	4.3%	25.0%	6.9%	0.0%	0.0%	0.0%
	全体	284	13	23	8	825	2	5	1

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもののだが、期待度数が少ないセルが多すぎ、いずれも $\chi^2$ 検定の適応外になっていることに留意する。

虐待者の精神疾患と主たる虐待者の関連については、まず主たる虐待者の該当項目が多岐に渡る関係で各項目の頻度が少ないものが多く、 $\chi^2$ 検定と残差分析の適応外であることに留意する必要がある。

その上で数値上の傾向を見ていくと、虐待者が「実父」である場合は「発達障害」「アルコール使用障害」が報告される頻度が高い。一方虐待者が実母である場合は、「感情障害」が報告される頻度が高くなっていた。それ以外の虐待者の傾向については頻度が少なすぎて判断が難しい。

Q19-2 虐待者の精神疾患と主たる虐待者のクロス集計表（後半）

		実の兄弟	祖父	祖母	おじ	その他の同居 の家族	その他	不明	合計
統合失調症	頻度	0	0	0	1	0	1	0	87
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	25.0%	0.0%	7.4%
感情障害・うつ症状	頻度	0	<b>2</b>	3	2	0	0	1	469
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	75.0%	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	39.8%
不安障害・強迫性障害	頻度	0	0	0	1	0	0	0	124
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.5%
身体表現性障害・ 心身症	頻度	0	0	0	0	0	0	0	11
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%
PTSD・適応障害	頻度	0	0	0	0	0	0	0	35
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.0%
摂食障害	頻度	0	0	0	0	0	0	0	14
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.2%
パーソナリティ障害	頻度	0	0	0	0	0	0	0	157
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	13.3%
知的障害	頻度	0	0	1	1	0	<b>3</b>	0	125
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	25.0%	50.0%	0.0%	75.0%	0.0%	10.6%
発達障害	頻度	<b>2</b>	0	0	0	<b>1</b>	0	<b>1</b>	154
	カテゴリ別の%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	13.1%
アルコール使用障害	頻度	0	<b>0</b>	0	0	0	0	0	129
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	11.0%
薬物使用障害	頻度	0	0	0	0	0	1	0	38
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	3.2%
ギャンブル障害	頻度	0	0	0	0	0	0	0	11
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%
インターネット依存症	頻度	0	0	0	0	0	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
その他	頻度	0	0	0	0	0	0	0	50
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	4.2%
不明	頻度	0	0	0	0	0	0	<b>0</b>	85
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	7.2%
	全体	2	2	4	2	1	4	1	1177

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものだが、期待度数が少ないセルが多すぎ、いずれも $\chi^2$ 検定の適応外になっていることに留意する。

## Q20. 虐待者の身体障害やその疑い

- 調査時（受理時から約 6 ヶ月後）の状態を尋ねる設問である。
- 「身体障害又は疑いがある」ケースの報告は 1.5%と低かった。
- 「身体障害の有無」と「虐待種別」や「重症度」との関連もあわせて検討したが、明確な傾向は見いだせなかった。

	度数	%	%グラフ
身体障害又はその疑いがある	93	1.5	
ないと思われる	5097	80.9	
不明	969	15.4	
無回答	141	2.2	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「身体的問題がある」ケースは 4%であり、今回よりも多かった。設問表現の変化（「身体的問題がある」→「身体障害又は疑いがある」）によるものである可能性が高い。

## Q21. 虐待者の生育時の状況（複数回答）

- 設問：「主な虐待者自身の生育時（18歳未満）の状況や体験（のうち当てはまるもの全てを選択）」
- 虐待者の生育時の状況は、「不明」が67.1%「ないと思われる」が12.5%を占めた。
  - 具体的回答が得られた中では「ひとり親家族」6.9%が最も多く、「親からの身体的虐待」が5.4%、「両親の別居・離婚」が4.3%。「親からの心理的虐待」が4.2%であった。

Q21 虐待者の生育時の状況（複数回答）

	度数	%	%グラフ
両親とも死亡	12	0.2	
ひとり親家族	434	6.9	■
継親子関係	108	1.7	■
施設体験	92	1.5	■
養子・里親体験	22	0.3	
生活保護受給者	64	1.0	■
親からの心理的虐待	263	4.2	■
親からの身体的虐待	342	5.4	■
親からの性的虐待	17	0.3	
親からの情緒的虐待	125	2.0	■
親からの物理的虐待	61	1.0	■
両親の別居・離婚	268	4.3	■
生育家庭におけるDV	75	1.2	■
生育家庭でのアルコール乱用者の有無	60	1.0	■
生育家庭内の精神障害者の有無	73	1.2	■
生育家庭内に自殺既遂者の有無	24	0.4	
生育家庭に刑務所入所者	11	0.2	
ないと思われる	786	12.5	■
不明	4230	67.1	■
該当ケース数	6300		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

**虐待者の生育時状況（複数回答）と虐待種別のクロス表**

ネグレクトの虐待者は「ひとり親家庭」「両親の別居・離婚」「生活保護受給」「親からの物理的・心理的ネグレクト」の報告頻度が高くなっていった。また身体的虐待の虐待者は「親からの身体的虐待」「ひとり親家庭」の報告頻度が高かった。心理的虐待の虐待者は「親からの心理的虐待」の報告頻度が高く、虐待の親子関連鎖を色濃く物語る結果となった。

**Q21 虐待者の生育時の状況と主たる虐待種別のクロス集計表**

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
両親とも死亡	頻度	0	4	0	0	4	4	12
	カテゴリ別の%	0.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.3%	0.2%	0.2%
ひとり親家庭	頻度	<b>118</b>	<b>146</b>	9	<u>0</u>	92	<u>69</u>	434
	カテゴリ別の%	8.2%	14.0%	7.1%	0.0%	6.2%	3.3%	6.9%
継親子関係	頻度	21	<b>51</b>	<b>5</b>	2	<u>10</u>	<u>19</u>	108
	カテゴリ別の%	1.5%	4.9%	4.0%	3.3%	0.7%	0.9%	1.7%
施設体験	頻度	16	<b>45</b>	3	0	<u>13</u>	<u>15</u>	92
	カテゴリ別の%	1.1%	4.3%	2.4%	0.0%	0.9%	0.7%	1.5%
養子・里親体験	頻度	4	4	2	0	4	8	22
	カテゴリ別の%	0.3%	0.4%	1.6%	0.0%	0.3%	0.4%	0.4%
生活保護受給家庭	頻度	7	<b>44</b>	2	0	<u>2</u>	<u>9</u>	64
	カテゴリ別の%	0.5%	4.2%	1.6%	0.0%	0.1%	0.4%	1.0%
虐待者の親からの 心理的虐待	頻度	70	54	3	1	<b>90</b>	<u>45</u>	263
	カテゴリ別の%	4.9%	5.2%	2.4%	1.6%	6.0%	2.1%	4.2%
虐待者の親からの 身体的虐待	頻度	<b>122</b>	44	8	2	94	<u>72</u>	342
	カテゴリ別の%	8.5%	4.2%	6.3%	3.3%	6.3%	3.4%	5.5%
虐待者の親からの 性的虐待	頻度	6	2	3	0	5	1	17
	カテゴリ別の%	0.4%	0.2%	2.4%	0.0%	0.3%	0.0%	0.3%
虐待者の親からの 情緒的ネグレクト	頻度	28	<b>47</b>	4	0	24	<u>22</u>	125
	カテゴリ別の%	2.0%	4.5%	3.2%	0.0%	1.6%	1.0%	2.0%
虐待者の親からの 物理的ネグレクト	頻度	14	<b>33</b>	0	2	<u>6</u>	<u>6</u>	61
	カテゴリ別の%	1.0%	3.2%	0.0%	3.3%	0.4%	0.3%	1.0%
虐待者の両親の 別居又は離婚	頻度	63	<b>107</b>	6	1	<u>40</u>	<u>50</u>	267
	カテゴリ別の%	4.4%	10.3%	4.8%	1.6%	2.7%	2.4%	4.3%
虐待者の生育家庭に おけるDV	頻度	18	9	2	2	15	29	75
	カテゴリ別の%	1.3%	0.9%	1.6%	3.3%	1.0%	1.4%	1.2%
虐待者の生育家庭に アルコール・薬物乱用者	頻度	15	14	0	0	18	13	60
	カテゴリ別の%	1.0%	1.3%	0.0%	0.0%	1.2%	0.6%	1.0%
虐待者の生育家庭に 精神障害のある者	頻度	14	<b>30</b>	1	0	12	<u>16</u>	73
	カテゴリ別の%	1.0%	2.9%	0.8%	0.0%	0.8%	0.8%	1.2%
虐待者の生育家庭に 自殺既遂又は未遂をした者	頻度	2	12	0	0	3	7	24
	カテゴリ別の%	0.1%	1.2%	0.0%	0.0%	0.2%	0.3%	0.4%
虐待者の生育家庭に 刑務所に行った者	頻度	3	4	0	0	1	3	11
	カテゴリ別の%	0.2%	0.4%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.2%
ないと思われる	頻度	200	123	21	8	199	235	786
	カテゴリ別の%	14.0%	11.8%	16.7%	13.1%	13.3%	11.1%	12.5%
不明	頻度	899	574	<u>71</u>	46	1011	<b>1608</b>	4209
	カテゴリ別の%	62.7%	55.0%	56.3%	75.4%	67.7%	76.2%	67.2%
	総数	1433	1043	126	61	1493	2111	6267

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待者の生育時状況（複数回答）と虐待重症度のクロス表

虐待者の生育時の様々な問題が、現ケースでの虐待の重症度、特に中度虐待以上の深刻な虐待と関連する結果となった。「ひとり親家庭」「親からの虐待（身体的・ネグレクト・心理的）」「両親の別居や離婚」「生育環境でのDV」等が該当する。特に「親からの身体的虐待」「ひとり親家庭」「親からの情緒的ネグレクト」は重度虐待や生命の危機のような重篤例での報告頻度が高くなっていった。

Q21 虐待者の生育時の状況と主たる虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危機 あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機 あり	不明	合計
両親とも死亡	頻度	1	4	3	4	0	0	12
	カテゴリ別の%	0.1%	0.1%	0.2%	1.6%	0.0%	0.0%	0.2%
ひとり親家庭	頻度	<u>64</u>	187	<u>143</u>	<u>26</u>	<u>5</u>	<u>3</u>	428
	カテゴリ別の%	5.4%	6.3%	9.1%	10.5%	18.5%	1.3%	6.9%
継親子関係	頻度	19	<u>41</u>	<u>40</u>	6	1	1	108
	カテゴリ別の%	1.6%	1.4%	2.5%	2.4%	3.7%	0.4%	1.7%
施設体験	頻度	4	52	29	5	<u>2</u>	0	92
	カテゴリ別の%	0.3%	1.7%	1.8%	2.0%	7.4%	0.0%	1.5%
養子・里親体験	頻度	5	11	5	0	0	1	22
	カテゴリ別の%	0.4%	0.4%	0.3%	0.0%	0.0%	0.4%	0.4%
生活保護受給家庭	頻度	<u>2</u>	35	<u>23</u>	3	0	1	64
	カテゴリ別の%	0.2%	1.2%	1.5%	1.2%	0.0%	0.4%	1.0%
虐待者の親からの 心理的虐待	頻度	<u>36</u>	111	<u>99</u>	16	0	<u>0</u>	262
	カテゴリ別の%	3.0%	3.7%	6.3%	6.5%	0.0%	0.0%	4.2%
虐待者の親からの 身体的虐待	頻度	<u>33</u>	<u>140</u>	<u>121</u>	<u>39</u>	<u>4</u>	<u>2</u>	339
	カテゴリ別の%	2.8%	4.7%	7.7%	15.8%	14.8%	0.9%	5.4%
虐待者の親からの 性的虐待	頻度	1	9	3	4	0	0	17
	カテゴリ別の%	0.1%	0.3%	0.2%	1.6%	0.0%	0.0%	0.3%
虐待者の親からの 情緒的ネグレクト	頻度	<u>13</u>	58	39	<u>11</u>	<u>2</u>	1	124
	カテゴリ別の%	1.1%	2.0%	2.5%	4.5%	7.4%	0.4%	2.0%
虐待者の親からの 物理的ネグレクト	頻度	6	26	<u>25</u>	3	1	0	61
	カテゴリ別の%	0.5%	0.9%	1.6%	1.2%	3.7%	0.0%	1.0%
虐待者の両親の 別居又は離婚	頻度	<u>22</u>	124	<u>92</u>	<u>25</u>	2	<u>2</u>	267
	カテゴリ別の%	1.9%	4.2%	5.9%	10.1%	7.4%	0.9%	4.3%
虐待者の生育家庭に おけるDV	頻度	<u>5</u>	29	20	<u>18</u>	1	0	73
	カテゴリ別の%	0.4%	1.0%	1.3%	7.3%	3.7%	0.0%	1.2%
虐待者の生育家庭に アルコール・薬物乱用者	頻度	8	29	14	8	1	0	60
	カテゴリ別の%	0.7%	1.0%	0.9%	3.2%	3.7%	0.0%	1.0%
虐待者の生育家庭に 精神障害のある者	頻度	8	26	30	7	0	2	73
	カテゴリ別の%	0.7%	0.9%	1.9%	2.8%	0.0%	0.9%	1.2%
虐待者の生育家庭に 自殺既遂又は未遂をした者	頻度	5	5	12	1	0	1	24
	カテゴリ別の%	0.4%	0.2%	0.8%	0.4%	0.0%	0.4%	0.4%
虐待者の生育家庭に 刑務所に行った者	頻度	0	3	5	3	0	0	11
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.3%	1.2%	0.0%	0.0%	0.2%
ないと思われる	頻度	<u>185</u>	348	182	30	6	22	773
	カテゴリ別の%	15.6%	11.7%	11.6%	12.1%	22.2%	9.8%	12.4%
不明	頻度	<u>826</u>	<u>2071</u>	<u>991</u>	<u>113</u>	<u>12</u>	<u>179</u>	4192
	カテゴリ別の%	69.8%	69.7%	63.1%	45.7%	44.4%	79.6%	67.3%
	総数	1195	2993	1577	249	27	228	6269

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q22. 虐待者の虐待に対する考え方

▶ 設問：「受理時点の虐待者の虐待についての考え方」

- 「虐待を認め、援助を求める」ケースは 1,179 件（18.7%）であり、「不明」を含め多くのケースでは「虐待を認めない」もしくは「支援を求めない」ケースが大半を占めていた。虐待を認めない虐待者も合計 21.4%に上り、その対応の難しさを伺わせる。

Q22 虐待者の虐待に対する考え方

	度数	%	%グラフ
行為も虐待も認めない	423	6.7	
行為は認めるが虐待は認めない	925	14.7	
虐待を認めるが、援助は求めない	2137	33.9	
虐待を認め、援助を求める	1179	18.7	
不明	1517	24.1	
無回答	119	1.9	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「虐待を認め、支援を求める」が 21%にとどまり、虐待を認めず、支援も求めないケースが大半を占めていた。虐待を認めていない虐待者は 30.8%で、今回の調査（21.8%）の方が低い割合である。

### 虐待者の虐待に対する考え方と被虐待児年齢カテゴリのクロス表

被虐待児が 1 歳未満のときは、虐待者が「行為も虐待も認めない」頻度が高くなり、被虐待児が 12-14 歳のときは、虐待者が「行為は認めるが虐待は認めない」頻度が高くなっていた。

Q22 虐待者の虐待についての考え方と被虐待児年齢カテゴリのクロス集計表

		1歳未満	1～5歳	6～11歳	12～14歳	15歳以上	合計
行為も虐待も認めない	頻度	<b>41</b>	160	130	61	29	421
	カテゴリ別の%	10.5%	7.4%	6.1%	6.6%	5.5%	6.9%
行為は認めるが 虐待は認めない	頻度	50	311	318	<b>161</b>	78	918
	カテゴリ別の%	12.8%	14.4%	14.9%	17.5%	14.9%	15.0%
虐待は認めるが 援助は求めない	頻度	133	759	751	296	185	2124
	カテゴリ別の%	33.9%	35.2%	35.1%	32.2%	35.2%	34.6%
虐待を認め 援助を求める	頻度	74	388	435	185	<b>89</b>	1171
	カテゴリ別の%	18.9%	18.0%	20.3%	20.1%	17.0%	19.1%
不明	頻度	94	540	507	216	144	1501
	カテゴリ別の%	24.0%	25.0%	23.7%	23.5%	27.4%	24.5%
総数		392	2158	2141	919	525	6135

\***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待者の虐待に対する考え方と虐待種別のクロス表

ネグレクトは行為を認めるかどうかにかかわらず、「虐待を認めない」割合が高い（ただし同居人の虐待放置については援助を求める傾向）。性的虐待は「行為も虐待も認めない」割合が高い。身体的虐待では虐待を認めない者と認める者の双方が存在するが、「虐待を認め援助を求める」割合が高いのも特徴である。心理的虐待は「行為は認めるものの虐待を認めない」割合が高い。

Q22 虐待者の虐待についての考え方と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
行為も虐待も認めない	頻度	<b>119</b>	<b>135</b>	13	<b>16</b>	92	46	421
	カテゴリ別の%	8.4%	13.1%	10.7%	27.6%	6.3%	2.2%	6.8%
行為は認めるが虐待は認めない	頻度	<b>241</b>	<b>205</b>	21	13	<b>253</b>	189	922
	カテゴリ別の%	17.1%	19.9%	17.2%	22.4%	17.3%	9.1%	15.0%
虐待は認めるが援助は求めない	頻度	<b>413</b>	<b>298</b>	<b>30</b>	<b>11</b>	<b>478</b>	904	2134
	カテゴリ別の%	29.3%	29.0%	24.6%	19.0%	32.6%	43.6%	34.7%
虐待を認め援助を求める	頻度	<b>393</b>	212	<b>37</b>	<b>2</b>	305	230	1179
	カテゴリ別の%	27.9%	20.6%	30.3%	3.4%	20.8%	11.1%	19.2%
不明	頻度	<b>243</b>	<b>178</b>	<b>21</b>	16	337	704	1499
	カテゴリ別の%	17.2%	17.3%	17.2%	27.6%	23.0%	34.0%	24.4%
	総数	1409	1028	122	58	1465	2073	6155

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 虐待者の虐待に対する考え方と虐待種別のクロス表

全体に、虐待が軽度であるほど「虐待を認める」、もしくは「認めて援助を求める」報告が多く、虐待が重度であるほど「虐待を認めない」報告が多くなる傾向が見られる。特に虐待を認めないケースは重度虐待以上に多い。

Q22 虐待者の虐待についての考え方と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危険あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危険あり	不明	合計
行為も虐待も認めない	頻度	<b>63</b>	<b>172</b>	118	<b>37</b>	<b>7</b>	25	422
	カテゴリ別の%	5.5%	5.9%	7.6%	15.2%	26.9%	11.5%	6.9%
行為は認めるが虐待は認めない	頻度	166	418	245	<b>62</b>	4	26	921
	カテゴリ別の%	14.4%	14.3%	15.9%	25.4%	15.4%	12.0%	15.1%
虐待は認めるが援助は求めない	頻度	398	<b>1115</b>	529	<b>54</b>	<b>1</b>	24	2121
	カテゴリ別の%	34.5%	38.0%	34.3%	22.1%	3.8%	11.1%	34.7%
虐待を認め援助を求める	頻度	210	<b>589</b>	292	53	7	8	1159
	カテゴリ別の%	18.2%	20.1%	18.9%	21.7%	26.9%	3.7%	19.0%
不明	頻度	<b>315</b>	<b>638</b>	360	<b>38</b>	7	134	1492
	カテゴリ別の%	27.3%	21.8%	23.3%	15.6%	26.9%	61.8%	24.4%
	総数	1152	2932	1544	244	26	217	6115

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

調査 2

**虐待者の虐待に対する考え方と主たる虐待者のクロス表**

まず主たる虐待者の該当項目が多岐に渡る関係で各項目の頻度が少ないものが多く、 $\chi^2$  検定と残差分析の適応外であることに留意する必要がある。

その上で数値上の傾向を見ていくと、虐待者が「実父」である場合は「虐待は認めるが援助は求めない」報告頻度が高く、「実母」の場合は「行為も虐待も認めない」「行為認めるが虐待認めない」と「虐待を認め援助を求める」の双方が高くなっていることが読み取れる。

**Q22 虐待者の虐待についての考え方と主たる虐待者のクロス集計表（前半）**

		実父	継父	養子縁組 の養父	里親	母の内縁 の夫	実母	継母	養子縁組 の養母	父の内縁 の妻
行為も虐待も認めない	頻度	<u>117</u>	8	12	0	<u>20</u>	<u>236</u>	2	1	0
	カテゴリ別の%	4.6%	6.2%	5.7%	0.0%	10.8%	8.3%	13.3%	8.3%	0.0%
行為は認めるが 虐待は認めない	頻度	<u>332</u>	18	28	0	32	<u>460</u>	3	<u>5</u>	<u>4</u>
	カテゴリ別の%	13.2%	13.8%	13.2%	0.0%	17.2%	16.1%	20.0%	41.7%	66.7%
虐待は認めるが 援助は求めない	頻度	<u>967</u>	41	<u>89</u>	0	56	<u>920</u>	6	2	0
	カテゴリ別の%	38.4%	31.5%	42.0%	0.0%	30.1%	32.2%	40.0%	16.7%	0.0%
虐待を認め 援助を求める	頻度	<u>330</u>	23	<u>23</u>	<u>1</u>	<u>14</u>	<u>754</u>	3	<u>3</u>	2
	カテゴリ別の%	13.1%	17.7%	10.8%	100.0%	7.5%	26.4%	20.0%	25.0%	33.3%
不明	頻度	<u>771</u>	40	60	0	<u>64</u>	<u>488</u>	1	1	0
	カテゴリ別の%	30.6%	30.8%	28.3%	0.0%	34.4%	17.1%	6.7%	8.3%	0.0%
	総数	2517	130	212	1	186	2858	15	12	6

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもののだが、期待度数が少ないセルが多すぎ、いずれも $\chi^2$ 検定の適応外になっていることに留意する。

**Q22 虐待者の虐待についての考え方と主たる虐待者のクロス集計表（後半）**

		実の兄弟	義理の兄 弟	祖父	祖母	叔父	叔母	その他の 同居家族	その他	不明	合計
行為も虐待も認めない	頻度	0	0	2	1	2	0	0	2	<u>11</u>	414
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	7.1%	3.1%	13.3%	0.0%	0.0%	5.7%	23.4%	6.8%
行為は認めるが 虐待は認めない	頻度	<u>2</u>	0	<u>12</u>	<u>9</u>	1	2	2	3	3	916
	カテゴリ別の%	66.7%	0.0%	42.9%	28.1%	6.7%	40.0%	16.7%	8.6%	6.4%	15.0%
虐待は認めるが 援助は求めない	頻度	0	0	6	14	6	0	1	12	<u>0</u>	2120
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	21.4%	43.8%	40.0%	0.0%	8.3%	34.3%	0.0%	34.7%
虐待を認め 援助を求める	頻度	0	1	1	2	2	1	1	3	<u>1</u>	1165
	カテゴリ別の%	0.0%	100.0%	3.6%	6.3%	13.3%	20.0%	8.3%	8.6%	2.1%	19.1%
不明	頻度	1	0	7	6	4	2	<u>8</u>	<u>15</u>	<u>32</u>	1500
	カテゴリ別の%	33.3%	0.0%	25.0%	18.8%	26.7%	40.0%	66.7%	42.9%	68.1%	24.5%
	総数	3	1	28	32	15	5	12	35	47	6115

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもののだが、期待度数が少ないセルが多すぎ、いずれも $\chi^2$ 検定の適応外になっていることに留意する。

### Ⅲ. 虐待の要因、結果について

#### Q23. 被虐待児の生育歴等の状況（複数回答）

- 「ないと思われる」「不明」以外では、「発達障害疑い」が 11.4%と最も多く、「精神発達の遅れ等」6.6%、「問題行動あり」6.9%、「分離体験」5.1%が続いていた。
- 「ないと思われる」は 43.7%で、半数近くの子どもに生育歴等の状況上の問題はないという報告となった。

Q23 被虐待児の生育歴等の状況（複数回答）

	度数	%	%グラフ
予期しない妊娠	262	4.2	■
未熟児	71	1.1	■
双子児	65	1.0	■
長期入院	17	0.3	■
分離体験	320	5.1	■
身体発達の遅れ	87	1.4	■
病弱・慢性疾患	61	1.0	■
精神発達の遅れ等	414	6.6	■
発達障害疑い	718	11.4	■
問題行動あり	435	6.9	■
その他	122	1.9	■
ないと思われる	2736	43.4	■
不明	1607	25.5	■
該当ケース数	6300		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「特になし」「不明」を除いた「問題あり」35.7%のうち、「問題行動あり」（15.6%）が最も多く、「精神発達の遅れや知的障害」7.5%、「発達障害」6.9%などが続き、該当する問題の傾向は似通っているが、今回の調査では「発達障害疑い」の占める割合が高くなっていた。

<b>生育状況（複数回答）と性別のクロス表</b>
---------------------------

被虐待児の生育歴と被虐待児の性別においては、「精神発達の遅れ」、「発達障害疑い」、「問題行動」については男児がより報告される頻度が高く、「(両親との) 分離体験」「(生育歴の) 問題がない」については女児の方が報告される頻度が高い結果となった。

**Q23 生育歴と被虐待児の性別のクロス集計表**

		男児	女児	合計
予期しない妊娠	頻度	130	131	261
	カテゴリ別の%	3.9%	4.4%	4.2%
未熟児	頻度	37	34	71
	カテゴリ別の%	1.1%	1.2%	1.1%
双子児	頻度	38	27	65
	カテゴリ別の%	1.1%	0.9%	1.0%
長期入院	頻度	8	9	17
	カテゴリ別の%	0.2%	0.3%	0.3%
分離体験	頻度	149	<b>170</b>	319
	カテゴリ別の%	4.5%	5.8%	5.1%
身体発達の遅れ	頻度	51	36	87
	カテゴリ別の%	1.5%	1.2%	1.4%
病弱・慢性疾患	頻度	30	31	61
	カテゴリ別の%	0.9%	1.0%	1.0%
精神発達の遅れ等	頻度	<b>259</b>	153	412
	カテゴリ別の%	7.8%	5.2%	6.6%
発達障害疑い	頻度	<b>503</b>	214	717
	カテゴリ別の%	15.2%	7.2%	11.4%
問題行動あり	頻度	<b>267</b>	168	435
	カテゴリ別の%	8.0%	5.7%	6.9%
その他	頻度	66	56	122
	カテゴリ別の%	2.0%	1.9%	1.9%
ないと思われる	頻度	1351	<b>1375</b>	2726
	カテゴリ別の%	40.7%	46.6%	43.5%
不明	頻度	820	775	1595
	カテゴリ別の%	24.7%	26.2%	25.4%
総数		3317	2953	6269

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 生育状況（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

年齢カテゴリー別の生育状況の特徴を見たところ、1歳未満では「予期しない妊娠」「未熟児」「病弱・慢性疾患」「問題はない」の頻度が高かった。1-5歳は「予期しない妊娠」「双子児」「問題ない」の頻度が高かった。6-11歳は「発達障害疑い」「問題行動あり」の報告が相対的に多く、12-14歳は「双生児」「分離体験」「精神発達の遅れ等」「発達障害疑い」「問題行動あり」の報告が多かった。15歳以上は「分離体験」「精神発達の遅れ等」「問題行動」の報告が多くなっていった。

#### Q23 生育歴と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
予期しない妊娠	頻度	<b>54</b>	<b>107</b>	<b>67</b>	<b>24</b>	<b>8</b>	260
	カテゴリー別の%	13.5%	4.9%	3.1%	2.6%	1.5%	4.2%
未熟児	頻度	<b>16</b>	29	18	8	<u>0</u>	71
	カテゴリー別の%	4.0%	1.3%	0.8%	0.9%	0.0%	1.1%
双子児	頻度	6	<b>31</b>	<b>13</b>	<b>15</b>	<u>0</u>	65
	カテゴリー別の%	1.5%	1.4%	0.6%	1.6%	0.0%	1.0%
長期入院	頻度	7	7	3	0	0	17
	カテゴリー別の%	1.7%	0.3%	0.1%	0.0%	0.0%	0.3%
分離体験	頻度	<b>8</b>	<b>77</b>	123	<b>64</b>	<b>44</b>	316
	カテゴリー別の%	2.0%	3.5%	5.6%	6.9%	8.3%	5.1%
身体発達の遅れ	頻度	6	26	34	15	5	86
	カテゴリー別の%	1.5%	1.2%	1.6%	1.6%	0.9%	1.4%
病弱・慢性疾患	頻度	<b>9</b>	21	16	11	4	61
	カテゴリー別の%	2.2%	1.0%	0.7%	1.2%	0.8%	1.0%
精神発達の遅れ等	頻度	<b>4</b>	<b>121</b>	151	<b>80</b>	<b>54</b>	410
	カテゴリー別の%	1.0%	5.5%	6.9%	8.6%	10.2%	6.6%
発達障害疑い	頻度	<b>3</b>	<b>139</b>	<b>368</b>	<b>151</b>	53	714
	カテゴリー別の%	0.7%	6.3%	16.9%	16.2%	10.0%	11.4%
問題行動あり	頻度	<b>3</b>	<b>59</b>	<b>185</b>	<b>116</b>	<b>67</b>	430
	カテゴリー別の%	0.7%	2.7%	8.5%	12.4%	12.6%	6.9%
その他	頻度	9	38	34	24	<b>17</b>	122
	カテゴリー別の%	2.2%	1.7%	1.6%	2.6%	3.2%	2.0%
ないと思われる	頻度	<b>199</b>	<b>1087</b>	<b>889</b>	<b>368</b>	<b>180</b>	2723
	カテゴリー別の%	49.6%	49.3%	40.8%	39.4%	33.8%	43.6%
不明	頻度	98	594	540	<b>204</b>	<b>154</b>	1590
	カテゴリー別の%	24.4%	27.0%	24.8%	21.9%	28.9%	25.4%
	全体	401	2203	2179	933	532	6248

\***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは有意に低い頻度を示したものの。

<b>生育状況（複数回答）と在学状況のクロス表</b>
-----------------------------

在学状況別の生育状況の特徴は、乳幼児としては「予期しない妊娠」の報告が多かった。また小学校・中学校を中心とする学童期に「問題行動」「発達障害疑い」「精神発達の遅れ」「(両親との)分離体験」が高頻度で報告されていた。学童期の児童の問題行動は家庭外で感知しやすいことの反映とも考えられる。

Q23 生育歴と在学状況のクロス集計表

		保育所							不明	合計
		家庭にいる乳幼児	その他の保育施設	幼稚園	小学校	中学校	高校	その他		
予期しない妊娠	頻度	<b>66</b>	65	12	<u>68</u>	<u>23</u>	<u>6</u>	<b>20</b>	0	260
	カテゴリ別の%	7.4%	5.0%	3.1%	3.1%	2.6%	1.3%	21.3%	0.0%	4.2%
未熟児	頻度	21	12	6	19	7	0	4	0	69
	カテゴリ別の%	2.4%	0.9%	1.6%	0.9%	0.8%	0.0%	4.3%	0.0%	1.1%
双子児	頻度	14	12	6	14	15	0	2	0	63
	カテゴリ別の%	1.6%	0.9%	1.6%	0.6%	1.7%	0.0%	2.1%	0.0%	1.0%
長期入院	頻度	6	2	1	3	0	0	3	0	15
	カテゴリ別の%	0.7%	0.2%	0.3%	0.1%	0.0%	0.0%	3.2%	0.0%	0.2%
分離体験	頻度	<u>22</u>	<u>51</u>	<u>6</u>	123	<b>68</b>	<b>37</b>	8	0	315
	カテゴリ別の%	2.5%	3.9%	1.6%	5.6%	7.7%	8.2%	8.5%	0.0%	5.0%
身体発達の遅れ	頻度	13	17	2	31	14	3	<u>6</u>	0	86
	カテゴリ別の%	1.5%	1.3%	0.5%	1.4%	1.6%	0.7%	6.4%	0.0%	1.4%
病弱・慢性疾患	頻度	15	9	4	17	10	3	3	0	61
	カテゴリ別の%	1.7%	0.7%	1.0%	0.8%	1.1%	0.7%	3.2%	0.0%	1.0%
精神発達の遅れ等	頻度	<u>44</u>	<u>66</u>	17	152	<b>75</b>	39	<b>17</b>	1	411
	カテゴリ別の%	4.9%	5.1%	4.4%	7.0%	8.5%	8.7%	18.1%	2.0%	6.6%
発達障害疑い	頻度	<u>30</u>	<u>97</u>	<u>23</u>	<b>370</b>	<b>143</b>	44	7	0	714
	カテゴリ別の%	3.4%	7.4%	6.0%	16.9%	16.1%	9.8%	7.4%	0.0%	11.4%
問題行動あり	頻度	<u>11</u>	<u>37</u>	<u>12</u>	<b>194</b>	<b>111</b>	<b>57</b>	10	1	433
	カテゴリ別の%	1.2%	2.8%	3.1%	8.9%	12.5%	12.7%	10.6%	2.0%	6.9%
その他	頻度	17	19	10	34	22	<b>14</b>	<b>6</b>	0	122
	カテゴリ別の%	1.9%	1.5%	2.6%	1.6%	2.5%	3.1%	6.4%	0.0%	2.0%
ないと思われる	頻度	451	638	205	890	345	150	20	11	2710
	カテゴリ別の%	50.7%	49.0%	53.4%	40.7%	38.9%	33.3%	21.3%	22.0%	43.4%
不明	頻度	228	354	95	537	<u>191</u>	<b>138</b>	19	<b>32</b>	1594
	カテゴリ別の%	25.6%	27.2%	24.7%	24.6%	21.6%	30.7%	20.2%	64.0%	25.5%
	全体	890	1303	384	2186	886	450	94	50	6243

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 生育状況（複数回答）と虐待種別のクロス表

虐待種別の生育状況の特徴は、身体的虐待には「発達障害疑い」「問題行動あり」「精神発達の遅れ」の頻度が多い。ネグレクトは「予期しない妊娠」「分離体験」「精神発達の遅れ」「未熟児」が多かった。性的虐待は頻度そのものが少ないが、「発達障害の疑い」「精神発達の遅れ」が多かった。心理的虐待はDV目撃も含め、生育状況での問題が報告される頻度が全般に低い傾向が認められた。

Q23 生育歴と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト			心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
			ネグレクト	(同居人の虐待放置)	性的虐待			
予期しない妊娠	頻度	65	<b>95</b>	6	1	<u>43</u>	<u>51</u>	261
	カテゴリ別の%	4.5%	9.1%	4.8%	1.6%	2.9%	2.4%	4.2%
未熟児	頻度	17	<b>26</b>	3	0	15	<u>10</u>	71
	カテゴリ別の%	1.2%	2.5%	2.4%	0.0%	1.0%	0.5%	1.1%
双子児	頻度	12	11	<b>6</b>	1	<b>29</b>	<u>6</u>	65
	カテゴリ別の%	0.8%	1.1%	4.8%	1.6%	1.9%	0.3%	1.0%
長期入院	頻度	3	9	2	0	2	1	17
	カテゴリ別の%	0.2%	0.9%	1.6%	0.0%	0.1%	0.0%	0.3%
分離体験	頻度	<b>99</b>	<b>84</b>	<b>13</b>	6	69	<u>49</u>	320
	カテゴリ別の%	6.9%	8.1%	10.3%	9.8%	4.6%	2.3%	5.1%
身体発達の遅れ	頻度	21	<b>27</b>	<b>7</b>	2	21	<u>9</u>	87
	カテゴリ別の%	1.5%	2.6%	5.6%	3.3%	1.4%	0.4%	1.4%
病弱・慢性疾患	頻度	12	17	1	0	17	14	61
	カテゴリ別の%	0.8%	1.6%	0.8%	0.0%	1.1%	0.7%	1.0%
精神発達の遅れ等	頻度	<b>114</b>	<b>116</b>	12	<b>10</b>	89	<u>72</u>	413
	カテゴリ別の%	8.0%	11.1%	9.5%	16.4%	6.0%	3.4%	6.6%
発達障害疑い	頻度	<b>308</b>	104	<b>30</b>	<b>12</b>	153	<u>111</u>	718
	カテゴリ別の%	21.5%	10.0%	23.8%	19.7%	10.2%	5.3%	11.5%
問題行動あり	頻度	<b>225</b>	70	11	8	<u>76</u>	<u>45</u>	435
	カテゴリ別の%	15.7%	6.7%	8.7%	13.1%	5.1%	2.1%	6.9%
その他	頻度	29	19	5	3	28	38	122
	カテゴリ別の%	2.0%	1.8%	4.0%	4.9%	1.9%	1.8%	1.9%
ないと思われる	頻度	<u>484</u>	<u>423</u>	<u>43</u>	<u>16</u>	678	<b>1081</b>	2725
	カテゴリ別の%	33.8%	40.6%	34.1%	26.2%	45.4%	51.2%	43.5%
不明	頻度	<u>280</u>	<u>215</u>	<u>19</u>	17	407	<b>656</b>	1594
	カテゴリ別の%	19.5%	20.6%	15.1%	27.9%	27.3%	31.1%	25.4%
	総数	1433	1043	126	61	1493	2111	6267

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したもの。

<b>生育状況（複数回答）と虐待重症度のクロス表</b>
------------------------------

虐待重症度別の生育状況の特徴は、虐待の危惧ありと軽度虐待は「問題がない」と報告される頻度が高い。中度虐待は「発達障害疑い」「問題行動あり」「精神発達の遅れ」「分離体験」などの問題が報告される頻度が高かった。重度虐待も同様の傾向であった。また重度虐待と生命の危機ありにおいて、「予期しない妊娠」の報告頻度が高くなっていた。一方「予期しない妊娠」は虐待危惧ありにおいても頻度が高いことから、複数のリスクの一つとして機能していると考えられた。

Q23 生育歴と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
予期しない妊娠	頻度	<b>36</b>	<u>104</u>	74	<b>34</b>	<b>10</b>	<u>3</u>	261
	カテゴリ別の%	3.0%	3.5%	4.7%	13.8%	37.0%	1.3%	4.2%
未熟児	頻度	11	17	23	12	2	5	70
	カテゴリ別の%	0.9%	0.6%	1.5%	4.9%	7.4%	2.2%	1.1%
双子児	頻度	19	18	19	9	0	0	65
	カテゴリ別の%	1.6%	0.6%	1.2%	3.6%	0.0%	0.0%	1.0%
長期入院	頻度	3	8	2	3	1	0	17
	カテゴリ別の%	0.3%	0.3%	0.1%	1.2%	3.7%	0.0%	0.3%
分離体験	頻度	<u>46</u>	142	<b>99</b>	<b>28</b>	2	<u>2</u>	319
	カテゴリ別の%	3.9%	4.8%	6.3%	11.3%	7.4%	0.9%	5.1%
身体発達の遅れ	頻度	13	35	27	10	0	1	86
	カテゴリ別の%	1.1%	1.2%	1.7%	4.0%	0.0%	0.4%	1.4%
病弱・慢性疾患	頻度	7	25	22	3	1	2	60
	カテゴリ別の%	0.6%	0.8%	1.4%	1.2%	3.7%	0.9%	1.0%
精神発達の遅れ等	頻度	<u>63</u>	<u>168</u>	<b>127</b>	<b>43</b>	2	11	414
	カテゴリ別の%	5.3%	5.7%	8.1%	17.4%	7.4%	4.9%	6.7%
発達障害疑い	頻度	<u>90</u>	353	<b>212</b>	<b>40</b>	5	<u>12</u>	712
	カテゴリ別の%	7.6%	11.9%	13.5%	16.2%	18.5%	5.3%	11.4%
問題行動あり	頻度	<u>39</u>	210	<b>148</b>	<b>26</b>	3	<u>6</u>	432
	カテゴリ別の%	3.3%	7.1%	9.4%	10.5%	11.1%	2.7%	6.9%
その他	頻度	28	46	34	7	1	4	120
	カテゴリ別の%	2.4%	1.5%	2.2%	2.8%	3.7%	1.8%	1.9%
ないと思われる	頻度	<b>583</b>	<b>1341</b>	656	<u>72</u>	<u>4</u>	<u>52</u>	2708
	カテゴリ別の%	49.2%	45.1%	41.8%	29.1%	14.8%	23.1%	43.5%
不明	頻度	314	749	<u>346</u>	<u>34</u>	6	<b>133</b>	1582
	カテゴリ別の%	26.5%	25.2%	22.0%	13.8%	22.2%	59.1%	25.4%
	全体	1184	2972	1570	247	27	225	6225

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したもの。

## Q24. 被虐待児が生育期に経験した家庭・家族状況（複数回答）

- 「夫婦間不和」が33.0%と最も多く、次いで「ひとり親家庭」26.0%、「DV」24.0%、「養育者の別居または離婚」19.9%、「経済的な困難」16.8%などが高い割合を示していた。

Q24 被虐待児が生育期に経験した家庭・家族の状況（複数回答）

	度数	%	%グラフ
経済的な困難	1060	16.8	
不安定な就労	544	8.6	
ひとり親家庭	1639	26.0	
ステップファミリー	721	11.4	
DV	1513	24.0	
夫婦間不和	2079	33.0	
夫婦間以外の家族観の不和	436	6.9	
養育者の別居または離婚	1256	19.9	
親族・近隣・友人等からの孤立	231	3.7	
若年出産	332	5.3	
育児疲れ	387	6.1	
育児に嫌悪感、拒否感情	204	3.2	
狭い又は劣悪な住環境	314	5.0	
ひんぱんな転居	239	3.8	
病気や障害を持つ家族の世話	142	2.3	
きょうだいが今回の虐待者から虐待を受けた	780	12.4	
アルコール等を乱用する者がいた	260	4.1	
精神障害・知的障害等のある者がいた	706	11.2	
自殺（未遂者含む）者がいた	74	1.2	
家族で刑務所に入った者がいた	90	1.4	
その他	103	1.6	
ないと思われる	796	12.6	
不明	803	12.7	
該当ケース数	6300		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、今回の調査での選択肢にはなかった「虐待者の心身の状態」32.2%と最も高い割合を示していた。次いで「経済的な困難」26.0%、「ひとり親家庭」24.2%、「夫婦間不和」21.0%などが高い割合を示していた。

## 調査 2

※家庭状況と性別については関連が認められなかったのでクロス表の掲載はしていない

### 家庭状況（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

家庭状況と年齢カテゴリーの特徴として、1歳未満の場合「若年出産」「ないと思われる」の報告頻度が他年齢に比べて高く、1-5歳では「育児疲れ」「若年出産」「ないと思われる」の報告頻度が高い。6-11歳では「ひとり親家庭」「養育者の別居または離婚」の報告頻度が高くなる。12-14歳では6-11歳と同様の傾向だが、それに加えて「ステップファミリー」「親族・近隣・友人等からの孤立」の報告頻度も高い。12歳以上の年齢層の「アルコール等の乱用者がいた」「病気や障害を持つ家族の世話」の報告の高さも特徴的であった。

### 家庭状況（複数回答）と虐待種別のクロス表

家庭状況と虐待種別の特徴として、身体的虐待は「ひとり親家庭」「育児疲れ」「育児嫌悪・拒否感情」の頻度が高い。ネグレクトは全般に家庭状況の問題が多く、「ひとり親家庭」「経済的な困難」「養育者の別居または離婚」「不安定な就労」「劣悪な住環境」「若年出産」「頻繁な転居」「親族・近隣・友人等からの孤立」「育児疲れ」などが並ぶ。性的虐待は「きょうだい虐待を受けた」「精神障害・知的障害等のある家族がいた」の報告頻度が高い。心理的虐待は「きょうだい虐待を受けた」「育児疲れ」が特徴だが「ないと思われる」との報告も多い。DV目撃はそのまま「DV」「夫婦間不和」が高くなっている。

### 家庭状況（複数回答）と虐待重症度のクロス表

家庭状況と虐待重症度の特徴としては、全般的に虐待の危惧ありと軽度虐待は問題の報告が少ないのに対し、中度虐待・重度虐待以上になると「夫婦間不和」「DV」「養育者の別居または離婚」「経済的困難」「精神障害・知的障害のある者がいた」「ステップファミリー」「不安定な就労」などを代表とする様々な問題の報告頻度が高くなることである。生命の危機は報告事例そのものが少ないが、「不明」「頻繁な転居」「若年出産」など、なかなか問題を把握しづらい項目の報告頻度が高いのが特徴的である。

## 家庭状況（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

Q24 家庭状況と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
経済的な困難	頻度	57	357	388	157	94	1053
	カテゴリ別の%	14.2%	16.2%	17.8%	16.8%	17.7%	16.9%
不安定な就労	頻度	31	188	195	76	51	541
	カテゴリ別の%	7.7%	8.5%	8.9%	8.1%	9.6%	8.7%
ひとり親家庭	頻度	<u>54</u>	<u>463</u>	<b>666</b>	<b>301</b>	144	1628
	カテゴリ別の%	13.5%	21.0%	30.6%	32.3%	27.1%	26.1%
ステップファミリー	頻度	36	<u>210</u>	271	<b>134</b>	69	720
	カテゴリ別の%	9.0%	9.5%	12.4%	14.4%	13.0%	11.5%
DV	頻度	99	563	517	216	<u>110</u>	1505
	カテゴリ別の%	24.7%	25.6%	23.7%	23.2%	20.7%	24.1%
夫婦間不和	頻度	119	744	745	301	156	2065
	カテゴリ別の%	29.7%	33.8%	34.2%	32.3%	29.3%	33.1%
夫婦以外の 家族間不和	頻度	21	157	166	56	32	432
	カテゴリ別の%	5.2%	7.1%	7.6%	6.0%	6.0%	6.9%
養育者の別居または離婚	頻度	<u>33</u>	<u>355</u>	<b>502</b>	<b>238</b>	120	1248
	カテゴリ別の%	8.2%	16.1%	23.0%	25.5%	22.6%	20.0%
親族・近隣・友人等 からの孤立	頻度	16	82	71	<b>48</b>	<u>14</u>	231
	カテゴリ別の%	4.0%	3.7%	3.3%	5.1%	2.6%	3.7%
若年出産	頻度	<b>30</b>	<b>165</b>	100	<u>24</u>	<u>13</u>	332
	カテゴリ別の%	7.5%	7.5%	4.6%	2.6%	2.4%	5.3%
育児疲れ	頻度	28	<b>182</b>	123	<u>40</u>	<u>11</u>	384
	カテゴリ別の%	7.0%	8.3%	5.6%	4.3%	2.1%	6.1%
育児に嫌悪感、拒否感情	頻度	11	84	66	35	<u>6</u>	202
	カテゴリ別の%	2.7%	3.8%	3.0%	3.8%	1.1%	3.2%
狭いまたは劣悪な住環境	頻度	16	103	116	53	26	314
	カテゴリ別の%	4.0%	4.7%	5.3%	5.7%	4.9%	5.0%
頻繁な転居	頻度	16	95	87	29	11	238
	カテゴリ別の%	4.0%	4.3%	4.0%	3.1%	2.1%	3.8%
病気や障害を持つ 家族の世話	頻度	8	<u>32</u>	41	<b>37</b>	<b>24</b>	142
	カテゴリ別の%	2.0%	1.5%	1.9%	4.0%	4.5%	2.3%
きょうだいが虐待者から 虐待を受けた	頻度	41	263	291	117	63	775
	カテゴリ別の%	10.2%	11.9%	13.4%	12.5%	11.8%	12.4%
アルコール等を 乱用する者がいた	頻度	<u>7</u>	<u>51</u>	89	<b>65</b>	<b>44</b>	256
	カテゴリ別の%	1.7%	2.3%	4.1%	7.0%	8.3%	4.1%
精神障害・知的障害等の ある者がいた	頻度	41	235	251	117	61	705
	カテゴリ別の%	10.2%	10.7%	11.5%	12.5%	11.5%	11.3%
自殺（未遂）者がいた	頻度	4	20	23	14	<b>13</b>	74
	カテゴリ別の%	1.0%	0.9%	1.1%	1.5%	2.4%	1.2%
家族で刑務所に入った 者がいた	頻度	7	28	33	10	11	89
	カテゴリ別の%	1.7%	1.3%	1.5%	1.1%	2.1%	1.4%
その他	頻度	4	<u>24</u>	39	<b>23</b>	12	102
	カテゴリ別の%	1.0%	1.1%	1.8%	2.5%	2.3%	1.6%
ないと思われる	頻度	<b>64</b>	<b>304</b>	<u>245</u>	112	65	790
	カテゴリ別の%	16.0%	13.8%	11.2%	12.0%	12.2%	12.6%
不明	頻度	44	294	265	113	73	789
	カテゴリ別の%	11.0%	13.3%	12.2%	12.1%	13.7%	12.6%
	全体	401	2203	2179	933	532	6248

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものを、イタリックは有意に低い頻度を示したものを。

## 家庭状況（複数回答）と虐待種別のクロス表

Q24 家庭状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的 虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の 虐待放置)	性的虐待	心理的 虐待	心理的 虐待 (DV目 撃)	合計
経済的な困難	頻度	<u>202</u>	<b>382</b>	<b>44</b>	10	<u>205</u>	<u>215</u>	1058
	カテゴリ別の%	14.1%	36.6%	34.9%	16.4%	13.7%	10.2%	16.9%
不安定な就労	頻度	<u>106</u>	<b>195</b>	<b>27</b>	7	112	<u>97</u>	544
	カテゴリ別の%	7.4%	18.7%	21.4%	11.5%	7.5%	4.6%	8.7%
ひとり親家庭	頻度	<b>417</b>	<b>474</b>	<b>61</b>	15	<u>355</u>	<u>315</u>	1637
	カテゴリ別の%	29.1%	45.4%	48.4%	24.6%	23.8%	14.9%	26.1%
ステップファミリー	頻度	169	118	9	12	173	240	721
	カテゴリ別の%	11.8%	11.3%	7.1%	19.7%	11.6%	11.4%	11.5%
DV	頻度	<u>250</u>	<u>140</u>	30	10	<u>193</u>	<b>887</b>	1510
	カテゴリ別の%	17.4%	13.4%	23.8%	16.4%	12.9%	42.0%	24.1%
夫婦間不和	頻度	<u>366</u>	<u>257</u>	42	22	<u>383</u>	<b>1004</b>	2074
	カテゴリ別の%	25.5%	24.6%	33.3%	36.1%	25.7%	47.6%	33.1%
夫婦以外の 家族間の不和	頻度	112	79	<b>20</b>	5	95	<u>125</u>	436
	カテゴリ別の%	7.8%	7.6%	15.9%	8.2%	6.4%	5.9%	7.0%
養育者の別居または離婚	頻度	304	<b>287</b>	<b>43</b>	14	273	<u>333</u>	1254
	カテゴリ別の%	21.2%	27.5%	34.1%	23.0%	18.3%	15.8%	20.0%
親族・近隣・友人等 からの孤立	頻度	61	<b>80</b>	6	3	50	<u>31</u>	231
	カテゴリ別の%	4.3%	7.7%	4.8%	4.9%	3.3%	1.5%	3.7%
若年出産	頻度	74	<b>117</b>	<b>12</b>	5	<u>51</u>	<u>73</u>	332
	カテゴリ別の%	5.2%	11.2%	9.5%	8.2%	3.4%	3.5%	5.3%
育児疲れ	頻度	<b>116</b>	<b>81</b>	10	2	<b>113</b>	<u>65</u>	387
	カテゴリ別の%	8.1%	7.8%	7.9%	3.3%	7.6%	3.1%	6.2%
育児に嫌悪感、拒否感情	頻度	<b>71</b>	<b>52</b>	3	3	50	<u>25</u>	204
	カテゴリ別の%	5.0%	5.0%	2.4%	4.9%	3.3%	1.2%	3.3%
狭いまたは劣悪な住環境	頻度	<u>43</u>	<b>149</b>	<b>21</b>	4	63	<u>34</u>	314
	カテゴリ別の%	3.0%	14.3%	16.7%	6.6%	4.2%	1.6%	5.0%
頻繁な転居	頻度	53	<b>86</b>	<b>10</b>	3	<u>36</u>	<u>51</u>	239
	カテゴリ別の%	3.7%	8.2%	7.9%	4.9%	2.4%	2.4%	3.8%
病気や障害を持つ 家族の世話	頻度	31	<b>42</b>	4	2	43	<u>20</u>	142
	カテゴリ別の%	2.2%	4.0%	3.2%	3.3%	2.9%	0.9%	2.3%
きょうだいが虐待者から 虐待を受けた	頻度	173	144	10	<b>13</b>	<b>271</b>	<u>167</u>	778
	カテゴリ別の%	12.1%	13.8%	7.9%	21.3%	18.2%	7.9%	12.4%
アルコール等を 乱用する者がいた	頻度	58	51	6	1	62	82	260
	カテゴリ別の%	4.0%	4.9%	4.8%	1.6%	4.2%	3.9%	4.1%
精神障害・知的障害等の ある者がいた	頻度	142	<b>170</b>	<b>30</b>	<b>12</b>	183	<u>164</u>	701
	カテゴリ別の%	9.9%	16.3%	23.8%	19.7%	12.3%	7.8%	11.2%
自殺（未遂）者がいた	頻度	13	15	0	<b>3</b>	<b>35</b>	<u>8</u>	74
	カテゴリ別の%	0.9%	1.4%	0.0%	4.9%	2.3%	0.4%	1.2%
家族で刑務所に入った 者がいた	頻度	24	18	4	0	27	<u>17</u>	90
	カテゴリ別の%	1.7%	1.7%	3.2%	0.0%	1.8%	0.8%	1.4%
その他	頻度	29	<b>32</b>	2	2	20	<u>18</u>	103
	カテゴリ別の%	2.0%	3.1%	1.6%	3.3%	1.3%	0.9%	1.6%
ないと思われる	頻度	<b>231</b>	<u>85</u>	13	5	<b>255</b>	<u>205</u>	794
	カテゴリ別の%	16.1%	8.1%	10.3%	8.2%	17.1%	9.7%	12.7%
不明	頻度	184	<u>103</u>	<u>8</u>	5	<b>250</b>	<u>242</u>	792
	カテゴリ別の%	12.8%	9.9%	6.3%	8.2%	16.7%	11.5%	12.6%
	総数	1435	1039	126	60	1497	2112	6269

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## 家庭状況（複数回答）と虐待重症度のクロス表

Q24 家庭状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
経済的な困難	頻度	<u>165</u>	<u>459</u>	<u>322</u>	<u>89</u>	5	<u>15</u>	1055
	カテゴリ別の%	13.9%	15.4%	20.5%	36.0%	18.5%	6.7%	16.9%
不安定な就労	頻度	<u>71</u>	<u>224</u>	<u>179</u>	<u>55</u>	5	<u>4</u>	538
	カテゴリ別の%	6.0%	7.5%	11.4%	22.3%	18.5%	1.8%	8.6%
ひとり親家庭	頻度	<u>276</u>	787	426	<u>93</u>	7	<u>33</u>	1622
	カテゴリ別の%	23.3%	26.5%	27.1%	37.7%	25.9%	14.7%	26.1%
ステップファミリー	頻度	117	<u>305</u>	<u>221</u>	<u>52</u>	2	19	716
	カテゴリ別の%	9.9%	10.3%	14.1%	21.1%	7.4%	8.4%	11.5%
DV	頻度	<u>190</u>	<u>658</u>	<u>507</u>	<u>116</u>	6	<u>25</u>	1502
	カテゴリ別の%	16.0%	22.1%	32.3%	47.0%	22.2%	11.1%	24.1%
夫婦間不和	頻度	382	<u>897</u>	<u>620</u>	<u>109</u>	5	<u>47</u>	2060
	カテゴリ別の%	32.3%	30.2%	39.5%	44.1%	18.5%	20.9%	33.1%
夫婦以外の 家族間の不和	頻度	81	<u>173</u>	<u>128</u>	<u>40</u>	<u>6</u>	<u>3</u>	431
	カテゴリ別の%	6.8%	5.8%	8.2%	16.2%	22.2%	1.3%	6.9%
養育者の別居または離婚	頻度	<u>202</u>	<u>553</u>	<u>367</u>	<u>95</u>	2	<u>27</u>	1246
	カテゴリ別の%	17.1%	18.6%	23.4%	38.5%	7.4%	12.0%	20.0%
親族・近隣・友人等 からの孤立	頻度	38	<u>87</u>	<u>71</u>	<u>30</u>	1	<u>2</u>	229
	カテゴリ別の%	3.2%	2.9%	4.5%	12.1%	3.7%	0.9%	3.7%
若年出産	頻度	<u>45</u>	<u>129</u>	<u>124</u>	<u>24</u>	<u>4</u>	<u>3</u>	329
	カテゴリ別の%	3.8%	4.3%	7.9%	9.7%	14.8%	1.3%	5.3%
育児疲れ	頻度	62	198	100	12	2	10	384
	カテゴリ別の%	5.2%	6.7%	6.4%	4.9%	7.4%	4.4%	6.2%
育児に嫌悪感、拒否感情	頻度	<u>15</u>	96	<u>70</u>	<u>16</u>	2	3	202
	カテゴリ別の%	1.3%	3.2%	4.5%	6.5%	7.4%	1.3%	3.2%
狭いまたは劣悪な住環境	頻度	<u>38</u>	<u>118</u>	<u>111</u>	<u>39</u>	0	<u>4</u>	310
	カテゴリ別の%	3.2%	4.0%	7.1%	15.8%	0.0%	1.8%	5.0%
頻繁な転居	頻度	<u>30</u>	101	65	<u>31</u>	<u>3</u>	5	235
	カテゴリ別の%	2.5%	3.4%	4.1%	12.6%	11.1%	2.2%	3.8%
病気や障害を持つ 家族の世話	頻度	28	<u>53</u>	44	<u>12</u>	1	3	141
	カテゴリ別の%	2.4%	1.8%	2.8%	4.9%	3.7%	1.3%	2.3%
きょうだいが虐待者から 虐待を受けた	頻度	129	361	207	<u>58</u>	<u>0</u>	22	777
	カテゴリ別の%	10.9%	12.1%	13.2%	23.5%	0.0%	9.8%	12.5%
アルコール等を 乱用する者がいた	頻度	<u>25</u>	<u>108</u>	<u>98</u>	<u>21</u>	1	6	259
	カテゴリ別の%	2.1%	3.6%	6.2%	8.5%	3.7%	2.7%	4.2%
精神障害・知的障害等の ある者がいた	頻度	125	<u>269</u>	<u>235</u>	<u>59</u>	4	<u>8</u>	700
	カテゴリ別の%	10.6%	9.1%	15.0%	23.9%	14.8%	3.6%	11.2%
自殺（未遂）者がいた	頻度	10	25	28	7	2	1	73
	カテゴリ別の%	0.8%	0.8%	1.8%	2.8%	7.4%	0.4%	1.2%
家族で刑務所に入った 者がいた	頻度	6	43	32	8	1	0	90
	カテゴリ別の%	0.5%	1.4%	2.0%	3.2%	3.7%	0.0%	1.4%
その他	頻度	8	52	30	4	1	4	99
	カテゴリ別の%	0.7%	1.7%	1.9%	1.6%	3.7%	1.8%	1.6%
ないと思われる	頻度	<u>197</u>	<u>421</u>	<u>126</u>	<u>19</u>	1	<u>17</u>	781
	カテゴリ別の%	16.6%	14.2%	8.0%	7.7%	3.7%	7.6%	12.5%
不明	頻度	164	391	<u>123</u>	<u>12</u>	<u>7</u>	<u>94</u>	791
	カテゴリ別の%	13.9%	13.2%	7.8%	4.9%	25.9%	41.8%	12.7%
	全体	1184	2972	1570	247	27	225	6225

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q25. 被虐待児の虐待による身体状況（複数回答）

▶ 設問：「被虐待児における虐待による調査時の身体状況」

- 「ないと思われる」が8割以上を占めた。該当のある身体状況では、「打撲傷・あざ」が7.5%と最も高く、次いで「不衛生」3.0%となっていた。

Q25 被虐待児の調査時の身体問題（複数回答）

	度数	%	%グラフ
打撲傷・あざ	470	7.5	■
火傷	17	0.3	
刺傷	11	0.2	
骨折	13	0.2	
頭部外傷	53	0.8	
性器の外傷	2	0.0	
妊娠	0	0.0	
栄養不良	49	0.8	
身体的発達の遅れ	40	0.6	
不衛生	190	3.0	■
その他	102	1.6	
ないと思われる	5113	81.2	■
不明	337	5.3	■
該当ケース数	6300		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、今回と同様「特になし」が 71.5%と回答しており、該当のあった中では「打撲傷・あざ」15.3%が最も多く、次いで「性的虐待」1.8%、「頭部外傷」1.6%などが続いていた。今回の調査では「性的虐待」に関する項目はなかったが「性器の外傷」が 2 件報告されていた。

被虐待児の身体的問題（複数回答）と性別のクロス表
--------------------------

打撲傷・あざは男児で多く報告される傾向が認められたものの、おおむね男女で身体的問題に偏りは見いだせなかった。

Q25 被虐待児身体問題と被虐待児の性別のクロス集計表

		男児	女児	合計
打撲傷・あざ	頻度	<b>291</b>	177	468
	カテゴリ別の%	8.8%	6.0%	7.5%
火傷	頻度	10	7	17
	カテゴリ別の%	0.3%	0.2%	0.3%
刺傷	頻度	3	8	11
	カテゴリ別の%	0.1%	0.3%	0.2%
骨折	頻度	7	6	13
	カテゴリ別の%	0.2%	0.2%	0.2%
頭部外傷	頻度	30	23	53
	カテゴリ別の%	0.9%	0.8%	0.8%
性器の外傷	頻度	0	2	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.0%
妊娠	頻度	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%
栄養不良	頻度	31	18	49
	カテゴリ別の%	0.9%	0.6%	0.8%
身体的発達の遅れ	頻度	25	15	40
	カテゴリ別の%	0.8%	0.5%	0.6%
不衛生	頻度	103	87	190
	カテゴリ別の%	3.1%	2.9%	3.0%
その他	頻度	47	55	102
	カテゴリ別の%	1.4%	1.9%	1.6%
ないと思われる	頻度	2674	2422	5096
	カテゴリ別の%	80.6%	82.0%	81.3%
不明	頻度	155	<b>175</b>	330
	カテゴリ別の%	4.7%	5.9%	5.3%
全体		3317	2953	6270

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したもの。

<b>被虐待児の身体的問題（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表</b>
--------------------------------------

被虐待児が 6-11 歳・12-14 歳の場合、「打撲やあざ」の報告頻度が他年齢と比べて高い。また「頭部外傷」「骨折」は 1 歳未満に特徴的であり、「刺し傷」が 12-14 歳・15 歳以上に特徴的だが、全体的な報告例が少ないため解釈には慎重になる必要がある。

**Q25 被虐待児身体問題と年齢カテゴリー（5 段階）のクロス集計表**

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
打撲傷・あざ	頻度	<u>8</u>	<u>131</u>	<u>197</u>	<u>89</u>	43	468
	カテゴリ別の%	2.0%	5.9%	9.0%	9.5%	8.1%	7.5%
火傷	頻度	0	10	4	3	0	17
	カテゴリ別の%	0.0%	0.5%	0.2%	0.3%	0.0%	0.3%
刺傷	頻度	0	2	2	<u>4</u>	<u>3</u>	11
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.1%	0.4%	0.6%	0.2%
骨折	頻度	<u>4</u>	<u>1</u>	3	3	2	13
	カテゴリ別の%	1.0%	0.0%	0.1%	0.3%	0.4%	0.2%
頭部外傷	頻度	<u>12</u>	12	14	8	7	53
	カテゴリ別の%	3.0%	0.5%	0.6%	0.9%	1.3%	0.8%
性器の外傷	頻度	0	0	0	1	1	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.2%	0.0%
妊娠	頻度	0	0	0	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
栄養不良	頻度	5	13	22	6	2	48
	カテゴリ別の%	1.2%	0.6%	1.0%	0.6%	0.4%	0.8%
身体的発達の遅れ	頻度	3	16	16	4	1	40
	カテゴリ別の%	0.7%	0.7%	0.7%	0.4%	0.2%	0.6%
不衛生	頻度	13	73	70	26	8	190
	カテゴリ別の%	3.2%	3.3%	3.2%	2.8%	1.5%	3.0%
その他	頻度	12	34	29	18	9	102
	カテゴリ別の%	3.0%	1.5%	1.3%	1.9%	1.7%	1.6%
ないと思われる	頻度	332	1812	1772	739	429	5084
	カテゴリ別の%	82.8%	82.3%	81.3%	79.2%	80.6%	81.4%
不明	頻度	18	130	92	48	34	322
	カテゴリ別の%	4.5%	5.9%	4.2%	5.1%	6.4%	5.2%
	総数	401	2203	2179	933	532	6248

\***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。**イタリック**は有意に低い頻度を示したものの。

### 被虐待児の身体的問題（複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

当然ではあるが身体的虐待において、身体的問題の報告頻度が高い（「打撲傷・あざ」「頭部外傷」の順）。またネグレクトでは「不衛生」「栄養不良」「発達の遅れ」といった身体的な世話の不足と関連した問題の頻度が高くなっていた。DV 目撃も含む心理的虐待は「ないと思われる」が9割以上を占めていた。

Q25 被虐待児身体問題と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト（同居人の虐待	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV目撃）	合計
打撲傷・あざ	頻度	<b>394</b>	<b>30</b>	<b>23</b>	<u>0</u>	<u>17</u>	<u>4</u>	468
	カテゴリ別の%	27.5%	2.9%	18.3%	0.0%	1.1%	0.2%	7.5%
火傷	頻度	<b>11</b>	<b>6</b>	0	0	<u>0</u>	<u>0</u>	17
	カテゴリ別の%	0.8%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%
刺傷	頻度	<b>8</b>	2	0	0	1	<u>0</u>	11
	カテゴリ別の%	0.6%	0.2%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.2%
骨折	頻度	<b>10</b>	1	0	0	1	<u>0</u>	12
	カテゴリ別の%	0.7%	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.2%
頭部外傷	頻度	<b>42</b>	5	1	0	<u>3</u>	<u>2</u>	53
	カテゴリ別の%	2.9%	0.5%	0.8%	0.0%	0.2%	0.1%	0.8%
性器の外傷	頻度	0	0	<b>1</b>	<b>1</b>	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.8%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%
妊娠	頻度	0	0	0	0	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
栄養不良	頻度	6	<b>36</b>	2	0	<u>4</u>	<u>1</u>	49
	カテゴリ別の%	0.4%	3.5%	1.6%	0.0%	0.3%	0.0%	0.8%
身体的発達の遅れ	頻度	7	<b>22</b>	2	0	<u>2</u>	<u>7</u>	40
	カテゴリ別の%	0.5%	2.1%	1.6%	0.0%	0.1%	0.3%	0.6%
不衛生	頻度	<u>19</u>	<b>134</b>	<b>9</b>	1	<u>11</u>	<u>16</u>	190
	カテゴリ別の%	1.3%	12.8%	7.1%	1.6%	0.7%	0.8%	3.0%
その他	頻度	<b>42</b>	<b>34</b>	3	<b>3</b>	<u>9</u>	<u>11</u>	102
	カテゴリ別の%	2.9%	3.3%	2.4%	4.9%	0.6%	0.5%	1.6%
ないと思われる	頻度	<u>856</u>	<u>780</u>	<u>79</u>	51	<b>1348</b>	<b>1984</b>	5098
	カテゴリ別の%	59.7%	74.8%	62.7%	83.6%	90.3%	94.0%	81.3%
不明	頻度	79	48	10	5	<b>100</b>	<u>88</u>	330
	カテゴリ別の%	5.5%	4.6%	7.9%	8.2%	6.7%	4.2%	5.3%
	全体	1433	1043	126	61	1493	2111	6267

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 被虐待児の身体的問題（複数回答）と虐待重症度のクロス表

身体的虐待の反映と見られる「打撲傷・あざ」「頭部外傷」は重度虐待以上での報告例が多い。またネグレクトの反映と考えられる「不衛生」「栄養不良」「身体発達の遅れ」も重度虐待以上での報告が多くなる。逆に「ないと思われる」は軽度虐待や虐待の危惧ありのケースでの報告が多い。

Q25 被虐待児身体問題と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
打撲傷・あざ	頻度	<u>18</u>	<u>175</u>	<u>214</u>	<u>50</u>	4	<u>8</u>	469
	カテゴリ別の%	1.5%	5.9%	13.6%	20.2%	14.8%	3.6%	7.5%
火傷	頻度	1	6	5	<u>3</u>	<u>2</u>	0	17
	カテゴリ別の%	0.1%	0.2%	0.3%	1.2%	7.4%	0.0%	0.3%
刺傷	頻度	1	<u>1</u>	5	<u>3</u>	0	1	11
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.3%	1.2%	0.0%	0.4%	0.2%
骨折	頻度	2	<u>0</u>	2	<u>7</u>	0	<u>2</u>	13
	カテゴリ別の%	0.2%	0.0%	0.1%	2.8%	0.0%	0.9%	0.2%
頭部外傷	頻度	5	<u>13</u>	13	<u>15</u>	<u>6</u>	1	53
	カテゴリ別の%	0.4%	0.4%	0.8%	6.1%	22.2%	0.4%	0.9%
性器の外傷	頻度	0	0	0	<u>2</u>	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%
妊娠	頻度	0	0	0	0	0	0	0
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
栄養不良	頻度	4	<u>10</u>	<u>23</u>	<u>9</u>	1	1	48
	カテゴリ別の%	0.3%	0.3%	1.5%	3.6%	3.7%	0.4%	0.8%
身体的発達の遅れ	頻度	<u>1</u>	<u>12</u>	<u>18</u>	<u>8</u>	0	0	39
	カテゴリ別の%	0.1%	0.4%	1.1%	3.2%	0.0%	0.0%	0.6%
不衛生	頻度	<u>25</u>	78	<u>61</u>	<u>25</u>	0	<u>1</u>	190
	カテゴリ別の%	2.1%	2.6%	3.9%	10.1%	0.0%	0.4%	3.1%
その他	頻度	13	40	25	<u>13</u>	<u>7</u>	2	100
	カテゴリ別の%	1.1%	1.3%	1.6%	5.3%	25.9%	0.9%	1.6%
ないと思われる	頻度	<u>1079</u>	<u>2514</u>	<u>1194</u>	<u>129</u>	<u>7</u>	<u>131</u>	5054
	カテゴリ別の%	91.1%	84.6%	76.1%	52.2%	25.9%	58.2%	81.2%
不明	頻度	<u>38</u>	<u>135</u>	<u>62</u>	12	<u>4</u>	<u>81</u>	332
	カテゴリ別の%	3.2%	4.5%	3.9%	4.9%	14.8%	36.0%	5.3%
	総数	1184	2972	1570	247	27	225	6225

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q26-1. 被虐待児の精神状況（未就学児童 2680 ケース限定：複数回答）

※ケースの児童が「未就学児童」か「就学児童」かどうかの判定には、基本的には「Q2 年齢」「Q4 在学状況」の双方を用いた。Q4 で小学生以降と評定され、Q2 で7歳以上と回答されていた場合、「就学児童」とみなした。Q4 で小学生以下と評定があり、Q2 で5歳以下と回答されていた場合、「未就学児童」とした。Q2 が6歳の場合は、Q4 の回答で判断した。

➤ 設問：「被虐待児の現在の精神症状（未就学年齢の場合）」

- 「ないと思われる」「不明」を除いたケースで最も多かったのは「遊びに集中できず落ち着かない・多動傾向」6.1%、「ぐずることやかんしゃくを起こすことが多い」5.1%、「誰にでもべたべたして、次々と別の大人を求める」1.9%、「その他」1.9%、「特定の人・物・場面におびえる・びくびくする・不安」1.8%であった。
- 「ないと思われる」は70.2%で、約7割の子どもには精神的な問題はなかった。乳幼児の精神的問題は捉えにくく、心理面接をしていないことも多いため、実際より低く出ている可能性がある。

Q26-1 被虐待児の調査時の精神的問題（未就学児限定：複数回答）

	度数	%	%グラフ
特定の人・物・場面におびえる・びくびく・不安	49	1.8	■
表情乏しい・笑顔少ない・突然固まる	55	2.1	■
感情の起伏激しい・急に泣き出して止まらない	46	1.7	■
ぐずる・かんしゃく・攻撃的・時に暴力	137	5.1	■
寝付けない・中途覚醒・夜泣き激しい等、睡眠の問題	24	0.9	■
集中できず落ち着かない・多動傾向	164	6.1	■
誰にでもべたべたして、次々と別の大人を求める	51	1.9	■
養育者に助けを求めない・泣かない	16	0.6	■
弱い子にいじめや暴力・強い子に服従的・友達とうまく遊べない	13	0.5	■
床や壁に自分の頭を打ち付ける	10	0.4	■
金銭の持ち出しや万引き	1	0.0	■
年齢不相応な性的関心や行動・性や身体接触を避ける	7	0.3	■
食べ物への固執・過食・拒食	23	0.9	■
その他	52	1.9	■
ないと思われる	1882	70.2	■
不明（子どもの状態が全くわからない場合に選択）	252	9.4	■
該当ケース数	2680		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

被虐待児の精神的問題（未就学児童：複数回答）と性別のクロス表
--------------------------------

未就学児の精神的問題において、「ぐずる・かんしゃく」「集中できず落ち着かない」は男児の方に報告が多かった。その他は明確な偏りは見られなかった。

Q26-1 被虐待児の精神的問題（未就学）と被虐待児の性別のクロス集計表

	男児	女児	合計
おびえる・びくびく・不安	頻度 29	20	49
	カテゴリ別の% 2.1%	1.6%	1.8%
表情乏しい・笑顔少ない・固まる	頻度 30	25	55
	カテゴリ別の% 2.2%	2.0%	2.1%
感情の起伏激しい・泣き出して止まらない	頻度 21	25	46
	カテゴリ別の% 1.5%	2.0%	1.7%
ぐずる・かんしゃく	頻度 <b>84</b>	<u>53</u>	137
	カテゴリ別の% 6.0%	4.2%	5.1%
寝付けない・中途覚醒・夜泣き激しい	頻度 11	13	24
	カテゴリ別の% 0.8%	1.0%	0.9%
集中できず落ち着かない・多動傾向	頻度 <b>101</b>	<u>63</u>	164
	カテゴリ別の% 7.2%	4.9%	6.1%
誰にでもべたべた・別の大人を求める	頻度 25	26	51
	カテゴリ別の% 1.8%	2.0%	1.9%
養育者に助けを求めない・泣かない	頻度 10	6	16
	カテゴリ別の% 0.7%	0.5%	0.6%
いじめや暴力・服従・友達とうまく遊べない	頻度 7	6	13
	カテゴリ別の% 0.5%	0.5%	0.5%
床や壁に自分の頭を打ち付ける	頻度 8	2	10
	カテゴリ別の% 0.6%	0.2%	0.4%
金銭の持ち出しや万引き	頻度 1	0	1
	カテゴリ別の% 0.1%	0.0%	0.0%
不相応な性的関心行動・性や身体接触避ける	頻度 4	3	7
	カテゴリ別の% 0.3%	0.2%	0.3%
食べ物への固執・過食・拒食	頻度 12	11	23
	カテゴリ別の% 0.9%	0.9%	0.9%
その他	頻度 30	22	52
	カテゴリ別の% 2.2%	1.7%	1.9%
ないと思われる	頻度 963	908	1871
	カテゴリ別の% 69.0%	71.3%	70.1%
不明	頻度 125	126	251
	カテゴリ別の% 9.0%	9.9%	9.4%
	全体 1395	1273	2668

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 被虐待児の精神的問題（未就学児童：複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

「おびえる・不安」「感情の起伏激しい」「ぐずる・かんしゃく」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」は1-5歳児に多く報告された。1歳未満では「ないと思われる」の報告頻度が高くなっていた。

Q26-1 被虐待児の精神的問題（未就学）と年齢カテゴリー別のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	合計
おびえる・びくびく・不安	頻度	<u>2</u>	<b>47</b>	49
	カテゴリー別の%	0.5%	2.1%	1.9%
表情乏しい・笑顔少ない・固まる	頻度	3	48	51
	カテゴリー別の%	0.7%	2.2%	2.0%
感情の起伏激しい・泣き出して止まらない	頻度	<u>0</u>	<b>43</b>	43
	カテゴリー別の%	0.0%	2.0%	1.7%
ぐずる・かんしゃく	頻度	<u>2</u>	<b>127</b>	129
	カテゴリー別の%	0.5%	5.8%	5.0%
寝付けない・中途覚醒・夜泣き激しい	頻度	2	21	23
	カテゴリー別の%	0.5%	1.0%	0.9%
集中できず落ち着かない・多動傾向	頻度	<u>1</u>	<b>153</b>	154
	カテゴリー別の%	0.2%	6.9%	5.9%
誰にでもべたべた・別の大人を求める	頻度	<u>1</u>	<b>49</b>	50
	カテゴリー別の%	0.2%	2.2%	1.9%
養育者に助けを求めない・泣かない	頻度	0	14	14
	カテゴリー別の%	0.0%	0.6%	0.5%
いじめや暴力・服従・友達とうまく遊べない	頻度	0	13	13
	カテゴリー別の%	0.0%	0.6%	0.5%
床や壁に自分の頭を打ち付ける	頻度	0	10	10
	カテゴリー別の%	0.0%	0.5%	0.4%
金銭の持ち出しや万引き	頻度	0	1	1
	カテゴリー別の%	0.0%	0.0%	0.0%
不相応な性的関心行動・性や身体接触避ける	頻度	0	6	6
	カテゴリー別の%	0.0%	0.3%	0.2%
食べ物への固執・過食・拒食	頻度	1	22	23
	カテゴリー別の%	0.2%	1.0%	0.9%
その他	頻度	8	43	51
	カテゴリー別の%	2.0%	2.0%	2.0%
ないと思われる	頻度	<b>340</b>	<b>1495</b>	1835
	カテゴリー別の%	84.8%	67.9%	70.5%
不明	頻度	36	214	250
	カテゴリー別の%	9.0%	9.7%	9.6%
全体		401	2203	2604

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 被虐待児の精神的問題（未就学児童：複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

身体的虐待とネグレクトにおいて多くの精神的問題が報告された。身体的虐待は「おびえる・不安」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」「ぐずる・かんしゃく」「感情の起伏激しい」「寝付けない・夜泣き」「表情乏しい」などの報告頻度が高かった。ネグレクトは「表情乏しい」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」の報告頻度が高かった。心理的虐待では他の虐待種に比べて高い割合を示す精神的問題はなく、心理的虐待（DV 目撃）は約 8 割の子どもに精神的問題はないとの結果であった。

Q26-1 被虐待児の精神的問題（未就学）と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト（同居人の虐待放置）	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV 目撃）	合計
おびえる・びくびく・不安	頻度	<b>22</b>	4	<b>5</b>	0	7	<b>11</b>	49
	カテゴリ別の%	5.4%	0.8%	12.2%	0.0%	1.1%	1.0%	1.8%
表情乏しい・笑顔少ない・固まる	頻度	<b>15</b>	<b>22</b>	0	<b>1</b>	9	<b>8</b>	55
	カテゴリ別の%	3.7%	4.5%	0.0%	33.3%	1.4%	0.7%	2.1%
感情の起伏激しい・泣き出して止まらない	頻度	<b>15</b>	5	1	0	11	14	46
	カテゴリ別の%	3.7%	1.0%	2.4%	0.0%	1.7%	1.3%	1.7%
ぐずる・かんしゃく	頻度	<b>45</b>	32	<b>6</b>	<b>2</b>	28	<b>24</b>	137
	カテゴリ別の%	11.0%	6.5%	14.6%	66.7%	4.4%	2.2%	5.1%
寝付けない・中途覚醒・夜泣き激しい	頻度	<b>9</b>	4	0	0	5	6	24
	カテゴリ別の%	2.2%	0.8%	0.0%	0.0%	0.8%	0.6%	0.9%
集中できず落ち着かない・多動傾向	頻度	<b>58</b>	<b>44</b>	4	<b>2</b>	<b>28</b>	<b>28</b>	164
	カテゴリ別の%	14.2%	8.9%	9.8%	66.7%	4.4%	2.6%	6.1%
誰にでもべたべた・別の大人を求める	頻度	<b>17</b>	<b>21</b>	0	0	<b>5</b>	<b>8</b>	51
	カテゴリ別の%	4.2%	4.3%	0.0%	0.0%	0.8%	0.7%	1.9%
養育者に助けを求めない・泣かない	頻度	3	6	0	0	6	1	16
	カテゴリ別の%	0.7%	1.2%	0.0%	0.0%	0.9%	0.1%	0.6%
いじめや暴力・服従・友達とうまく遊べない	頻度	<b>8</b>	3	0	<b>1</b>	<b>0</b>	<b>1</b>	13
	カテゴリ別の%	2.0%	0.6%	0.0%	33.3%	0.0%	0.1%	0.5%
床や壁に自分の頭を打ち付ける	頻度	2	3	0	0	1	4	10
	カテゴリ別の%	0.5%	0.6%	0.0%	0.0%	0.2%	0.4%	0.4%
金銭の持ち出しや万引き	頻度	0	1	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
不相应な性的関心行動・性や身体接触避ける	頻度	<b>3</b>	1	0	<b>1</b>	1	1	7
	カテゴリ別の%	0.7%	0.2%	0.0%	33.3%	0.2%	0.1%	0.3%
食べ物への固執・過食・拒食	頻度	<b>7</b>	<b>11</b>	1	0	3	<b>1</b>	23
	カテゴリ別の%	1.7%	2.2%	2.4%	0.0%	0.5%	0.1%	0.9%
その他	頻度	<b>15</b>	<b>16</b>	1	0	14	<b>6</b>	52
	カテゴリ別の%	3.7%	3.3%	2.4%	0.0%	2.2%	0.6%	1.9%
ないと思われる	頻度	<b>228</b>	<b>306</b>	26	1	447	<b>863</b>	1871
	カテゴリ別の%	55.9%	62.2%	63.4%	33.3%	69.8%	79.7%	70.2%
不明	頻度	<b>27</b>	41	3	0	<b>89</b>	91	251
	カテゴリ別の%	6.6%	8.3%	7.3%	0.0%	13.9%	8.4%	9.4%
	全体	408	492	41	3	640	1072	2668

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したもの。

### 被虐待児の精神的問題（未就学児童：複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

虐待の危惧あり・軽度虐待では「ないと思われる」が多く報告され、中度虐待では「おびえる・不安」「表情乏しい」「寝付けない・夜泣き激しい」が多く報告されていた。重度虐待は加えて「ぐずる・かんしゃく」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」「表情乏しい」が多く報告されていた。生命の危機ありは報告頻度が全体に少ないが、精神的問題については不明であるという報告が多かった。

Q26-1 被虐待児の精神的問題（未就学）と虐待種別のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
おびえる・びくびく・不安	頻度	<u>4</u>	19	<u>23</u>	3	0	0	49
	カテゴリ別の%	0.7%	1.6%	3.6%	3.0%	0.0%	0.0%	1.9%
表情乏しい・笑顔少ない・ 固まる	頻度	7	22	<u>20</u>	<u>6</u>	0	0	55
	カテゴリ別の%	1.2%	1.8%	3.1%	6.0%	0.0%	0.0%	2.1%
感情の起伏激しい・ 泣き出して止まらない	頻度	11	20	13	2	0	0	46
	カテゴリ別の%	1.9%	1.6%	2.0%	2.0%	0.0%	0.0%	1.7%
ぐずる・かんしゃく	頻度	22	63	38	<u>13</u>	0	0	136
	カテゴリ別の%	3.9%	5.2%	5.9%	13.0%	0.0%	0.0%	5.1%
寝付けない・中途覚醒・ 夜泣き激しい	頻度	<u>1</u>	9	<u>13</u>	1	0	0	24
	カテゴリ別の%	0.2%	0.7%	2.0%	1.0%	0.0%	0.0%	0.9%
集中できず落ち着かない・ 多動傾向	頻度	27	78	44	<u>12</u>	0	3	164
	カテゴリ別の%	4.8%	6.4%	6.9%	12.0%	0.0%	3.1%	6.2%
誰にでもべたべた・ 別の大人を求める	頻度	<u>3</u>	28	14	<u>6</u>	0	0	51
	カテゴリ別の%	0.5%	2.3%	2.2%	6.0%	0.0%	0.0%	1.9%
養育者に助けを求めない・ 泣かない	頻度	1	9	5	1	0	0	16
	カテゴリ別の%	0.2%	0.7%	0.8%	1.0%	0.0%	0.0%	0.6%
いじめや暴力・服従・ 友達とうまく遊べない	頻度	0	7	6	0	0	0	13
	カテゴリ別の%	0.0%	0.6%	0.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%
床や壁に自分の頭を 打ち付ける	頻度	1	2	5	1	0	1	10
	カテゴリ別の%	0.2%	0.2%	0.8%	1.0%	0.0%	1.0%	0.4%
金銭の持ち出しや万引き	頻度	1	0	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
不相応な性的関心行動・ 性や身体接触避ける	頻度	0	3	3	1	0	0	7
	カテゴリ別の%	0.0%	0.2%	0.5%	1.0%	0.0%	0.0%	0.3%
食べ物への固執・ 過食・拒食	頻度	3	7	8	3	0	0	21
	カテゴリ別の%	0.5%	0.6%	1.3%	3.0%	0.0%	0.0%	0.8%
その他	頻度	6	21	12	4	<u>5</u>	4	52
	カテゴリ別の%	1.1%	1.7%	1.9%	4.0%	23.8%	4.1%	2.0%
ないと思われる	頻度	<u>420</u>	<u>887</u>	432	<u>59</u>	<u>9</u>	<u>46</u>	1853
	カテゴリ別の%	74.3%	72.9%	67.5%	59.0%	42.9%	46.9%	70.2%
不明	頻度	48	<u>86</u>	58	4	<u>7</u>	<u>43</u>	246
	カテゴリ別の%	8.5%	7.1%	9.1%	4.0%	33.3%	43.9%	9.3%
	全体	565	1217	640	100	21	98	2641

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したもの。

## Q26-2. 被虐待児の調査時の精神状況（就学児童 3569 ケース限定：複数回答）

➤ 設問：「被虐待児の現在の精神症状（小学校年代以降の場合）」

- 就学以降の年代における被虐待児の症状としては、多い順に「落ち着きのなさ」11.3%、「虐待者や特定の状況・人に怯える」7.2%、「引きこもり・不登校」7.2%、「怒りを抑えられず、人や物にあたる」7.0%、「大人への反抗的な態度」5.8%などが多かった。

Q26-2 被虐待児の調査時の精神的問題（就学児以上限定：複数回答）

	度数	%	%グラフ
虐待者や特定の状況・物・状況におびえる	258	7.2	■
親の虐待を思い出させる場所・人・物を避ける	64	1.8	■
感情表現が少ない・無反応・フリーズ	134	3.8	■
些細なことで気持ちの動揺・過呼吸や動悸	57	1.6	■
怒りが抑えられず、人や物にあたる	249	7.0	■
寝付けない・中途覚醒が多い・朝起きられない・悪夢を見る	99	2.8	■
大人への反抗的な態度、他児への威圧的な態度	207	5.8	■
何事にも自信が持てない	129	3.6	■
落ち込み・意欲低下	156	4.4	■
自分を痛めつける行動・リストカット・希死念慮	81	2.3	■
落ち着きのなさ、注意が集中できない	403	11.3	■
引きこもり・不登校	257	7.2	■
年齢不相応な性的関心や行動／性や身体接触避ける	48	1.3	■
反社会的問題行動：火遊び・万引き・かつあげ	114	3.2	■
食行動上の問題：食べ物への固執・過食・拒食	34	1.0	■
飲酒・覚せい剤・大麻・市販薬・処方薬などの乱用	8	0.2	■
ゲームやインターネットへの依存	102	2.9	■
明確な身体的原因のない身体症状（吐き気・腹痛・下痢・慢性の痛みなど）	60	1.7	■
その他	116	3.3	■
ないと思われる	1951	54.7	■
不明（子どもの状態が全くわからない場合に選択）	240	6.7	■
該当ケース数		3569	

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「未就学児」と「就学児」の区分はなく、虐待に起因すると思われる精神症状は虐待を受けた子どもの 33.7%に見られた。具体的には「多動・落ち着きのなさ」が 8.9%と最も多く、次いで「対人関係の問題」8.0%、「低い自己評価」6.8%、「不安、怯え、パニック」6.6%と続いた。

### 被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と性別のクロス表

「怒りが抑えられない」「落ち着きがない」「反社会的問題行動」「ゲーム依存」は男児のほうが報告例が多く、「虐待を思い出させる人・場所を避ける」「気持ちの動揺・過呼吸」「落ち込み・意欲低下」「自傷行動」「問題ない」については女児のほうが報告例が多くなっていました。

### 被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と年齢カテゴリのクロス表

6-11歳では「精神的問題はない」割合が他年代と比べて高く(57.9%)、精神的問題としては「落ち着きがない」の出現率が高かった(14.8%)。

12-14歳では「怒りが抑えられない」「反社会的問題行動」「大人への反抗的態度」などの攻撃的で外向型の問題行動が他の年代と比較して最も高い割合となり、一方「引きこもり・不登校」「自傷行動」「ゲーム依存」「原因のない身体症状」などの内向型の問題行動の頻度も他年代と比較して高い傾向が見られた。加えて「不相应な性的関心行動」の割合も高かった。

15歳以上は「虐待を思い出させる人・場所を避ける」「気持ちの動揺」「寝付けられない・朝起きられない」「落ち込み・意欲低下」「自傷行動・リストカット」などトラウマ症状を思わせる症状の出現頻度が他の年代より高かった。加えて「引きこもり・不登校」「原因のない身体症状」「大人への反抗的態度」「不相应な性的関心行動」の出現率も他年代と比較して高かった。

### 被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

身体的虐待は51.3%に精神的問題がみられ、「落ち着きの無さ」が最も多い問題で、「怒りが抑えられない」「大人への反抗的態度」などの攻撃的な問題行動や「虐待者等におびえる」「感情表現少ない」「自傷行動」などのトラウマ症状を思わせる問題の出現率も他虐待種と比較して高かった。さらに「何事にも自信持てない」「反社会的問題行動」「ゲーム依存」の出現頻度も高かった。

ネグレクトは47.8%に精神的問題がみられ、「引きこもり・不登校」「意欲低下」「反社会的問題行動」「ゲーム依存」の出現率が他の虐待種に比較して高かった。

性的虐待は55.1%と最も高率に精神的問題を有していて、「虐待者におびえる」「虐待を思い出させる場所を避ける」「感情表現少ない」「気持ちの動揺」「自傷行動」などトラウマ症状が推定される精神的問題が出現する割合が他虐待種より高く、加えて「自信が持てない」「落ち込み」「引きこもり」など、様々な問題の報告頻度が高かった。

心理的虐待、特にDV目撃は精神的な「問題がないと思われる」割合が高く(56.4%、70.7%)、精神的問題の出現する割合は他虐待種と比較して低かった。

### 被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と虐待重症度のクロス表

「生命の危機あり」は6人と少人数であるため、それを除くと、ほとんどの精神的問題が虐待の重症度が増していくにつれて、出現率が増加していくことが明らかになった。

## 被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と性別のクロス表

Q26-2 被虐待児の精神的問題（就学）と被虐待児の性別のクロス集計表

		男児	女児	合計
虐待者や特定の状況・	頻度	128	129	257
人におびえる	カテゴリ別の%	6.7%	7.8%	7.2%
虐待を思い出させる場所・	頻度	23	<b>41</b>	64
人・物を避ける	カテゴリ別の%	1.2%	2.5%	1.8%
感情表現が少ない・	頻度	72	62	134
無反応・フリーズ	カテゴリ別の%	3.8%	3.7%	3.8%
気持ちの動揺・	頻度	10	<b>47</b>	57
過呼吸や動悸	カテゴリ別の%	0.5%	2.8%	1.6%
怒りが抑えられず、	頻度	<b>156</b>	93	249
人や物にあたる	カテゴリ別の%	8.2%	5.6%	7.0%
寝付けられない・中途覚醒・	頻度	39	<b>60</b>	99
朝起きられない	カテゴリ別の%	2.0%	3.6%	2.8%
大人への反抗的態度・	頻度	109	98	207
他児への威圧的態度	カテゴリ別の%	5.7%	5.9%	5.8%
何事にも自信が持てない	頻度	70	59	129
	カテゴリ別の%	3.7%	3.6%	3.6%
落ち込み・意欲低下	頻度	65	<b>91</b>	156
	カテゴリ別の%	3.4%	5.5%	4.4%
自傷行動・リストカット・	頻度	19	<b>62</b>	81
希死念慮	カテゴリ別の%	1.0%	3.7%	2.3%
落ち着きのなさ・	頻度	<b>283</b>	120	403
注意が集中できない	カテゴリ別の%	14.8%	7.3%	11.3%
引きこもり・不登校	頻度	123	134	257
	カテゴリ別の%	6.4%	8.1%	7.2%
不相応な性的関心行動・	頻度	17	<b>31</b>	48
性や身体接触避ける	カテゴリ別の%	0.9%	1.9%	1.3%
反社会的問題行動・火遊び・	頻度	<b>78</b>	36	114
万引き・かつあげ	カテゴリ別の%	4.1%	2.2%	3.2%
食行動の問題：	頻度	14	20	34
食べ物への固執・過食・拒食	カテゴリ別の%	0.7%	1.2%	1.0%
飲酒や覚せい剤など薬物乱用	頻度	3	5	8
	カテゴリ別の%	0.2%	0.3%	0.2%
ゲームやインターネットへの	頻度	<b>70</b>	32	102
依存	カテゴリ別の%	3.7%	1.9%	2.9%
原因のない身体症状	頻度	25	35	60
（吐き気・腹痛・下痢・痛み等）	カテゴリ別の%	1.3%	2.1%	1.7%
その他	頻度	63	53	116
	カテゴリ別の%	3.3%	3.2%	3.3%
ないと思われる	頻度	1010	<b>936</b>	1946
	カテゴリ別の%	52.9%	56.6%	54.6%
不明	頻度	117	123	240
	カテゴリ別の%	6.1%	7.4%	6.7%
	全体	1908	1655	3563

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## 被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

Q26-2 被虐待児の精神的問題（就学）と被虐待児の性別のクロス集計表

		6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
虐待者や特定の状況・	頻度	138	76	44	258
人におびえる	カテゴリ別の%	6.6%	8.1%	8.3%	7.2%
虐待を思い出させる場所・	頻度	<u>25</u>	21	<b>18</b>	64
人・物を避ける	カテゴリ別の%	1.2%	2.3%	3.4%	1.8%
感情表現が少ない・	頻度	72	34	28	134
無反応・フリーズ	カテゴリ別の%	3.4%	3.6%	5.3%	3.8%
気持ちの動揺・	頻度	<u>17</u>	21	<b>19</b>	57
過呼吸や動悸	カテゴリ別の%	0.8%	2.3%	3.6%	1.6%
怒りが抑えられず、	頻度	134	<b>83</b>	32	249
人や物にあたる	カテゴリ別の%	6.4%	8.9%	6.0%	7.0%
寝付けない・中途覚醒・	頻度	<u>43</u>	33	<b>23</b>	99
朝起きられない	カテゴリ別の%	2.0%	3.5%	4.3%	2.8%
大人への反抗的態度・	頻度	<u>89</u>	<b>77</b>	<b>41</b>	207
他児への威圧的態度	カテゴリ別の%	4.2%	8.3%	7.7%	5.8%
何事にも自信が持てない	頻度	68	36	25	129
	カテゴリ別の%	3.2%	3.9%	4.7%	3.6%
落ち込み・意欲低下	頻度	<u>64</u>	48	<b>44</b>	156
	カテゴリ別の%	3.0%	5.1%	8.3%	4.4%
自傷行動・リストカット・	頻度	<u>13</u>	<b>36</b>	<b>32</b>	81
希死念慮	カテゴリ別の%	0.6%	3.9%	6.0%	2.3%
落ち着きのなさ・	頻度	<b>311</b>	<u>68</u>	<u>24</u>	403
注意が集中できない	カテゴリ別の%	14.8%	7.3%	4.5%	11.3%
引きこもり・不登校	頻度	<u>85</u>	<b>121</b>	<b>51</b>	257
	カテゴリ別の%	4.0%	13.0%	9.6%	7.2%
不相応な性的関心行動・	頻度	<u>15</u>	<b>21</b>	<b>12</b>	48
性や身体接触避ける	カテゴリ別の%	0.7%	2.3%	2.3%	1.3%
反社会的問題行動・火遊び・	頻度	58	<b>41</b>	15	114
万引き・かつあげ	カテゴリ別の%	2.8%	4.4%	2.8%	3.2%
食行動の問題：	頻度	18	10	6	34
食べ物への固執・過食・拒食	カテゴリ別の%	0.9%	1.1%	1.1%	1.0%
飲酒や覚せい剤など薬物乱用	頻度	<u>0</u>	3	<b>5</b>	8
	カテゴリ別の%	0.0%	0.3%	0.9%	0.2%
ゲームやインターネットへの	頻度	<u>37</u>	<b>46</b>	19	102
依存	カテゴリ別の%	1.8%	4.9%	3.6%	2.9%
原因のない身体症状	頻度	<u>19</u>	<b>25</b>	<b>16</b>	60
(吐き気・腹痛・下痢・痛み等)	カテゴリ別の%	0.9%	2.7%	3.0%	1.7%
その他	頻度	78	23	15	116
	カテゴリ別の%	3.7%	2.5%	2.8%	3.3%
ないと思われる	頻度	<b>1219</b>	<u>471</u>	<u>261</u>	1951
	カテゴリ別の%	57.9%	50.5%	49.1%	54.7%
不明	頻度	132	59	<b>49</b>	240
	カテゴリ別の%	6.3%	6.3%	9.2%	6.7%
	全体	2104	933	532	3569

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。  
**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## 被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

Q26-2 被虐待児の精神的問題（就学）と主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
虐待者や特定の状況・	頻度	<b>108</b>	<u>25</u>	<u>12</u>	<u>12</u>	57	<u>43</u>	257
人におびえる	カテゴリ別の%	10.7%	4.6%	14.3%	20.7%	6.8%	4.2%	7.2%
虐待を思い出させる場所・	頻度	16	10	<u>5</u>	<u>6</u>	17	<u>10</u>	64
人・物を避ける	カテゴリ別の%	1.6%	1.8%	6.0%	10.3%	2.0%	1.0%	1.8%
感情表現が少ない・	頻度	<b>49</b>	27	6	<b>8</b>	36	<u>8</u>	134
無反応・フリーズ	カテゴリ別の%	4.8%	5.0%	7.1%	13.8%	4.3%	0.8%	3.8%
気持ちの動揺・	頻度	21	8	2	<u>4</u>	16	<u>6</u>	57
過呼吸や動悸	カテゴリ別の%	2.1%	1.5%	2.4%	6.9%	1.9%	0.6%	1.6%
怒りが抑えられず、	頻度	<b>119</b>	40	5	2	55	<u>28</u>	249
人や物にあたる	カテゴリ別の%	11.7%	7.4%	6.0%	3.4%	6.5%	2.7%	7.0%
寝付けない・中途覚醒・	頻度	31	18	5	<u>5</u>	27	<u>13</u>	96
朝起きられない	カテゴリ別の%	3.1%	3.3%	6.0%	8.6%	3.2%	1.3%	2.9%
大人への反抗的態度・	頻度	<b>96</b>	36	5	3	43	<u>24</u>	207
他児への威圧的態度	カテゴリ別の%	9.5%	6.6%	6.0%	5.2%	5.1%	2.4%	5.8%
何事にも自信が持てない	頻度	<b>49</b>	26	5	<b>8</b>	27	<u>14</u>	129
	カテゴリ別の%	4.8%	4.8%	6.0%	13.8%	3.2%	1.4%	3.6%
落ち込み・意欲低下	頻度	49	<b>37</b>	5	<b>11</b>	35	<u>19</u>	156
	カテゴリ別の%	4.8%	6.8%	6.0%	19.0%	4.2%	1.9%	4.4%
自傷行動・リストカット・	頻度	<b>31</b>	14	4	<b>6</b>	23	<u>3</u>	81
希死念慮	カテゴリ別の%	3.1%	2.6%	4.8%	10.3%	2.7%	0.3%	2.3%
落ち着きのなさ・	頻度	<b>189</b>	61	8	3	93	<u>49</u>	403
注意が集中できない	カテゴリ別の%	18.6%	11.3%	9.5%	5.2%	11.1%	4.8%	11.3%
引きこもり・不登校	頻度	77	<b>88</b>	9	<b>8</b>	39	<u>36</u>	257
	カテゴリ別の%	7.6%	16.2%	10.7%	13.8%	4.6%	3.5%	7.2%
不相応な性的関心行動・	頻度	13	12	<b>8</b>	2	10	<u>3</u>	48
性や身体接触避ける	カテゴリ別の%	1.3%	2.2%	9.5%	3.4%	1.2%	0.3%	1.3%
反社会的問題行動・火遊び・	頻度	<b>51</b>	<b>25</b>	3	2	24	<u>9</u>	114
万引き・かつあげ	カテゴリ別の%	5.0%	4.6%	3.6%	3.4%	2.9%	0.9%	3.2%
食行動の問題：	頻度	14	6	2	1	8	<u>3</u>	34
食べ物への固執・過食・拒食	カテゴリ別の%	1.4%	1.1%	2.4%	1.7%	1.0%	0.3%	1.0%
飲酒や覚せい剤など薬物乱用	頻度	2	<b>4</b>	1	<u>1</u>	0	0	8
	カテゴリ別の%	0.2%	0.7%	1.2%	1.7%	0.0%	0.0%	0.2%
ゲームやインターネットへの	頻度	<b>45</b>	<b>25</b>	4	1	19	<u>8</u>	102
依存	カテゴリ別の%	4.4%	4.6%	4.8%	1.7%	2.3%	0.8%	2.9%
原因のない身体症状	頻度	<b>28</b>	7	<b>4</b>	<u>7</u>	11	<u>3</u>	60
(吐き気・腹痛・下痢・痛み等)	カテゴリ別の%	2.8%	1.3%	4.8%	12.1%	1.3%	0.3%	1.7%
その他	頻度	38	21	3	1	24	29	116
	カテゴリ別の%	3.7%	3.9%	3.6%	1.7%	2.9%	2.8%	3.3%
ないと思われる	頻度	<b>426</b>	<b>263</b>	40	<u>23</u>	474	<b>722</b>	1948
	カテゴリ別の%	42.0%	48.5%	47.6%	39.7%	56.4%	70.7%	54.7%
不明	頻度	68	<u>20</u>	<u>0</u>	3	58	<b>88</b>	237
	カテゴリ別の%	6.7%	3.7%	0.0%	5.2%	6.9%	8.6%	6.7%
	全体	1014	542	84	58	841	1021	3560

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## 被虐待児の精神的問題（就学児童：複数回答）と虐待重症度のクロス表

Q26-2 被虐待児の精神的問題（就学）と主たる虐待種別のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
虐待者や特定の状況・ 人におびえる	頻度	15	91	110	39	0	3	258
	カテゴリ別の%	2.5%	5.2%	11.9%	26.9%	0.0%	2.7%	7.3%
虐待を思い出させる場所・ 人・物を避ける	頻度	5	13	21	24	0	0	63
	カテゴリ別の%	0.8%	0.7%	2.3%	16.6%	0.0%	0.0%	1.8%
感情表現が少ない・ 無反応・フリーズ	頻度	9	46	58	20	0	1	134
	カテゴリ別の%	1.5%	2.6%	6.3%	13.8%	0.0%	0.9%	3.8%
気持ちの動揺・ 過呼吸や動悸	頻度	5	21	19	10	0	2	57
	カテゴリ別の%	0.8%	1.2%	2.1%	6.9%	0.0%	1.8%	1.6%
怒りが抑えられず、 人や物にあたる	頻度	20	120	81	26	0	1	248
	カテゴリ別の%	3.3%	6.9%	8.7%	17.9%	0.0%	0.9%	7.0%
寝付けない・中途覚醒・ 朝起きられない	頻度	7	30	36	26	0	0	99
	カテゴリ別の%	1.1%	1.7%	3.9%	17.9%	0.0%	0.0%	2.8%
大人への反抗的態度・ 他児への威圧的態度	頻度	17	98	67	22	0	3	207
	カテゴリ別の%	2.8%	5.6%	7.2%	15.2%	0.0%	2.7%	5.9%
何事にも自信が持てない	頻度	11	40	57	21	0	0	129
	カテゴリ別の%	1.8%	2.3%	6.2%	14.5%	0.0%	0.0%	3.6%
落ち込み・意欲低下	頻度	17	53	59	27	0	0	156
	カテゴリ別の%	2.8%	3.1%	6.4%	18.6%	0.0%	0.0%	4.4%
自傷行動・リストカット・ 希死念慮	頻度	10	33	25	12	0	0	80
	カテゴリ別の%	1.6%	1.9%	2.7%	8.3%	0.0%	0.0%	2.3%
落ち着きのなさ・ 注意が集中できない	頻度	37	191	135	31	1	5	400
	カテゴリ別の%	6.0%	11.0%	14.6%	21.4%	16.7%	4.5%	11.3%
引きこもり・不登校	頻度	36	113	89	15	0	4	257
	カテゴリ別の%	5.9%	6.5%	9.6%	10.3%	0.0%	3.6%	7.3%
不相応な性的関心行動・ 性や身体接触避ける	頻度	2	20	20	6	0	0	48
	カテゴリ別の%	0.3%	1.2%	2.2%	4.1%	0.0%	0.0%	1.4%
反社会的問題行動・火遊び・ 万引き・かつあげ	頻度	10	45	45	9	1	2	112
	カテゴリ別の%	1.6%	2.6%	4.9%	6.2%	16.7%	1.8%	3.2%
食行動の問題： 食べ物への固執・過食・拒食	頻度	3	8	17	4	1	1	34
	カテゴリ別の%	0.5%	0.5%	1.8%	2.8%	16.7%	0.9%	1.0%
飲酒や覚せい剤など薬物乱用	頻度	1	2	4	1	0	0	8
	カテゴリ別の%	0.2%	0.1%	0.4%	0.7%	0.0%	0.0%	0.2%
ゲームやインターネットへの 依存	頻度	6	52	33	7	2	2	102
	カテゴリ別の%	1.0%	3.0%	3.6%	4.8%	33.3%	1.8%	2.9%
原因のない身体症状 (吐き気・腹痛・下痢・痛み等)	頻度	5	16	20	18	0	1	60
	カテゴリ別の%	0.8%	0.9%	2.2%	12.4%	0.0%	0.9%	1.7%
その他	頻度	11	63	33	7	0	0	114
	カテゴリ別の%	1.8%	3.6%	3.6%	4.8%	0.0%	0.0%	3.2%
ないと思われる	頻度	428	999	428	29	0	49	1948
	カテゴリ別の%	69.9%	57.5%	46.2%	20.0%	0.0%	43.8%	54.7%
不明	頻度	32	101	57	7	1	39	237
	カテゴリ別の%	5.2%	5.8%	6.2%	4.8%	16.7%	34.8%	6.7%
	全体	612	1737	926	145	6	112	3538

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## IV. 児相の対応について

(安全確認について)

### Q27. 48 時間以内の安全確認

- 設問：「このケースにおける、48 時間以内の安全確認について」
- 9 割以上のケースで 48 時間以内の安全確認を行っていた。「他機関の協力により行った」が 68.1%と、児童相談所以外の機関の協力にもとづく対応が大半を占めた。

Q27 48時間以内の安全確認

	度数	%	%グラフ
児相が直接行った	1330	21.1	
他機関の協力により行った	4289	68.1	
行っていない	548	8.7	
無回答	133	2.1	
合計	6300	100	

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、9 割以上のケースで 48 時間以内の安全確認を行っている点は同じだが、H25 年調査では「他機関の協力により行った」55.8%と「児童相談所が直接行なった」35.7%であり、直接児童相談所が行うケースが 10%程度減っており、他機関の協力により行う割合が増えていた。

#### 48 時間以内の安全確認と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」は児相が直接安全確認を行い、「心理的虐待（特に DV 目撃）」は他機関の協力により確認を行うかもしくは確認を行わない傾向が見て取れる。「他機関の協力により確認を行った」報告が多いのは、「DV 目撃」の通告件数の多さを反映したものと考えられる。

Q27 48時間以内の安全確認と虐待種別のクロス集計表

	身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の 虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
児相が直接行った	頻度 <b>448</b>	<b>307</b>	<b>54</b>	<b>32</b>	306	<b>177</b>	1324
	カテゴリ別の% 31.9%	30.1%	44.3%	55.2%	21.1%	8.5%	21.6%
他機関の協力により行った	頻度 <b>870</b>	<b>637</b>	<b>59</b>	<b>21</b>	1028	<b>1661</b>	4276
	カテゴリ別の% 62.0%	62.5%	48.4%	36.2%	70.9%	79.5%	69.6%
行っていない	頻度 <b>86</b>	75	9	5	116	<b>250</b>	541
	カテゴリ別の% 6.1%	7.4%	7.4%	8.6%	8.0%	12.0%	8.8%
総数	1404	1019	122	58	1450	2088	6141

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 48 時間以内の安全確認と虐待重症度のクロス表

「虐待の危惧あり」・「軽度虐待」の場合は他機関の協力の下安全確認を行い、「中度虐待以上」の場合は児相が直接安全確認を行う傾向が見て取れる。先の虐待種別と関連付けると、DV 目撃は軽度の問題として扱われる傾向があり、身体的・ネグレクト・性的虐待は中度虐待以上の問題として児相が直接担当することの現れであろう。

Q27 48時間以内の安全確認と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
児相が直接行った	頻度	<u>173</u>	<u>582</u>	<u>400</u>	<u>119</u>	9	<u>30</u>	1313
	カテゴリ別の%	14.9%	19.9%	26.0%	48.4%	33.3%	14.0%	21.5%
他機関の協力により行った	頻度	<u>872</u>	<u>2096</u>	<u>1019</u>	<u>110</u>	17	<u>135</u>	4249
	カテゴリ別の%	75.2%	71.8%	66.2%	44.7%	63.0%	63.1%	69.6%
行っていない	頻度	114	243	120	17	1	<u>49</u>	544
	カテゴリ別の%	9.8%	8.3%	7.8%	6.9%	3.7%	22.9%	8.9%
	総数	1159	2921	1539	246	27	214	6106

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q27-1. 48 時間以内の安全確認を行わなかった理由

(Q27「行っていない」回答 548 ケース限定：複数回答)

- 「48 時間以内の安全確認を行う必要はないと判断した」が 52.6%と最も多く、次いで「調査に時間を要した」15.0%、次いで「子供が特定できなかった・子どもの所在不明」が 8.6%と続いていた。

Q27-1 安全確認できなかった理由 (Q27「行っていない」回答ケース限定：複数回答)

	度数	%	% グラフ
子どもが特定できなかった、子どもの所在不明	47	8.6	
訪問したが不在だった	38	6.9	
調査に時間を要した	82	15.0	
休日・休日前の受理だった	24	4.4	
訪問を拒否された	11	2.0	
受理が集中した	11	2.0	
48時間以内の安全確認は必要ないと判断した	288	52.6	
その他	100	18.2	
該当ケース数	548		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「調査に時間を要した」20.7%、「子供の特定ができなかった、または所在が分からなかった」14.9%と多かったが、「その他」が 43.5%あり、様々な固有の理由があることが推察された。

## Q28. リスクアセスメントシートの活用

- ▶ 設問：「このケースに対応する際、リスクアセスメントシートを活用しましたか」
- リスクアセスメントシートの「活用あり」が59.8%に達し、「活用していない」を上回った。

Q28 リスクアセスメントシートの活用

	度数	%	%グラフ
活用した	3767	59.8	
活用していない	2413	38.3	
不明	120	1.9	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「活用」51.5%となっており、より活用率が高まっている。しかし依然として4割近くがシートを用いていないこともまた確かであり、今後さらなる利用が求められると思われる。

### リスクアセスメントシートの活用と虐待重症度のクロス表

「虐待の危惧あり」・「中度虐待」・「生命の危機あり」の場合はシート活用の報告が多いのに比して、「軽度虐待」と「不明」の場合でシート活用の頻度が低くなっていた。軽度と判定される虐待対応においては兎相においてシート活用のあり方が異なる可能性等が考えられる。

なお、シート活用の有無と虐待種別についてもクロス表を作成して検定を実施したものの、有意な関連は認められなかった。

Q28 リスクアセスメントシートの活用と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
活用した	頻度	<b>752</b>	<b>1700</b>	<b>1012</b>	154	<b>23</b>	82	3723
	カテゴリ別の%	65.2%	58.2%	65.0%	63.6%	85.2%	38.3%	60.9%
活用していない	頻度	<b>402</b>	<b>1219</b>	<b>544</b>	88	<b>4</b>	<b>132</b>	2389
	カテゴリ別の%	16.8%	51.0%	22.8%	3.7%	0.2%	5.5%	100.0%
総数		1154	2919	1556	242	27	214	6112

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q29. 受理状況

- 「新規受理」が61.1%と最も多く、「前回と今回も虐待として受理」が31.8%とほとんどを占めた。

Q29 受理状況について

	度数	%	%グラフ
新規受理	3852	61.1	
前は別の相談種別、虐待としては今回が初めて	402	6.4	
前回虐待で受理、今回も虐待として再受理	2002	31.8	
不明	44	0.7	
合計	6300	100	

### 受理状況と性別のクロス表

興味深いことに、女兒の場合は「新規受理」が多く、男児の場合は「前回と別の形で相談があるものの、虐待としてははじめて扱われる」ケースが多くなっていた。

Q29 受理状況についてと性別のクロス集計表

		男児	女兒	合計
新規受理	頻度	<u>1986</u>	<u>1845</u>	3831
	カテゴリ別の%	60.3%	62.9%	61.5%
前は別の相談種別、虐待としては今回が初めて	頻度	<u>252</u>	<u>150</u>	402
	カテゴリ別の%	7.6%	5.1%	6.5%
前回虐待で受理、今回も虐待として再受理	頻度	1058	940	1998
	カテゴリ別の%	32.1%	32.0%	32.1%
	総数	3331	2967	6298

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 受理状況と年齢カテゴリのクロス表

1歳未満・1~5歳は「新規受理」が多く、6歳以上は「複数回受理」が多いという傾向が見られた。また興味深いことに、6~11歳に「虐待での再受理」が多く報告され、12~14歳・15歳以上に「今回は虐待相談、以前は虐待以外の問題で相談」ケースが多く報告されていた。

Q29 受理状況についてと年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
新規受理	頻度	<u>553</u>	<u>1366</u>	<u>1212</u>	<u>467</u>	227	3825
	カテゴリ別の%	76.0%	63.7%	56.7%	57.0%	59.4%	61.6%
前は別の相談種別、虐待としては今回が初めて	頻度	<u>28</u>	<u>106</u>	154	<u>77</u>	<u>34</u>	399
	カテゴリ別の%	3.8%	4.9%	7.2%	9.4%	8.9%	6.4%
前回虐待で受理、今回も虐待として再受理	頻度	<u>147</u>	673	<u>770</u>	276	121	1987
	カテゴリ別の%	20.2%	31.4%	36.0%	33.7%	31.7%	32.0%
	総数	728	2145	2136	820	382	6211

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 受理状況と虐待種別のクロス表

「心理的虐待（DV目撃）」は「新規受理」としての報告が多かった。一方「身体的虐待」と「ネグレクト」は「前は別の相談種別、今回は虐待で受理」の報告頻度が高く、特にネグレクトについては、虐待としての再受理の報告頻度も高くなっていた。

Q29 受理状況についてと虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV目撃）	合計
新規受理	頻度	<u>819</u>	<u>521</u>	68	42	934	3834
	カテゴリ別の%	57.5%	50.4%	54.8%	70.0%	62.9%	61.5%
前は別の相談種別、虐待としては今回が初めて	頻度	<u>138</u>	<u>89</u>	<u>15</u>	4	<u>69</u>	401
	カテゴリ別の%	9.7%	8.6%	12.1%	6.7%	4.6%	6.4%
前回虐待で受理、今回も虐待として再受理	頻度	468	<u>423</u>	41	14	482	1995
	カテゴリ別の%	32.8%	40.9%	33.1%	23.3%	32.5%	32.0%
	総数	1425	1033	124	60	1485	6230

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したもの。

## Q29-1. 前回受理の中での一時保護の有無

(Q29「前回も受理」回答 2404 ケース限定)

- 本項の集計には「Q29 受理状況」に、「前は別件、虐待としては今回が初めての受理」「前回も虐待、今回も虐待で受理」と回答した計 2,404 ケースを対象とした。
- 「一時保護していない」が 72.9%と過半数を占め、一時保護したケースでは、「一時保護し、家庭復帰した」ケースが 11.3%で最も多くなっていた。

Q29-1 前回受理における一時保護について (Q29「前回も受理」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
一時保護し、施設入所した	94	3.9	■
一時保護し、里親委託した	12	0.5	
一時保護し、家庭復帰した	271	11.3	■
一時保護し、家庭以外のところに帰った	7	0.3	
一時保護していない	1753	72.9	■
無回答	267	11.1	■
合計	2404	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、再受理のケースについて回答を求めており、再受理ケースのうち 1/4 強を前回受理の中で一時保護しており、そのうち 1/3 が施設入所、2/3 が家庭復帰していた。

(面接状況について)

## Q30. 子どもとの面接回数

- 設問：「子どもとの面接回数（父母などを別々に面接した場合でも、同一の時間帯であれば1回としてカウント）」
- 「なし」が49.8%と半数を占め、面会したケースでは「1～2回」が33.6%と最も多かった。16回以上というケースも2%弱見られた。

Q30 子どもとの面接回数について

	度数	%	% グラフ
なし	3140	49.8	
1～2回	2116	33.6	
3～5回	473	7.5	
6～10回	297	4.7	
11～15回	105	1.7	
16回以上	117	1.9	
無回答	52	0.8	
合計	6300	100	

## \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「なし」が37.8%と最も多く、面会したケースでは「1～2回」が31.4%最も高い割合を示した。

## 子どもとの面接回数と虐待種別のクロス表

全体として「心理的虐待」・「DV 目撃」は面接回数が少なく、「身体的虐待」・「ネグレクト」・「性的虐待」は面接回数が多い。特に「身体的虐待」と「性的虐待」は実施される面接回数が多い傾向があった。

Q30 子どもとの面接回数と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
		頻度	頻度	頻度	頻度	頻度	頻度	
なし	頻度	<b>558</b>	<b>415</b>	<b>33</b>	<b>9</b>	<b>822</b>	<b>1284</b>	3121
	カテゴリ別の%	17.9%	13.3%	1.1%	0.3%	26.3%	41.1%	100.0%
1～2回	頻度	494	347	45	10	477	739	2112
	カテゴリ別の%	23.4%	16.4%	2.1%	0.5%	22.6%	35.0%	100.0%
3～5回	頻度	<b>166</b>	<b>137</b>	<b>18</b>	<b>7</b>	<b>94</b>	<b>49</b>	471
	カテゴリ別の%	35.2%	29.1%	3.8%	1.5%	20.0%	10.4%	100.0%
6～10回	頻度	<b>104</b>	<b>94</b>	<b>22</b>	<b>12</b>	<b>50</b>	<b>15</b>	297
	カテゴリ別の%	35.0%	31.6%	7.4%	4.0%	16.8%	5.1%	100.0%
11～15回	頻度	<b>48</b>	21	3	<b>8</b>	18	<b>7</b>	105
	カテゴリ別の%	45.7%	20.0%	2.9%	7.6%	17.1%	6.7%	100.0%
16回以上	頻度	<b>54</b>	23	4	<b>14</b>	20	<b>2</b>	117
	カテゴリ別の%	46.2%	19.7%	3.4%	12.0%	17.1%	1.7%	100.0%
総数		1424	1037	125	60	1481	2096	6223

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q31. 児童心理司による面接

▶ 設問：「このケースの相談受理後に、児童心理司による子どもへの面接を行いましたか」

- 「児童心理司による面接」を行ったケースは 18.9%であった。

Q31 児童心理司による面接

	度数	%	%グラフ
行った	1192	18.9	
行っていない	5060	80.3	
無回答	48	0.8	
合計	6300	100	

### 児童心理司との面接と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」は児童心理司との面接を行っている報告が相対的に多かった。一方、「心理的虐待」「DV 目撃」は逆に、児童心理司による面接を行っていないケースが多かった。

Q31 児童心理司による面接と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
行った	頻度	<b>420</b>	<b>256</b>	<b>48</b>	<b>42</b>	<u>232</u>	<u>193</u>	1191
	カテゴリ別の%	29.5%	24.7%	38.4%	70.0%	15.7%	9.2%	19.1%
行っていない	頻度	<u>1002</u>	<u>781</u>	<u>77</u>	<u>18</u>	<b>1246</b>	<b>1912</b>	5036
	カテゴリ別の%	70.5%	75.3%	61.6%	30.0%	84.3%	90.8%	80.9%
総数		1422	1037	125	60	1478	2105	6227

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q32. 主たる虐待者との面接

➤ 設問：「このケースの相談受理後に、主たる虐待者に面接しましたか」

- 「主たる虐待者に会っていない」というケースが 34.3% に上っている。会えている割合は 55.0% であるが、「主たる虐待者」には会えず「従たる虐待者」のみとの面接である場合も 10% 程度に達した。

Q32 主たる虐待者との面接

	度数	%	% グラフ
会った	3465	55.0	
従たる虐待者には会ったが、主たる虐待者には会っていない	628	10.0	
会っていない	2164	34.3	
無回答	43	0.7	
合計	6300	100	

### 主たる虐待者との面接と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」「ネグレクト」「心理的虐待」は主たる虐待者と会っているケースが多い。一方「DV 目撃」は主たる虐待者とそもそも会っていないか、従たる虐待者にのみ会っているケースが多い傾向がある。「性的虐待」も、主たる虐待者と会っていないが、従たる虐待者とは会っているケースが多いのも特徴的である。DV や性的虐待を行う男性加害者との接触の難しさが浮き彫りになっていると思われる。

Q32 主たる虐待者との面接と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計
主たる虐待者に会った	頻度	<b>897</b>	<b>738</b>	<b>94</b>	29	<b>904</b>	<b>797</b>	3459
	カテゴリ別の%	62.9%	71.0%	75.2%	48.3%	61.2%	37.9%	55.5%
従たる虐待者には会ったが、主たる虐待者には会っていない	頻度	<u>90</u>	<u>31</u>	8	<b>11</b>	<u>96</u>	<b>391</b>	627
	カテゴリ別の%	6.3%	3.0%	6.4%	18.3%	6.5%	18.6%	10.1%
会っていない	頻度	<u>440</u>	<u>270</u>	<u>23</u>	20	478	<b>915</b>	2146
	カテゴリ別の%	30.8%	26.0%	18.4%	33.3%	32.3%	43.5%	34.4%
	総数	1427	1039	125	60	1478	2103	6232

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### Q33. 保護者との面接回数

- ▶ 設問注：「※一時保護となった場合は、一時保護所職員を除く児童相談所職員とします」
- 「なし」と回答したケースが約3割認められた。7割以上のケースでは少なくとも1回以上面接を行っていたが、回数は1~2回程度にとどまっている者が多く、3回以上会っているケースは2割である。

Q33 保護者との面接回数について

	度数	%	%グラフ
なし	1808	28.7	
1~2回	2989	47.4	
3~5回	851	13.5	
6~10回	440	7.0	
11~15回	99	1.6	
16回以上	53	0.8	
無回答	60	1.0	
合計	6300	100	

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「なし」が 26.0%で、7 割以上で少なくとも 1 回以上面会しており、今回の調査結果と同様であった。

#### 保護者との面接回数と虐待種別のクロス表

子どもとの面接回数 (Q30) の時と同様の傾向が認められた。すなわち、全体として「心理的虐待」は面接回数が少なく、「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」は面接回数が多い傾向が見られた。特に「性的虐待」「身体的虐待」は実施される面接回数が多い傾向があった。

Q33 保護者との面接回数と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
なし	頻度	<u>360</u>	<u>263</u>	<u>22</u>	11	422	<u>713</u>	1791
	カテゴリ別の%	25.3%	25.4%	17.5%	18.3%	28.4%	34.2%	28.8%
1~2回	頻度	<u>615</u>	<u>396</u>	<u>47</u>	<u>10</u>	728	<u>1187</u>	2983
	カテゴリ別の%	43.2%	38.2%	37.3%	16.7%	49.1%	56.9%	48.0%
3~5回	頻度	<u>239</u>	<u>226</u>	<u>31</u>	11	203	<u>139</u>	849
	カテゴリ別の%	16.8%	21.8%	24.6%	18.3%	13.7%	6.7%	13.7%
6~10回	頻度	<u>148</u>	<u>123</u>	<u>21</u>	<u>22</u>	91	<u>35</u>	440
	カテゴリ別の%	10.4%	11.9%	16.7%	36.7%	6.1%	1.7%	7.1%
11~15回	頻度	<u>42</u>	19	5	<u>3</u>	22	<u>8</u>	99
	カテゴリ別の%	3.0%	1.8%	4.0%	5.0%	1.5%	0.4%	1.6%
16回以上	頻度	18	9	0	<u>3</u>	18	<u>5</u>	53
	カテゴリ別の%	1.3%	0.9%	0.0%	5.0%	1.2%	0.2%	0.9%
総数		1422	1036	126	60	1484	2087	6215

\*太字はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q34. 要保護児童対策地域協議会（要対協）の個別ケース検討会の開催

- 要対協の個別ケース検討会を開催したケースは 15.0%にとどまっており、8 割以上のケースでは検討会を開催していなかった。

Q34 要対協の個別ケース検討会について

	度数	%	%グラフ
開催した	942	15.0	
開催していない	5267	83.6	
無回答	91	1.4	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「開催した」21.2%、「開催していない」が 77.3%であり、今回の調査のほうが実施率は低くなっていた。

### 要対協の個別ケース検討会と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」は要対協のケース検討会が相対的に開かれる頻度が高く、「DV 目撃」は開催されない傾向が認められた。

Q34 要対協の個別ケース検討会の有無と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
開催した	頻度	<b>252</b>	<b>274</b>	24	<b>17</b>	220	<b>152</b>	939
	カテゴリ別の%	17.8%	26.7%	19.0%	28.8%	14.9%	7.3%	15.2%
開催していない	頻度	<b>1162</b>	<b>752</b>	102	<b>42</b>	1252	<b>1934</b>	5244
	カテゴリ別の%	82.2%	73.3%	81.0%	71.2%	85.1%	92.7%	84.8%
総数		1414	1026	126	59	1472	2086	6183

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

(援助およびその結果について)

## Q35. 保護者・子どもに対して導入された具体的なサービス（複数回答）

- サービスを導入しているケースは、対象となる 6,300 件の 24.4%にあたる 1,541 件であった。
- サービスを導入したケース 1,541 件を全体として見たとき、「その他」を除いて最も多かったのは「保護者の医療機関受診（精神科）（12.1%）」であった。次いで「DV 被害者支援機関等（9.9%）」、「生活保護受給（8.6%）」、「保育所（8.0%）」と続いていた。

Q35 保護者・子どもに導入されたサービス（複数回答）

	度数	全体の%	サービス導入ケースの%	サービス導入ケースの%グラフ
ヘルパー利用・ヘルパー派遣	75	1.2	4.9	
生活保護受給	133	2.1	8.6	
保護者の医療機関受診（精神科）	186	3.0	12.1	
保護者の医療機関受診（精神科以外）	25	0.4	1.6	
保護者の依存症治療・相談	33	0.5	2.1	
DV被害者支援機関やサービス	153	2.4	9.9	
性暴力被害者支援機関やサービス	2	0.0	0.1	
母子生活支援	64	1.0	4.2	
ファミリーサポート	23	0.4	1.5	
保育所	123	2.0	8.0	
学童保育	17	0.3	1.1	
児童館	40	0.6	2.6	
トワイライトステイ・ショートステイ	43	0.7	2.8	
児童扶養手当	52	0.8	3.4	
就学援助金	4	0.1	0.3	
短期入所	7	0.1	0.5	
子どもの医療機関の受診（精神科）	120	1.9	7.8	
子どもの医療機関の受診（精神科以外）	72	1.1	4.7	
児童発達支援センター	45	0.7	2.9	
放課後等デイサービス	64	1.0	4.2	
その他	260	4.1	16.9	
サービス導入したケースの合計	1541			
サービスを導入していない	5120	81.3		
該当ケース数	6300			

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

## \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「サービスを導入していない」71.0%を除いたケースでは、「保育所利用」が 4.1%と最も多く、次に「生活保護受給」「保護者の医療機関受診」が続いた。

### 導入されたサービス（複数回答）と年齢カテゴリ（5段階）のクロス表

まず各導入サービスの割合が総じて低いことに留意しつつ特徴を列挙すると、1歳未満では「保育所」「医療機関受診（精神科）」「子どもの医療機関受診（精神科以外）」「児童館」「児童扶養手当」が、1-5歳では「保育所」「母子生活支援」「児童発達支援センター」「ファミリーサポート」が、6-11歳では「放課後等デイサービス」「学童保育」が、12-14歳では「子どもの医療機関受診（精神科）」が、15歳以上では「DV被害者支援」「保護者の依存症治療」の導入頻度がそれぞれ高い傾向が認められた。

### 導入されたサービス（複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

導入サービスの割合が低いので慎重な議論が必要だが、他虐待種との比較から特徴を記述する。

まず「ネグレクト」は「ヘルパー利用・派遣」「生活保護」「医療機関受診（精神科以外）」「子どもの医療機関受診（精神科以外）」のサービスが提供されていた。「身体的虐待」は「子どもの医療機関受診（精神科・精神科以外）」「放課後デイサービス」「トワイライトステイ・ショートステイ」が提供される傾向があった。心理的虐待は「生活保護」が、DV目撃には「DV被害者支援・サービス」や「母子生活支援」サービスが提供される頻度が高かったものの、「サービス導入なし」の報告も多かった。

### 導入されたサービス（複数回答）と虐待重症度のクロス表

同様に、導入サービスの割合が低いので慎重な議論が必要だが、他虐待種との比較から特徴を記述する。

虐待の危惧あり・軽度虐待では「サービス導入なし」の報告が多かった。中度虐待では「子どもの医療機関受診」「放課後デイサービス」「保育所」「医療機関受診（精神科）」が多かった。重度虐待・生命の危機では「ヘルパー利用」「生活保護」「医療機関受診（精神科）」「保護者の依存症治療」「DV被害者支援」「母子生活支援」「保育所」「児童扶養手当」「子どもの医療機関受診（精神科・精神科以外）」「ヘルパー利用」等、様々なサービスが提供されていた。

## 導入されたサービス（複数回答）と年齢カテゴリ（5段階）のクロス表

Q35 導入されたサービスと年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
ヘルパー利用・派遣	頻度	7	28	20	12	8	75
	カテゴリ別の%	1.7%	1.3%	0.9%	1.3%	1.5%	1.2%
生活保護受給	頻度	11	53	41	<u>14</u>	12	131
	カテゴリ別の%	2.7%	2.4%	1.9%	1.5%	2.3%	2.1%
医療機関受診 （精神科）	頻度	<b>19</b>	69	56	26	16	186
	カテゴリ別の%	4.7%	3.1%	2.6%	2.8%	3.0%	3.0%
医療機関受診 （精神科以外）	頻度	4	9	10	2	0	25
	カテゴリ別の%	1.0%	0.4%	0.5%	0.2%	0.0%	0.4%
保護者の依存症 治療・相談	頻度	3	7	12	3	<b>8</b>	33
	カテゴリ別の%	0.7%	0.3%	0.6%	0.3%	1.5%	0.5%
DV被害者支援機関や サービス	頻度	8	56	54	<u>13</u>	<b>20</b>	151
	カテゴリ別の%	2.0%	2.5%	2.5%	1.4%	3.8%	2.4%
性暴力被害者 支援機関やサービス	頻度	0	0	1	0	1	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%
母子生活支援	頻度	6	<b>31</b>	19	4	1	61
	カテゴリ別の%	1.5%	1.4%	0.9%	0.4%	0.2%	1.0%
ファミリーサポート	頻度	3	<b>15</b>	<u>4</u>	<u>0</u>	0	22
	カテゴリ別の%	0.7%	0.7%	0.2%	0.0%	0.0%	0.4%
保育所	頻度	<b>20</b>	<b>88</b>	<u>13</u>	<u>2</u>	<u>0</u>	123
	カテゴリ別の%	5.0%	4.0%	0.6%	0.2%	0.0%	2.0%
学童保育	頻度	0	<u>1</u>	<b>15</b>	0	1	17
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.2%	0.3%
児童館	頻度	<b>8</b>	14	14	2	2	40
	カテゴリ別の%	2.0%	0.6%	0.6%	0.2%	0.4%	0.6%
トワイライトステイ・ ショートステイ	頻度	3	22	13	3	2	43
	カテゴリ別の%	0.7%	1.0%	0.6%	0.3%	0.4%	0.7%
児童扶養手当	頻度	<b>8</b>	17	16	5	5	51
	カテゴリ別の%	2.0%	0.8%	0.7%	0.5%	0.9%	0.8%
就学補助金	頻度	0	0	4	0	0	4
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.0%	0.1%
短期入所	頻度	0	1	3	1	2	7
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.4%	0.1%
子供の医療機関受診 （精神科）	頻度	<u>0</u>	9	50	<b>46</b>	13	118
	カテゴリ別の%	0.0%	0.4%	2.3%	4.9%	2.4%	1.9%
子供の医療機関受診 （精神科以外）	頻度	<b>10</b>	25	19	12	<u>6</u>	72
	カテゴリ別の%	2.5%	1.1%	0.9%	1.3%	1.1%	1.2%
児童発達支援 センター	頻度	0	<b>22</b>	18	3	1	44
	カテゴリ別の%	0.0%	1.0%	0.8%	0.3%	0.2%	0.7%
放課後等 デイサービス	頻度	1	<u>10</u>	<b>38</b>	11	4	64
	カテゴリ別の%	0.2%	0.5%	1.7%	1.2%	0.8%	1.0%
その他	頻度	21	90	85	35	25	256
	カテゴリ別の%	5.2%	4.1%	3.9%	3.8%	4.7%	4.1%
サービスを導入 していない	頻度	<u>300</u>	1772	1805	766	445	5088
	カテゴリ別の%	74.8%	80.4%	82.8%	82.2%	83.6%	81.4%
	全体	401	2203	2179	932	532	6247

\***太字**はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## 導入されたサービス（複数回答）と主たる虐待種別のクロス表

Q35 導入されたサービスと主たる虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト		性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計
			ネグレクト	(同居人の虐待放置)				
ヘルパー利用・派遣	頻度	30	<b>35</b>	<b>6</b>	1	23	36	131
	カテゴリ別の%	2.1%	3.4%	4.8%	1.6%	1.5%	1.7%	2.1%
生活保護受給	頻度	45	<b>51</b>	6	3	<b>61</b>	<b>19</b>	185
	カテゴリ別の%	3.1%	4.9%	4.8%	4.9%	4.1%	0.9%	3.0%
医療機関受診 (精神科)	頻度	32	63	63	57	23	12	187
	カテゴリ別の%	4.4%	2.9%	2.9%	2.7%	2.8%	3.1%	3.0%
医療機関受診 (精神科以外)	頻度	5	<b>12</b>	0	0	4	4	25
	カテゴリ別の%	0.3%	1.2%	0.0%	0.0%	0.3%	0.2%	0.4%
保護者の依存症 治療・相談	頻度	12	7	0	<b>2</b>	5	7	33
	カテゴリ別の%	0.8%	0.7%	0.0%	3.3%	0.3%	0.3%	0.5%
DV被害者支援機関や サービス	頻度	<b>19</b>	<b>6</b>	0	1	29	<b>98</b>	153
	カテゴリ別の%	1.3%	0.6%	0.0%	1.6%	1.9%	4.6%	2.4%
性暴力被害者 支援機関やサービス	頻度	1	0	0	1	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	1.6%	0.0%	0.0%	0.0%
母子生活支援	頻度	12	<b>3</b>	0	0	<b>8</b>	<b>41</b>	64
	カテゴリ別の%	0.8%	0.3%	0.0%	0.0%	0.5%	1.9%	1.0%
ファミリーサポート	頻度	<b>12</b>	3	1	0	6	1	23
	カテゴリ別の%	0.8%	0.3%	0.8%	0.0%	0.4%	0.0%	0.4%
保育所	頻度	30	31	2	1	26	33	123
	カテゴリ別の%	2.1%	3.0%	1.6%	1.6%	1.7%	1.6%	2.0%
学童保育	頻度	9	4	1	0	0	3	17
	カテゴリ別の%	0.6%	0.4%	0.8%	0.0%	0.0%	0.1%	0.3%
児童館	頻度	7	6	1	0	13	13	40
	カテゴリ別の%	0.5%	0.6%	0.8%	0.0%	0.9%	0.6%	0.6%
トワイライトステイ・ ショートステイ	頻度	<b>20</b>	<b>12</b>	0	0	10	<b>1</b>	43
	カテゴリ別の%	1.4%	1.2%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.7%
児童扶養手当	頻度	7	9	<b>4</b>	1	9	22	52
	カテゴリ別の%	0.5%	0.9%	3.2%	1.6%	0.6%	1.0%	0.8%
就学補助金	頻度	1	0	0	0	0	3	4
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%
短期入所	頻度	4	2	0	0	1	0	7
	カテゴリ別の%	0.3%	0.2%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%
子供の医療機関受診 (精神科)	頻度	<b>59</b>	17	<b>10</b>	3	22	<b>9</b>	120
	カテゴリ別の%	4.1%	1.6%	7.9%	4.9%	1.5%	0.4%	1.9%
子供の医療機関受診 (精神科以外)	頻度	<b>25</b>	<b>33</b>	<b>4</b>	2	<b>5</b>	<b>3</b>	72
	カテゴリ別の%	1.7%	3.2%	3.2%	3.3%	0.3%	0.1%	1.1%
児童発達支援 センター	頻度	<b>18</b>	10	1	0	9	<b>7</b>	45
	カテゴリ別の%	1.3%	1.0%	0.8%	0.0%	0.6%	0.3%	0.7%
放課後等 デイサービス	頻度	<b>26</b>	14	<b>4</b>	1	15	<b>4</b>	64
	カテゴリ別の%	1.8%	1.3%	3.2%	1.6%	1.0%	0.2%	1.0%
その他	頻度	<b>76</b>	<b>64</b>	5	5	<b>46</b>	<b>60</b>	256
	カテゴリ別の%	5.3%	6.1%	4.0%	8.2%	3.1%	2.8%	4.1%
サービスを導入 していない	頻度	<b>1122</b>	<b>771</b>	97	<b>37</b>	<b>1268</b>	<b>1806</b>	5101
	カテゴリ別の%	78.3%	73.9%	77.0%	61.7%	84.9%	85.6%	81.4%
	全体	734	2163	2163	2168	835	387	6287

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## 導入されたサービス（複数回答）と虐待重症度のクロス表

Q35 導入されたサービスと虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
ヘルパー利用・派遣	頻度	8	<u>21</u>	<b>31</b>	<b>11</b>	1	1	73
	カテゴリ別の%	0.7%	0.7%	2.0%	4.5%	3.7%	0.4%	1.2%
生活保護受給	頻度	17	59	31	<b>23</b>	0	3	133
	カテゴリ別の%	1.4%	2.0%	2.0%	9.3%	0.0%	1.3%	2.1%
医療機関受診 (精神科)	頻度	32	<u>52</u>	<b>79</b>	<b>18</b>	<b>5</b>	0	186
	カテゴリ別の%	2.7%	1.7%	5.0%	7.3%	18.5%	0.0%	3.0%
医療機関受診 (精神科以外)	頻度	4	10	9	2	0	0	25
	カテゴリ別の%	0.3%	0.3%	0.6%	0.8%	0.0%	0.0%	0.4%
保護者の依存症 治療・相談	頻度	6	15	7	<b>4</b>	<b>1</b>	0	33
	カテゴリ別の%	0.5%	0.5%	0.4%	1.6%	3.7%	0.0%	0.5%
DV被害者支援機関や サービス	頻度	28	<u>61</u>	46	<b>18</b>	0	0	153
	カテゴリ別の%	2.4%	2.1%	2.9%	7.3%	0.0%	0.0%	2.5%
性暴力被害者 支援機関やサービス	頻度	0	0	1	1	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.1%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%
母子生活支援	頻度	<u>6</u>	28	16	<b>11</b>	0	3	64
	カテゴリ別の%	0.5%	0.9%	1.0%	4.5%	0.0%	1.3%	1.0%
ファミリーサポート	頻度	3	12	5	2	0	0	22
	カテゴリ別の%	0.3%	0.4%	0.3%	0.8%	0.0%	0.0%	0.4%
保育所	頻度	22	<u>44</u>	<b>43</b>	<b>9</b>	0	1	119
	カテゴリ別の%	1.9%	1.5%	2.7%	3.6%	0.0%	0.4%	1.9%
学童保育	頻度	1	8	7	1	0	0	17
	カテゴリ別の%	0.1%	0.3%	0.4%	0.4%	0.0%	0.0%	0.3%
児童館	頻度	7	15	16	1	0	0	39
	カテゴリ別の%	0.6%	0.5%	1.0%	0.4%	0.0%	0.0%	0.6%
トワイライトステイ・ ショートステイ	頻度	4	24	13	1	0	1	43
	カテゴリ別の%	0.3%	0.8%	0.8%	0.4%	0.0%	0.4%	0.7%
児童扶養手当	頻度	5	<u>15</u>	16	<b>13</b>	1	2	52
	カテゴリ別の%	0.4%	0.5%	1.0%	5.3%	3.7%	0.9%	0.8%
就学補助金	頻度	0	3	1	0	0	0	4
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
短期入所	頻度	0	1	5	1	0	0	7
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.3%	0.4%	0.0%	0.0%	0.1%
子供の医療機関受診 (精神科)	頻度	<u>9</u>	52	<b>48</b>	<b>9</b>	0	0	118
	カテゴリ別の%	0.8%	1.7%	3.1%	3.6%	0.0%	0.0%	1.9%
子供の医療機関受診 (精神科以外)	頻度	8	12	24	<b>20</b>	<b>5</b>	2	71
	カテゴリ別の%	0.7%	0.4%	1.5%	8.1%	18.5%	0.9%	1.1%
児童発達支援 センター	頻度	5	25	15	0	0	0	45
	カテゴリ別の%	0.4%	0.8%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%
放課後等 デイサービス	頻度	<u>4</u>	26	<b>24</b>	<b>8</b>	1	1	64
	カテゴリ別の%	0.3%	0.9%	1.5%	3.2%	3.7%	0.4%	1.0%
その他	頻度	42	<u>101</u>	73	<b>24</b>	<b>6</b>	12	258
	カテゴリ別の%	3.5%	3.4%	4.6%	9.7%	22.2%	5.3%	4.1%
サービスを導入 していない	頻度	<b>1006</b>	<b>2519</b>	<b>1193</b>	<b>141</b>	<b>11</b>	190	5060
	カテゴリ別の%	85.0%	84.8%	76.0%	57.1%	40.7%	84.4%	81.3%
総数		1184	2972	1570	247	27	225	6225

\*太字はカイ2乗検定（もしくはFisherの直接確率計算）および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q36. 現在の虐待の状況

- 設問：「現在の状況（相談終結であればその時点）における、虐待の状況についてお答えください」
- 約半分の 47.1%が「虐待は止まり再発可能性低い」と報告された一方、「不明」を含めた残りの半数では、「再発可能性あり（41.1%）」「危ない状態（1.6%）」など、リスクのある状態が続いていた。

Q36 現在の虐待の状況

	度数	%	%グラフ
虐待は止まり再発可能性も低い	2962	47.0	
虐待はある程度止まっているが、再発可能性ある	2589	41.1	
虐待行為が生じ、危ない状況が続く	100	1.6	
不明	600	9.5	
無回答	49	0.8	
合計	6300	100	

### 現在の虐待の状況と年齢カテゴリのクロス表

虐待の状況と年齢の関係を見ると、6~11歳・12~14歳においては他の年齢よりも、「虐待は止まっているが再発の可能性がある」として報告されていた。一方で1~5歳・15歳以上は「虐待が止まり再発可能性低い」と報告される傾向があった。虐待の継続や再発が相対的に懸念されるのは小学校・中学校の学童期年齢であることを示す結果である。

Q36 現在の虐待の状況と年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
虐待は止まり	頻度	202	<b>1079</b>	<u>968</u>	417	<b>276</b>	2942
再発可能性低い	カテゴリ別の%	50.9%	49.4%	44.7%	44.9%	52.2%	47.4%
虐待はある程度止まるが、	頻度	147	<u>859</u>	<b>961</b>	<b>414</b>	<u>196</u>	2577
再発可能性ある	カテゴリ別の%	37.0%	39.3%	44.3%	44.6%	37.1%	41.5%
虐待行為が生じ、	頻度	6	27	37	19	9	98
危ない状況が続く	カテゴリ別の%	1.5%	1.2%	1.7%	2.0%	1.7%	1.6%
不明	頻度	42	218	201	78	48	587
	カテゴリ別の%	10.6%	10.0%	9.3%	8.4%	9.1%	9.5%
	総数	727	2134	2139	823	381	6204

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したもの。

## 現在の虐待の状況と虐待種別のクロス表

DV 目撃・同居人の虐待放置・性的虐待については「虐待が止まり再発可能性低い」報告が多い。ネグレクトは「再発可能性あり」「危ない状況」の報告が多い。心理的虐待は「再発可能性あり」「不明」の報告が多い。身体的虐待にはっきりとした傾向は認められない。

Q36 現在の虐待の状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
虐待は止まり 再発可能性低い	頻度	691	<u>378</u>	70	<b>38</b>	<u>604</u>	<b>1177</b>	2958
	カテゴリ別の%	48.5%	36.6%	56.0%	63.3%	40.7%	56.1%	47.5%
虐待はある程度止まるが、 再発可能性ある	頻度	601	<b>506</b>	45	<u>14</u>	<b>681</b>	<u>733</u>	2580
	カテゴリ別の%	42.2%	48.9%	36.0%	23.3%	45.9%	34.9%	41.5%
虐待行為が生じ、 危ない状況が続く	頻度	25	<b>44</b>	0	0	19	<u>12</u>	100
	カテゴリ別の%	1.8%	4.3%	0.0%	0.0%	1.3%	0.6%	1.6%
不明	頻度	<u>107</u>	106	10	8	<b>179</b>	<u>176</u>	586
	カテゴリ別の%	7.5%	10.3%	8.0%	13.3%	12.1%	8.4%	9.4%
	総数	1424	1034	125	60	1483	2098	6224

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## 現在の虐待の状況と虐待重症度のクロス表

「虐待の危惧あり」群では、「虐待は止まり、再発の可能性が低い」58.2%で他の群と比して最も高い。「軽度虐待」では虐待が継続している事例は1%に過ぎず、「虐待は止まり、再発の可能性が低い」が48.5%で最も高いが、「虐待はある程度止まるが再発の可能性はある」も43.1%に達し、再発可能性も残る。「中度虐待」「重度虐待」では、虐待が継続している事例は各々2.4%、8.5%であり、介入してもその継続を止められない場合があることが示されている。また「中度虐待」「重度虐待」では、「一旦止まっても再発の可能性はある」報告が「再発可能性が低い」報告より多かった。特に「中度虐待」は重度より切迫性はないものの再発の可能性は重度虐待群以上にあり、子どもを保護しない場合には再発防止のための対応が工夫される必要がある事例が多いと思われた。

Q36 現在の虐待の状況と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
虐待は止まり 再発可能性低い	頻度	<b>683</b>	1431	<u>642</u>	106	11	<u>63</u>	2936
	カテゴリ別の%	58.2%	48.4%	41.2%	43.6%	40.7%	28.8%	47.5%
虐待はある程度止まるが、 再発可能性ある	頻度	<u>390</u>	<b>1279</b>	<b>759</b>	103	10	<u>22</u>	2563
	カテゴリ別の%	33.2%	43.2%	48.7%	42.4%	37.0%	10.0%	41.5%
虐待行為が生じ、 危ない状況が続く	頻度	<u>11</u>	<u>31</u>	<b>36</b>	<b>20</b>	1	1	100
	カテゴリ別の%	0.9%	1.0%	2.3%	8.2%	3.7%	0.5%	1.6%
不明	頻度	<u>90</u>	<u>218</u>	<u>123</u>	<u>14</u>	5	<b>133</b>	583
	カテゴリ別の%	7.7%	7.4%	7.9%	5.8%	18.5%	60.7%	9.4%
	総数	1174	2959	1560	243	27	219	6182

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q37. 支援後の保護者の状況について

- 設問：「調査時点の支援後の保護者の状況について、受理時と比較してお答えください」
- 「養育の状況は変わらない」「むしろ悪化」が2割強あるが、多くのケースでは改善が認められた。

Q37 調査時点の支援後の保護者の状況

	度数	%	%グラフ
養育行動や状況が改善	2147	34.1	
養育行動や状況がある程度改善	2687	42.7	
養育行動や状況は変わらない	1269	20.1	
養育行動や状況はむしろ悪化	29	0.5	
無回答	168	2.7	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「変わらない」が 41.4%、改善のあったものが 53.3%であり、この 5 年間で、支援による保護者の状況が大幅に変化したといえよう。

### 支援後の保護者の状況と年齢カテゴリーのクロス表

「1 歳未満」「1-5 歳」では「改善された」という報告頻度が高い。一方「6-11 歳」「12-14 歳」では「ある程度改善された」とする報告が多かった。

Q37 支援後の保護者の状況と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
養育行動や状況が改善	頻度	<b>161</b>	<b>801</b>	714	<u>289</u>	170	2135
	カテゴリ別の%	40.7%	37.5%	33.5%	31.7%	32.6%	35.0%
養育行動や状況がある程度改善	頻度	<u>150</u>	<u>891</u>	<b>970</b>	<b>432</b>	227	2670
	カテゴリ別の%	37.9%	41.7%	45.6%	47.3%	43.5%	43.8%
養育状況は変わらない	頻度	83	432	435	188	123	1261
	カテゴリ別の%	21.0%	20.2%	20.4%	20.6%	23.6%	20.7%
養育行動や状況はむしろ悪化	頻度	2	11	10	4	2	29
	カテゴリ別の%	0.5%	0.5%	0.5%	0.4%	0.4%	0.5%
	総数	396	2135	2129	913	522	6095

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

調査 2

**支援後の保護者の状況と虐待種別のクロス表**

身体的虐待では「ある程度改善」の報告頻度が高い。ネグレクトは「養育状況は変わらない」報告が多い。心理的虐待は「ある程度改善」「変わらない」報告頻度が高くなっている。DV 目撃は「改善」の報告頻度が高い。

**Q37 支援後の保護者の状況と虐待種別のクロス集計表**

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
養育行動や状況が改善	頻度	<u>455</u>	<u>288</u>	51	28	<u>430</u>	<u>892</u>	2144
	カテゴリ別の%	32.3%	28.3%	41.1%	47.5%	29.9%	43.2%	35.1%
養育行動や状況がある程度改善	頻度	<b>670</b>	454	<u>44</u>	24	<b>679</b>	<u>809</u>	2680
	カテゴリ別の%	47.6%	44.6%	35.5%	40.7%	47.3%	39.2%	43.9%
養育状況は変わらない	頻度	279	<b>261</b>	28	7	<b>321</b>	<u>361</u>	1257
	カテゴリ別の%	19.8%	25.7%	22.6%	11.9%	22.3%	17.5%	20.6%
養育行動や状況はむしろ悪化	頻度	4	<b>14</b>	1	0	7	<u>3</u>	29
	カテゴリ別の%	0.3%	1.4%	0.8%	0.0%	0.5%	0.1%	0.5%
	総数	1408	1017	124	59	1437	2065	6110

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

**支援後の保護者の状況と虐待重症度のクロス表**

虐待重症度とそのまま比例するような結果であり、「虐待の危惧あり」では「改善」の報告頻度が高く、「軽度虐待」「中度虐待」では「ある程度改善」の頻度が高かった。「中度虐待」「生命の危機」では「変わらない」頻度が高い。重度虐待では「むしろ悪化した」という報告も高くなっていた。

**Q37 支援後の保護者の状況と虐待重症度のクロス集計表**

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
養育行動や状況が改善	頻度	<b>499</b>	1039	<u>457</u>	82	8	<u>45</u>	2130
	カテゴリ別の%	43.3%	35.8%	29.4%	33.9%	30.8%	23.8%	35.1%
養育行動や状況がある程度改善	頻度	478	<b>1316</b>	<b>726</b>	<u>91</u>	8	<u>38</u>	2657
	カテゴリ別の%	41.5%	45.3%	46.7%	37.6%	30.8%	20.1%	43.8%
養育状況は変わらない	頻度	<u>174</u>	<u>540</u>	<b>366</b>	57	<b>10</b>	<b>104</b>	1251
	カテゴリ別の%	15.1%	18.6%	23.6%	23.6%	38.5%	55.0%	20.6%
養育行動や状況はむしろ悪化	頻度	2	<u>9</u>	4	<b>12</b>	0	2	29
	カテゴリ別の%	0.2%	0.3%	0.3%	5.0%	0.0%	1.1%	0.5%
	総数	1153	2904	1553	242	26	189	6067

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q38. 子どもの心身のダメージについて

- ▶ 設問：「調査時点での支援後の子どもの心身のダメージについて、受理時と比較してお答えください」
- 「受理時に元々ダメージがなかった」が44.1%と半数を占めた。ダメージがあった者の中では、改善を認めるものが計22.7%と多かったが、一方5.9%が「改善があまりない／むしろ悪化した」という報告であった。

Q38 支援後の子どもの心身のダメージ

	度数	%	%グラフ
受理時にダメージあったが、改善がはっきり認められる	316	5.0	
受理時にダメージあったが、ある程度改善した	1115	17.7	
受理時にダメージあったが、改善がない又はあまりない	360	5.7	
受理時にダメージあったが、悪化した	14	0.2	
受理時に元々ダメージなかった	2781	44.1	
不明	1661	26.4	
無回答	53	0.8	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「変わらない」が47.4%と最も多かったが、「改善した」「やや改善した」というケースが48%であり、今回の結果と単純に比較できないが、支援による効果を反映していると考えられる。

### 子どもの心身のダメージと年齢別カテゴリのクロス表

「受理時にダメージがない」報告は1歳未満・1~5歳で多く見られ、「ダメージを負った」報告は総じて6歳以上に多く見られた。6歳以上においては、「ある程度改善」に加えて「改善あまりなし」の報告も多くなり、年長の子どもの心身のダメージの残りやすさ・観察しやすさの双方を反映する可能性が考えられた。

Q38 子どもの心身のダメージと年齢カテゴリ（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
受理時ダメージの改善が はっきり認められる	頻度	28	<u>85</u>	99	<b>64</b>	36	312
	カテゴリ別の%	7.0%	3.9%	4.6%	6.9%	6.8%	5.0%
受理時ダメージが ある程度改善した	頻度	<u>24</u>	<u>238</u>	<b>448</b>	<b>254</b>	<b>147</b>	1111
	カテゴリ別の%	6.0%	10.9%	20.7%	27.4%	27.7%	17.9%
受理時ダメージの改善が ないまたはあまりない	頻度	<u>4</u>	<u>89</u>	136	<b>83</b>	<b>43</b>	355
	カテゴリ別の%	1.0%	4.1%	6.3%	9.0%	8.1%	5.7%
受理時ダメージが 悪化した	頻度	0	5	3	3	3	14
	カテゴリ別の%	0.0%	0.2%	0.1%	0.3%	0.6%	0.2%
受理時にもともと ダメージがなかった	頻度	<b>230</b>	<b>1107</b>	<u>918</u>	<u>336</u>	<u>173</u>	2764
	カテゴリ別の%	57.8%	50.8%	42.4%	36.2%	32.6%	44.6%
不明	頻度	112	<b>655</b>	563	<u>187</u>	129	1646
	カテゴリ別の%	28.1%	30.1%	26.0%	20.2%	24.3%	26.5%
総数		398	2179	2167	927	531	6202

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

調査 2

**子どもの心身のダメージと虐待種別のクロス表**

DV 目撃は「もともとダメージがない」と報告される頻度が高い。身体的虐待はダメージは負っていて、結果として改善したもの・していないもの双方の報告頻度が高い。ネグレクトは「ダメージの改善がない」もしくは「もともとダメージがない」双方の割合が高いのが特徴である。性的虐待は「改善あまりない」「ある程度改善した」という報告が多い。

**Q38 子どもの心身のダメージと虐待種別のクロス集計表**

		身体的虐待	ネグレクト ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計	
受理時ダメージの改善がはっきり認められる	頻度	<b>127</b>	52	<b>12</b>	6	<b>47</b>	<b>69</b>	313
	カテゴリ別の%	8.9%	5.0%	9.5%	10.2%	3.2%	3.3%	5.0%
受理時ダメージがある程度改善した	頻度	<b>433</b>	168	<b>39</b>	<b>25</b>	<b>226</b>	<b>222</b>	1113
	カテゴリ別の%	30.5%	16.2%	31.0%	42.4%	15.2%	10.6%	17.9%
受理時ダメージの改善がないまたはあまりない	頻度	<b>105</b>	<b>84</b>	10	<b>10</b>	81	<b>70</b>	360
	カテゴリ別の%	7.4%	8.1%	7.9%	16.9%	5.5%	3.3%	5.8%
受理時ダメージが悪化した	頻度	<b>7</b>	2	<b>2</b>	0	2	<b>1</b>	14
	カテゴリ別の%	0.5%	0.2%	1.6%	0.0%	0.1%	0.0%	0.2%
受理時にもともとダメージがなかった	頻度	<b>418</b>	<b>513</b>	<b>43</b>	<b>6</b>	668	<b>1127</b>	2775
	カテゴリ別の%	29.4%	49.5%	34.1%	10.2%	45.1%	53.7%	44.6%
不明	頻度	<b>332</b>	<b>217</b>	<b>20</b>	12	<b>458</b>	<b>608</b>	1647
	カテゴリ別の%	23.3%	20.9%	15.9%	20.3%	30.9%	29.0%	26.5%
	総数	1422	1036	126	59	1482	2097	6222

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

**子どもの心身のダメージと虐待重症度のクロス表**

軽度虐待は「もともとダメージがない」報告が多く、中度虐待以上に何らかのダメージを負っているものが集中している。重度虐待の方が改善しない回答の割合が中度虐待に比して高くなっている。

**Q38 子どもの心身のダメージと虐待重症度のクロス集計表**

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
受理時ダメージの改善がはっきり認められる	頻度	<b>38</b>	133	<b>96</b>	<b>30</b>	3	9	309
	カテゴリ別の%	3.2%	4.5%	6.1%	12.2%	11.1%	4.1%	5.0%
受理時ダメージがある程度改善した	頻度	<b>132</b>	544	<b>326</b>	<b>92</b>	6	<b>6</b>	1106
	カテゴリ別の%	11.3%	18.4%	20.9%	37.4%	22.2%	2.8%	17.9%
受理時ダメージの改善がないまたはあまりない	頻度	<b>32</b>	<b>131</b>	<b>162</b>	<b>30</b>	1	<b>1</b>	357
	カテゴリ別の%	2.7%	4.4%	10.4%	12.2%	3.7%	0.5%	5.8%
受理時ダメージが悪化した	頻度	0	<b>3</b>	6	<b>5</b>	0	0	14
	カテゴリ別の%	0.0%	0.1%	0.4%	2.0%	0.0%	0.0%	0.2%
受理時にもともとダメージがなかった	頻度	<b>699</b>	<b>1364</b>	<b>589</b>	<b>43</b>	8	<b>54</b>	2757
	カテゴリ別の%	59.6%	46.1%	37.7%	17.5%	29.6%	24.9%	44.6%
不明	頻度	<b>271</b>	782	<b>382</b>	<b>46</b>	9	<b>147</b>	1637
	カテゴリ別の%	23.1%	26.4%	24.5%	18.7%	33.3%	67.7%	26.5%
	総数	1172	2957	1561	246	27	217	6180

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q39. ケースの取り扱い状況

- ▶ 設問：「調査時点でのケースの取り扱い状況について、受理時と比較してお答えください」
- 「援助方針を決定し終結している」ケースが 68.9%と 7 割近くを占め、「援助中」22.0%と合わせると多くのケースで援助方針のもとに取り組みがなされていることがわかる。

Q39 調査時点でのケースの取り扱い状況

	度数	%	% グラフ
援助方針を決定していない（調査中）	417	6.6	
援助方針を決定し児童相談所として援助中	1387	22.0	
援助方針を決定し終結している	4343	68.9	
その他	113	1.8	
無回答	40	0.6	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査とは、状況の区分が異なるため単純に比較できないが、児童相談所として終結したケースが 43.9%でそのうち半数が市町村に引き継いだ形で終結していた。

### 調査時点でのケースの取り扱い状況と虐待種別のクロス表

心理的虐待・DV 目撃は「援助方針を決定し終結」の報告頻度が多く、身体的虐待・ネグレクト・性的虐待は「援助方針を決定し援助中」の報告頻度が相対的に多くなっていた。それぞれ前者は軽度の虐待として、後者は中度以上の虐待として扱われる機会の多さがこの結果に反映していると考えられる。

Q39 調査時点でのケースの取り扱い状況と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
				(同居人の虐待放置)				
援助方針を決定	頻度	104	71	<b>8</b>	8	100	122	413
していない（調査中）	カテゴリ別の%	7.3%	6.8%	6.4%	13.3%	6.8%	5.8%	6.6%
援助方針を決定し	頻度	<b>446</b>	<b>383</b>	<b>47</b>	<b>33</b>	<b>284</b>	<b>191</b>	1384
児童相談所として援助中	カテゴリ別の%	31.3%	36.8%	37.6%	55.0%	19.2%	9.1%	22.2%
援助方針を決定し	頻度	<b>848</b>	<b>564</b>	<b>66</b>	<b>18</b>	<b>1071</b>	<b>1759</b>	4326
終結している	カテゴリ別の%	59.4%	54.2%	52.8%	30.0%	72.4%	83.6%	69.4%
その他	頻度	29	22	4	1	25	31	112
	カテゴリ別の%	2.0%	2.1%	3.2%	1.7%	1.7%	1.5%	1.8%
	総数	1427	1040	125	60	1480	2103	6235

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したのもの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したのもの。

### Q39-1. 現時点での援助 (Q39「援助中」回答 1387 ケース限定：複数回答)

- ▶ 設問：「現時点でどのような援助を行っていますか」
- 現時点で援助を行っているケースでは「継続指導中」68.6%、「児童福祉施設入所措置等」15.0%、「児童福祉司指導中」13.3%と続いた。

**Q39-1 現時点での援助 (Q39「援助中」を選択したケース限定：複数回答)**

	度数	%	%グラフ
継続指導	951	68.6	
児童福祉司指導	184	13.3	
児童委員指導	1	0.1	
市町村指導	4	0.3	
児童家庭支援センター指導	3	0.2	
知的障害者福祉司指導、社会福祉主事指導	0	0.0	
障害者等支援事業を行う者の指導	0	0.0	
厚生労働省令で定めるものへの指導	0	0.0	
児童福祉施設入所措置、指定発達支援医療機関	208	15.0	
里親、小規模住宅型児童養育事業委託	36	2.6	
自立援助ホームへの入所	7	0.5	
その他	37	2.7	
該当ケース数	1387		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、ケースの取り扱い状況と合わせた形の設問となっていたが、「継続指導中」が 24.7%と最も多くなっていた。

## Q39-2. 相談が終結した理由（Q39「終結」回答 4343 ケース限定：複数回答）

➤ 設問：「相談が終結した理由をお答えください」

- 「問題が解決して相談の必要がなくなったと判断した」ケースが 60.6%と最も多く、次いで「他機関に引き継いだ」が 27.1%となっていた。

Q39-2 相談が終結した理由（Q39「援助終結」を選択したケース限定：複数回答）

	度数	%	%グラフ
他機関に引き継いだため	1176	27.1	
問題が解決して相談の必要がなくなったと判断	2630	60.6	
相談に来なくなり、関係が切れてしまったため	49	1.1	
転居等により、担当地区が変わったため	132	3.0	
その他	393	9.0	
該当ケース数	4343		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### 終結理由（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

1歳未満では「転居による担当者変更」、1~5歳では「他機関に引き継ぎ」「転居による担当者変更」、12~14歳では「相談に来なくなり関係が切れた」により終結したとするケースの頻度がそれぞれ相対的に高くなっていった。

Q39-2 終結理由と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
他機関に引き継いだため	頻度	89	<b>471</b>	389	161	<u>76</u>	1186
	カテゴリ別の%	32.0%	29.9%	26.1%	27.1%	19.4%	27.4%
問題が解決して相談の必要がなくなったため	頻度	165	921	927	377	247	2637
	カテゴリ別の%	60.2%	58.5%	61.9%	63.1%	63.0%	60.8%
相談に来なくなり、関係が切れてしまったため	頻度	2	12	15	<b>14</b>	5	48
	カテゴリ別の%	0.7%	0.8%	1.0%	2.4%	1.3%	1.1%
転居等により、担当地区が変わったため	頻度	<b>15</b>	<b>60</b>	40	16	<u>3</u>	134
	カテゴリ別の%	5.5%	3.8%	2.7%	2.7%	0.8%	3.1%
その他	頻度	<u>13</u>	128	136	49	<b>59</b>	385
	カテゴリ別の%	4.7%	8.2%	9.1%	8.3%	15.1%	8.9%
総数		274	1567	1493	592	391	4317

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 終結理由（複数回答）と虐待種別のクロス表

ネグレクトでは「他機関に引き継いだ」「転居等による担当者の変更」により終結しているケースの割合が他の虐待に比べて多かった。また DV 目撃は「問題解決による相談必要性の消失」による終結報告が多く認められた。

Q39-2 終結理由と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト		性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV目撃）	合計
			ネグレクト	（同居人の虐待放置）				
他機関に引き継いだため	頻度	237	<b>241</b>	11	3	<u>255</u>	<u>426</u>	1173
	カテゴリ別の%	27.9%	42.7%	16.7%	16.7%	23.8%	24.2%	27.1%
問題が解決して相談の必要がなくなったため	頻度	507	<u>253</u>	<u>51</u>	10	<u>619</u>	<b>1182</b>	2622
	カテゴリ別の%	59.8%	44.9%	77.3%	55.6%	57.8%	67.2%	60.6%
相談に来なくなり、関係が切れてしまったため	頻度	15	6	4	1	8	15	49
	カテゴリ別の%	1.8%	1.1%	6.1%	5.6%	0.7%	0.9%	1.1%
転居等により、担当地区が変わったため	頻度	26	<b>28</b>	0	0	24	54	132
	カテゴリ別の%	3.1%	5.0%	0.0%	0.0%	2.2%	3.1%	3.1%
その他	頻度	<u>92</u>	<u>38</u>	2	3	<b>122</b>	<u>131</u>	388
	カテゴリ別の%	10.8%	6.7%	3.0%	16.7%	11.4%	7.4%	9.0%
	総数	848	564	66	18	1071	1759	4326

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 終結理由（複数回答）と虐待重症度のクロス表

「虐待の危惧」では「問題解決による相談必要性の消失」の報告頻度が高くなっていった。一方中度虐待で「他機関に引き継いだ」、重度虐待で「転居等により担当者の変更があった」理由による終結の報告頻度が高くなっていることは注目すべきである。機関や地区の変更により引き継ぐケースは、重篤なものが多くなる傾向があることを示唆しており、引き継ぎ体制を充実させる必要性を裏付ける結果ともいえよう。

Q39-2 終結理由と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり				生命の危機あり	不明	合計
		軽度虐待	中度虐待	重度虐待				
他機関に引き継いだため	頻度	<u>205</u>	602	<b>300</b>	25	3	25	1160
	カテゴリ別の%	21.9%	27.7%	31.8%	32.9%	42.9%	17.1%	27.1%
問題が解決して相談の必要がなくなったため	頻度	<b>661</b>	1343	<u>532</u>	<u>34</u>	<u>1</u>	<u>37</u>	2608
	カテゴリ別の%	70.5%	61.7%	56.5%	44.7%	14.3%	25.3%	60.9%
相談に来なくなり、関係が切れてしまったため	頻度	7	31	8	0	0	2	48
	カテゴリ別の%	0.7%	1.4%	0.8%	0.0%	0.0%	1.4%	1.1%
転居等により、担当地区が変わったため	頻度	24	<u>52</u>	37	<b>14</b>	0	5	132
	カテゴリ別の%	2.6%	2.4%	3.9%	18.4%	0.0%	3.4%	3.1%
その他	頻度	<b>53</b>	<b>170</b>	81	8	<u>3</u>	<b>67</b>	382
	カテゴリ別の%	5.7%	7.8%	8.6%	10.5%	42.9%	45.9%	8.9%
	総数	848	564	66	18	1071	1759	4326

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### Q39-3. 終結の形 (Q39「終結」回答 4343 ケース限定)

➤ 設問：「どのような形で集結しましたか」

- 「助言指導」82.4%、「継続指導終結」10.5%で大半を占めた。

Q39-3 終結の形 (Q39「援助終結」を選択したケース限定)

	度数	%	%グラフ
助言指導	3577	82.4	
継続指導終結	454	10.5	
他機関あっせん	93	2.1	
訓戒、誓約措置	3	0.1	
2号措置解除	10	0.2	
3号措置解除、27条2項措置解除	1	0.0	
市町村への事案送致	110	2.5	
その他	57	1.3	
無回答	38	0.9	
合計	4343	100	

これ以降の設問は Q39-3 で「助言指導」を選び一時保護を行わなかったケースの回答は求めていない。  
したがって全数=6300 として計算しているが、無回答数とその分増加していることに留意する。

## Q40. 一時保護の有無

- 「一時保護を行った」「一時保護中」のケースは計 13.4%であった。

	度数	%	% グラフ
一時保護を行った	798	12.7	
一時保護中である	43	0.7	
一時保護は行っていない	1726	27.4	
無回答もしくは非該当	3733	59.3	
合計	6300	100	

\*「非該当」にはQ39-3で「助言指導」を選び一時保護を行わず終了したケースが含まれる。

### \*平成 25 年度調査との比較

「一時保護を行った」20.5%、「一時保護中」1.1%であり、この5年間で「一時保護」のケースが減少したと考えられる。

### 一時保護の有無と年齢カテゴリーのクロス表

12~14 歳で「一時保護を行った」報告頻度が他年代と比べて相対的に高くなっていた。また 1~5 歳では「一時保護は行っていない」頻度が高くなっていた。

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
一時保護を行った	頻度	44	<u>229</u>	272	<b>178</b>	70	793
	カテゴリ別の%	28.9%	26.8%	30.4%	40.1%	33.5%	31.0%
一時保護中である	頻度	2	<u>8</u>	18	10	4	42
	カテゴリ別の%	1.3%	0.9%	2.0%	2.3%	1.9%	1.6%
一時保護は行っていない	頻度	106	<b>618</b>	604	<u>256</u>	135	1719
	カテゴリ別の%	69.7%	72.3%	67.6%	57.7%	64.6%	67.3%
総数		152	855	894	444	209	2554

\***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。イタリックは有意に低い頻度を示したもの。

### 一時保護の有無とケースの取り扱いのクロス表

通告者（Q4）を区市町村の児相部門に限定したうえで、ケースの取扱と一時保護の有無の関連を見たところ、「送致」は一時保護が行われている頻度が高く、「通知」は一時保護が行われる頻度が低くなっていた。

**Q40 一時保護の有無とケースの取り扱いのクロス集計表**  
(Q4通告者=市町村の児相部門に限定)

		送致	援助要請	通知	合計
一時保護を行った	頻度	<b>61</b>	46	<u>15</u>	122
	カテゴリ別の%	62.9%	46.5%	27.8%	48.8%
一時保護中である	頻度	4	1	1	6
	カテゴリ別の%	4.1%	1.0%	1.9%	2.4%
一時保護は行っていない	頻度	<u>32</u>	52	<b>38</b>	122
	カテゴリ別の%	33.0%	52.5%	70.4%	48.8%
総数		97	99	54	250

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 一時保護の有無と児童共通ダイヤルのクロス表

児童共通ダイヤル（189）を使用したケースと一時保護の有無の関係においては、189 を使用したケースのほうが「一時保護は行っていない」頻度が高くなっていた。

**Q40 一時保護の有無と児童共通ダイヤル（189）の使用のクロス集計表**

		189使用	189不使用	不明	合計
一時保護を行った	頻度	<u>17</u>	696	13	726
	カテゴリ別の%	17.9%	30.6%	41.9%	30.3%
一時保護中である	頻度	1	39	0	40
	カテゴリ別の%	1.1%	1.7%	0.0%	1.7%
一時保護は行っていない	頻度	<b>77</b>	1539	18	1634
	カテゴリ別の%	81.1%	67.7%	58.1%	68.1%
総数		95	2285	31	2411

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 一時保護の有無と虐待種別のクロス表

虐待種別と一時保護の関連については、「身体的虐待」「ネグレクト」「性的虐待」については「一時保護を行った」報告頻度が高く、一方「心理的虐待」「DV目撃」については低くなっていた。また「ネグレクト」では「現在一時保護中である」とする報告頻度も高く、ネグレクトの一時保護が比較的長期に渡ることが伺えた。

Q40 一時保護の有無と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
一時保護を行った	頻度	<b>329</b>	<b>218</b>	<b>40</b>	<b>31</b>	<b>129</b>	796
	カテゴリ別の%	46.3%	39.6%	58.0%	64.6%	22.1%	31.1%
一時保護中である	頻度	14	<b>22</b>	1	2	<b>1</b>	43
	カテゴリ別の%	2.0%	4.0%	1.4%	4.2%	0.2%	1.7%
一時保護は行っていない	頻度	<b>367</b>	<b>310</b>	<b>28</b>	<b>15</b>	<b>455</b>	1721
	カテゴリ別の%	51.7%	56.4%	40.6%	31.3%	77.8%	67.2%
	総数	710	550	69	48	585	2560

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 一時保護の有無と虐待重症度のクロス表

虐待重症度と一時保護の関連については、「虐待の危惧あり」「軽度虐待」については「一時保護を行っていない」頻度が高いのに比して、「中度虐待」「重度虐待」「生命の危機あり」では一時保護を行っている頻度が高くなっていた。

「保護を行った」「保護中である」を合計すると、中度虐待では 50.3%、重度虐待では 75.8%、生命の危機ありでは 72.7%が一時保護を実施していた（※%の評価においては、Q39-3で「助言指導」を行い終結したケースはこの計算に含まれない点に留意する必要がある）。

Q40 一時保護の有無と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
一時保護を行った	頻度	<b>40</b>	<b>265</b>	<b>345</b>	<b>117</b>	<b>16</b>	<b>13</b>	796
	カテゴリ別の%	9.9%	23.3%	47.7%	65.7%	72.7%	17.1%	31.4%
一時保護中である	頻度	<b>2</b>	<b>4</b>	<b>19</b>	<b>18</b>	0	0	43
	カテゴリ別の%	0.5%	0.4%	2.6%	10.1%	0.0%	0.0%	1.7%
一時保護は行っていない	頻度	<b>363</b>	<b>866</b>	<b>359</b>	<b>43</b>	<b>6</b>	<b>63</b>	1700
	カテゴリ別の%	89.6%	76.3%	49.7%	24.2%	27.3%	82.9%	67.0%
	総数	405	1135	723	178	22	76	2539

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q40-1. どこで一時保護を行ったか

(Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定)

➤ 設問：「どこで一時保護を行いましたか」

- 「所内」64.8%、「委託」31.6%であり、「所内」での保護が大半を占めた。

Q40-1 どこで一時保護を行ったか  
(Q40「保護した」「保護中」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
所内	545	64.8	
委託	266	31.6	
無回答	30	3.6	
合計	841	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「所内」71.1%、「委託」28.1%であり、今回の調査結果とほぼ同様であった。

### 一時保護の場所と虐待種別のクロス表

「身体的虐待」と「ネグレクト（同居人虐待放置）は所内、「ネグレクト」は委託の報告頻度が高かった。

Q40-1 一時保護の場所と虐待種別のクロス集計表 (Q40「保護した/保護中」回答ケース限定)

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計	
		頻度	<b>241</b>	<b>130</b>	<b>35</b>	26		84
所内	カテゴリ別の%	71.9%	55.8%	85.4%	86.7%	69.4%	58.0%	67.3%
委託	頻度	<b>94</b>	<b>103</b>	<b>6</b>	<b>4</b>	37	21	265
	カテゴリ別の%	28.1%	44.2%	14.6%	13.3%	30.6%	42.0%	32.7%
	総数	335	233	41	30	121	50	810

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 一時保護の場所と虐待重症度のクロス表

「中度虐待」で所内、「生命の危機あり」で委託の報告頻度が高くなっていった。

Q40-1 一時保護の場所と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危機あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
		頻度	23	175	<b>256</b>	79	<b>2</b>	
所内	カテゴリ別の%	62.2%	68.4%	71.9%	60.3%	12.5%	61.5%	67.1%
委託	頻度	14	81	<b>100</b>	52	<b>14</b>	5	266
	カテゴリ別の%	37.8%	31.6%	28.1%	39.7%	87.5%	38.5%	32.9%
	総数	37	256	356	131	16	13	809

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q40-1 追加. 一時保護所を変更した事例における最後の一時保護場所

(Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定)

- 設問：「一時保護所を変更した事例についてお答えください。最後の一時保護所（又は現在の一時保護場所）はどちらですか」
- 「委託」が 22.2%、「所内」19.1%で大きな差はみられなかった。

**Q40-1追加 一時保護書を変更した事例における、最後の一時保護場所**  
(Q40「保護した」「保護中」回答ケース限定)

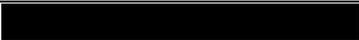
	度数	%	%グラフ
所内	161	19.1	
委託	187	22.2	
無回答	493	58.6	
合計	841	100	

※本設問は質問紙上では Q40-2 と表記され「Q40-2 保護期間」と問題番号が被っていた。意味を考慮し結果においては「Q40-1 追加」として命名、区別して整理した。

## Q40-2. 保護期間 (Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定：日数回答)

- 設問注：「調査時点での保護期間（日）を回答してください」
- 一時保護期間の平均値は 47.8 日（標準偏差 36.0）、最小値 0、最大値 790 であった。30 日換算でまとめたヒストグラムを以下に示す。30 日未満でほぼ半数、60 日未満で 7 割を占める結果となった。

Q40-2 一時保護期間カテゴリ (Q40「保護した」「保護中」回答ケース限定)

	度数	%	% グラフ
30日未満	357	42.4	
30-60日	197	23.4	
60-90日	97	11.5	
90-120日	55	6.5	
120日以上	55	6.5	
無回答	80	9.5	
合計	841	100	

### 虐待種別による保護期間の差

保護期間（日数）の虐待種別による違いを検討した結果、「性的虐待」は「ネグレクト」「DV 目撃」「心理的虐待」よりも平均保護日数が長くなっていることが示された。

Q40-2 虐待種別による保護期間（日数）の差

	平均日数	グループ	SD	度数
身体的虐待	49.2	AB	61.7	323
ネグレクト	52.3	AB	49.6	209
ネグレクト（同居人虐待放置）	36.9	A	36.1	39
性的虐待	67.7	B	48.5	25
心理的虐待	39.3	A	38.4	118
心理的虐待（DV目撃）	35.1	A	35.7	46

\*一元配置分散分析および多重比較にはTukeyのb法を用いた。異なるアルファベットのグループ間には $p < .05$ で有意な差が認められることを示す。

### 虐待重症度別による保護期間の差

保護期間（日数）の虐待重症度による違いを検討した結果、重症なほど保護日数が伸びるように見えるものの、各グループ内での日数のばらつきの大きさもあり統計的に意味のある差としては見出されなかった。

Q40-2 虐待重症度による保護期間（日数）の差

	平均日数	グループ	SD	度数
虐待の危惧あり	35.9	A	37.2	36
軽度虐待	32.7	A	33.6	247
中度虐待	52.7	A	62.0	325
重度虐待	67.2	A	54.3	124
生命の危機あり	44.1	A	36.1	14
不明	51.4	A	56.1	13

\*一元配置分散分析および多重比較にはTukeyのb法を用いた。異なるアルファベットのグループ間には $p < .05$ で有意な差が認められることを示す。

### Q40-3. 身柄を確保した場所（Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定）

- 「警察からの身柄付き」が 28.8%と最も多く、次いで「学校」23.7%、「児童相談所」14.7%であった。

**Q40-3 子どもの身柄を確保した場所**  
(Q40「保護した」「保護中」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
児童相談所	124	14.7	
自宅	86	10.2	
学校	199	23.7	
保育所・幼稚園	58	6.9	
病院	43	5.1	
警察からの身柄付き	242	28.8	
その他	57	6.8	
無回答	32	3.8	
合計	841	100	

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「児童相談所」が 27.3%ともっとも多く、次いで 18.4%、「警察」18.4%であった。今回の調査では「警察からの身柄付き」の割合が高く、DV 法により警察が介入するケースが増えたことが影響していると思われる。

#### 子どもの身柄を確保した場所と虐待種別のクロス表

身体的虐待は「学校」「保育所・幼稚園」が、ネグレクトは「自宅」が、同居人の虐待放置と性的虐待は「学校」が、心理的虐待は「児童相談所」が、それぞれ高い報告頻度を示した。

Q40-3 子供の身柄を確保した場所と虐待種別のクロス集計表

	身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計	
児童相談所	頻度	47	32	4	5	<b>28</b>	8	124
	カテゴリ別の%	14.2%	14.1%	9.8%	15.2%	22.4%	16.0%	15.4%
自宅	頻度	25	<b>37</b>	3	1	12	8	86
	カテゴリ別の%	7.6%	16.3%	7.3%	3.0%	9.6%	16.0%	10.7%
学校	頻度	<b>102</b>	<b>30</b>	<b>18</b>	<b>21</b>	25	<b>3</b>	199
	カテゴリ別の%	30.8%	13.2%	43.9%	63.6%	20.0%	6.0%	24.7%
保育所・幼稚園	頻度	<b>32</b>	16	2	0	8	<u>0</u>	58
	カテゴリ別の%	9.7%	7.0%	4.9%	0.0%	6.4%	0.0%	7.2%
病院	頻度	19	18	1	2	<u>1</u>	2	43
	カテゴリ別の%	5.7%	7.9%	2.4%	6.1%	0.8%	4.0%	5.3%
警察からの身柄付き	頻度	90	71	12	<u>2</u>	41	<b>24</b>	240
	カテゴリ別の%	27.2%	31.3%	29.3%	6.1%	32.8%	48.0%	29.7%
その他	頻度	<u>16</u>	<b>23</b>	1	2	10	5	57
	カテゴリ別の%	4.8%	10.1%	2.4%	6.1%	8.0%	10.0%	7.1%
総数		331	227	41	33	125	50	807

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 子どもの身柄を確保した場所と虐待重症度のクロス表

自宅は「虐待の危惧あり」の報告頻度が高い。学校は「中度・重度虐待」のような重症例の頻度が多い。病院は「重度虐待・生命の危機」の頻度が高く、特に生命の危機があり一時保護されたケースの81.3%が病院で身柄を確保されている。警察からの身柄つきには、「軽度虐待」のケースが多く報告された。

Q40-3 子供の身柄を確保した場所と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
児童相談所	頻度	5	48	53	16	1	1	124
	カテゴリ別の%	12.8%	18.4%	15.0%	12.8%	6.3%	7.7%	15.4%
自宅	頻度	<b>9</b>	29	38	7	0	3	86
	カテゴリ別の%	23.1%	11.1%	10.8%	5.6%	0.0%	23.1%	10.7%
学校	頻度	7	<b>38</b>	<b>102</b>	<b>47</b>	0	4	198
	カテゴリ別の%	17.9%	14.6%	28.9%	37.6%	0.0%	30.8%	24.5%
保育所・幼稚園	頻度	2	19	25	12	0	0	58
	カテゴリ別の%	5.1%	7.3%	7.1%	9.6%	0.0%	0.0%	7.2%
病院	頻度	1	4	<b>11</b>	<b>14</b>	<b>13</b>	0	43
	カテゴリ別の%	2.6%	1.5%	3.1%	11.2%	81.3%	0.0%	5.3%
警察からの身柄付き	頻度	12	<b>108</b>	95	20	1	5	241
	カテゴリ別の%	30.8%	41.4%	26.9%	16.0%	6.3%	38.5%	29.9%
その他	頻度	3	15	29	9	1	0	57
	カテゴリ別の%	7.7%	5.7%	8.2%	7.2%	6.3%	0.0%	7.1%
	総数	42	272	382	136	18	15	865

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### Q40-4. 保護者の同意の有無（Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定）

- 「最初から同意」が66.1%、「その後同意」15.9%と同意が得られたケースが大半を占めた。

Q40-4 保護者の一時保護への同意の有無  
（Q40「保護した」「保護中」回答ケース限定）

	度数	%	%グラフ
最初から同意	556	66.1	
最初から不同意	89	10.6	
最初は同意でその後不同意	15	1.8	
最初は不同意でその後同意	134	15.9	
同意・不同意の意向が変わる	6	0.7	
不明	20	2.4	
無回答	21	2.5	
合計	841	100	

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「最初から同意」58.5%、「途中から同意」17.0%が大半を占め、今回と同様の結果であった。

### 保護者の同意の有無と虐待種別のクロス表

検定の結果明確な関連は認められなかった ( $p=.059$ ) 点に注意が必要だが、ネグレクトが「最初が同意でも後に不同意」、性的虐待が「最初は不同意で後に同意」の報告頻度が相対的に多かったことが特徴的だった。

Q40-4 保護者の同意の有無と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計
最初から同意	頻度	229	152	32	<u>15</u>	87	39	554
	カテゴリ別の%	67.8%	66.1%	78.0%	45.5%	69.6%	76.5%	67.7%
最初から不同意	頻度	33	25	2	7	15	7	89
	カテゴリ別の%	9.8%	10.9%	4.9%	21.2%	12.0%	13.7%	10.9%
最初は同意でもその後不同意	頻度	3	<u>9</u>	1	0	2	0	15
	カテゴリ別の%	0.9%	3.9%	2.4%	0.0%	1.6%	0.0%	1.8%
最初は不同意でその後同意	頻度	59	37	5	<u>11</u>	19	<u>3</u>	134
	カテゴリ別の%	17.5%	16.1%	12.2%	33.3%	15.2%	5.9%	16.4%
同意・不同意の意向が変わる	頻度	2	1	0	0	2	1	6
	カテゴリ別の%	0.6%	0.4%	0.0%	0.0%	1.6%	2.0%	0.7%
不明	頻度	12	6	1	0	<u>0</u>	1	20
	カテゴリ別の%	3.6%	2.6%	2.4%	0.0%	0.0%	2.0%	2.4%
	総数	338	230	41	33	125	51	818

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 保護者の同意の有無と虐待重症度のクロス表

軽度虐待では「最初から同意」が、生命の危機ありでは「最初は不同意でその後同意」の報告頻度が高くなっていた。

Q40-4 保護者の同意の有無と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危機あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
最初から同意	頻度	29	<u>204</u>	230	81	<u>5</u>	5	554
	カテゴリ別の%	74.4%	77.3%	64.8%	61.4%	31.3%	41.7%	67.7%
最初から不同意	頻度	5	<u>18</u>	38	<u>21</u>	3	<u>4</u>	89
	カテゴリ別の%	12.8%	6.8%	10.7%	15.9%	18.8%	33.3%	10.9%
最初は同意でもその後不同意	頻度	0	3	8	4	0	0	15
	カテゴリ別の%	0.0%	1.1%	2.3%	3.0%	0.0%	0.0%	1.8%
最初は不同意でその後同意	頻度	4	<u>33</u>	68	23	<u>6</u>	0	134
	カテゴリ別の%	10.3%	12.5%	19.2%	17.4%	37.5%	0.0%	16.4%
同意・不同意の意向が変わる	頻度	0	1	2	<u>3</u>	0	0	6
	カテゴリ別の%	0.0%	0.4%	0.6%	2.3%	0.0%	0.0%	0.7%
不明	頻度	1	5	9	<u>0</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	20
	カテゴリ別の%	2.6%	1.9%	2.5%	0.0%	12.5%	25.0%	2.4%
	総数	39	264	355	132	16	12	818

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q40-5. 一時保護を行った理由

(Q40「一時保護した」「一時保護中」回答 841 ケース限定：複数回答)

- 「子どもの安全確保」が86.1%と最も高く、次いで「調査を必要としたため」が45.4%と続いた。

	度数	%	%グラフ
子どもの安全確保のため	724	86.1	
調査を必要としたため	382	45.4	
行動観察のため	129	15.3	
短期入所指導のため	6	0.7	
その他	44	5.2	
該当ケース数	841		

\*複数回答であるため度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「子供の安全のため」が 8 割を超え、「調査を必要としたため」も 3 割を超えていた。

### 保護理由と虐待種別のクロス表

全体の 86.1%を占める「子どもの安全確保のため」は虐待種別による偏りは見られなかった。性的虐待が、「調査を必要としたため」を保護理由として上げる頻度が相対的に高かった。

Q40-5 保護理由と主たる虐待種別のクロス集計表（複数回答）

		身体的虐待	ネグレクト		性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計
			ネグレクト	(同居人の虐待放置)				
子どもの安全確保のため	頻度	288	210	38	32	115	<u>39</u>	722
	カテゴリ別の%	84.0%	87.5%	92.7%	97.0%	88.5%	75.0%	86.1%
調査を必要としたため	頻度	166	116	14	<u>22</u>	<u>39</u>	24	381
	カテゴリ別の%	48.4%	48.3%	34.1%	66.7%	30.0%	46.2%	45.4%
行動観察のため	頻度	60	44	3	3	<u>10</u>	9	129
	カテゴリ別の%	17.5%	18.3%	7.3%	9.1%	7.7%	17.3%	15.4%
短期入所指導のため	頻度	4	2	0	0	0	0	6
	カテゴリ別の%	1.2%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%
その他	頻度	16	15	2	1	7	3	44
	カテゴリ別の%	4.7%	6.3%	4.9%	3.0%	5.4%	5.8%	5.2%
総数		343	240	41	33	130	52	839

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

**保護理由と虐待重症度のクロス表**

同様に全数の 8 割以上を占める「子どもの安全確保のため」に重症度による偏りは見られなかった。重度虐待のケースで、「調査を必要としたため」を保護理由として上げる頻度が高かった。

**Q40-5 保護理由と主たる虐待重症度のクロス集計表**

		虐待の 危惧あり				生命の 危機あり	不明	合計
		軽度虐待	中度虐待	重度虐待				
子どもの安全確保のため	頻度	34	220	319	124	13	12	722
	カテゴリ別の%	81.0%	81.8%	87.6%	91.9%	81.3%	92.3%	86.1%
調査を必要としたため	頻度	<u>11</u>	111	172	<u>73</u>	7	8	382
	カテゴリ別の%	26.2%	41.3%	47.3%	54.1%	43.8%	61.5%	45.5%
行動観察のため	頻度	7	45	59	18	0	0	129
	カテゴリ別の%	16.7%	16.7%	16.2%	13.3%	0.0%	0.0%	15.4%
短期入所指導のため	頻度	0	3	3	0	0	0	6
	カテゴリ別の%	0.0%	1.1%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%
その他	頻度	5	21	10	7	1	0	44
	カテゴリ別の%	11.9%	7.8%	2.7%	5.2%	6.3%	0.0%	5.2%
	総数	42	269	364	135	16	13	839

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。**イタリック**は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

**Q40-6. 一時保護終了時の解除理由 (Q40「一時保護した」回答 798 ケース限定)**

- 「保護者への引き取り」が 62.3%と最も高く、次いで「施設入所」21.7%となっていた。

**Q40-6 一時保護解除の理由 (Q40「保護した」回答ケース限定)**

	度数	%	%グラフ
保護者への引き取り	497	62.3	
保護者以外の親族への引き取り	39	4.9	
里親等委託	26	3.3	
施設入所	173	21.7	
他の児童相談所へ	14	1.8	
家裁送致	1	0.1	
その他	23	2.9	
無回答	25	3.1	
合計	798	100	

**\*平成 25 年度調査との比較**

平成 25 年度調査では、「保護者へ引き取り」は 56.0%であり、今回の調査のほうが高くなっている一方で、「施設入所」は 33.6%と今回のほうがその割合は低くなっている。

### 一時保護解除の理由と虐待種別のクロス表

検定の結果明確な関連は認められなかった ( $p=.069$ ) 点に注意が必要だが、ネグレクトは「施設入所」「里親等委託」が、同居人虐待放置は「保護者への引き取り」が保護解除理由として報告頻度が高かった。

Q40-6 一時保護解除の理由と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト		心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計	
			ネグレクト	(同居人の虐待放置)				
保護者への引き取り	頻度	212	114	<b>32</b>	20	81	37	496
	カテゴリ別の%	65.4%	55.3%	80.0%	64.5%	66.4%	77.1%	64.3%
保護者以外の親族への引き取り	頻度	12	10	2	2	10	3	39
	カテゴリ別の%	3.7%	4.9%	5.0%	6.5%	8.2%	6.3%	5.1%
里親等委託	頻度	7	<b>13</b>	1	2	3	0	26
	カテゴリ別の%	2.2%	6.3%	2.5%	6.5%	2.5%	0.0%	3.4%
施設入所	頻度	76	<b>59</b>	4	6	22	5	172
	カテゴリ別の%	23.5%	28.6%	10.0%	19.4%	18.0%	10.4%	22.3%
他の児童相談所へ	頻度	6	3	0	1	1	3	14
	カテゴリ別の%	1.9%	1.5%	0.0%	3.2%	0.8%	6.3%	1.8%
家裁送致	頻度	0	1	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
その他	頻度	11	6	1	0	5	0	23
	カテゴリ別の%	3.4%	2.9%	2.5%	0.0%	4.1%	0.0%	3.0%
総数		324	206	40	31	122	48	771

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 一時保護解除の理由と虐待種別のクロス表

回答数が少ない項目が多く明確なことは言えないが、軽度虐待は「保護者への引き取り」、中度虐待は「保護者以外の親族への引き取り」、重度虐待・生命の危機ありは「施設入所」を理由とする報告がそれぞれ多かった。

Q40-6 一時保護解除の理由と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の重症度				生命の危機あり	不明	合計
		虐待の 危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待			
保護者への引き取り	頻度	29	<b>204</b>	202	52	<u>4</u>	<u>4</u>	495
	カテゴリ別の%	76.3%	79.1%	60.3%	46.8%	25.0%	30.8%	64.2%
保護者以外の親族への引き取り	頻度	0	8	<b>23</b>	6	2	0	39
	カテゴリ別の%	0.0%	3.1%	6.9%	5.4%	12.5%	0.0%	5.1%
里親等委託	頻度	0	5	14	5	1	1	26
	カテゴリ別の%	0.0%	1.9%	4.2%	4.5%	6.3%	7.7%	3.4%
施設入所	頻度	7	<u>31</u>	81	<b>42</b>	<b>8</b>	4	173
	カテゴリ別の%	18.4%	12.0%	24.2%	37.8%	50.0%	30.8%	22.4%
他の児童相談所へ	頻度	1	5	1	3	0	4	14
	カテゴリ別の%	2.6%	1.9%	0.3%	2.7%	0.0%	30.8%	1.8%
家裁送致	頻度	0	0	1	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
その他	頻度	1	5	13	3	1	0	23
	カテゴリ別の%	2.6%	1.9%	3.9%	2.7%	6.3%	0.0%	3.0%
総数		38	258	335	111	16	13	771

\***太字**とイタリックお表記の解釈は他の表に準ずるが、本解析は期待度数5未満のセルが20%を越えており参考程度に見る必要がある。

## Q41. 一時保護を行わなかった理由

(Q40「一時保護を行わなかった」回答 1726 ケース限定)

- 「虐待はあったが、一時保護が必要なほど重篤でない」が 49.7%と最も高い割合を示した。また「虐待あったが、問題が解消した」ため一時保護を行わなかった事例は 7.1%、「虐待があったが、保護者が認め、支援や安全確認を行っていく合意がとれた」事例は 9.2%であり、計 66.0%は大きな問題はないといえる。
- 一方残りには、「子どもが一時保護に同意しなかった (1.2%)」や「接触がとれない (0.7%)」場合など深刻な事例が含まれており、こうした困難事例をどうするかは課題となる。「調査中である (4.3%)」は問題というわけではないが、調査中に虐待の継続やトラブルが生じる可能性も踏まえ、事態が明確でない過程における危機管理について議論を深めていく必要もあろう。
- また、「支援や安全確認を行っていく合意がとれた (9.2%)」は、基本的には良い経過を望めるケースであるが、リスクが変動していく可能性のあるケースとも言える。だれがどのように継続的な関わりをしていくかを明確にして、必要があれば保護も検討することやそうした枠組みの中での虐待者のやりとりを含むケースワークに高度なスキルが必要となるだろう。

Q41 一時保護を行わなかった理由 (Q40「一時保護行わなかった」回答ケース限定)

	度数	%	%グラフ
虐待あったが、一時保護が必要なほど重篤ではない	858	49.7	
虐待あったが、問題が解消した	122	7.1	
虐待あったが、保護者が認め、支援や安全確認を行っていく合意が取れた	158	9.2	
子どもが一時保護に同意しなかった	20	1.2	
調査中である	75	4.3	
接触が取れない、あるいは行方不明	12	0.7	
その他	104	6.0	
無回答	377	21.8	
合計	1726	100	

### 一時保護を行わなかった理由と虐待種別のクロス表

回答数が少ない項目が多く明確なことは言えないが、心理的虐待・DV 目撃は「重篤ではない」、身体的虐待・ネグレクトは「支援の合意が取れた」、同居人虐待放置・性的虐待は「調査中」が一時保護を行わない理由としてそれぞれ報告頻度が高かった。

Q41 一時保護を行わなかった理由と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV 目撃)	合計	
虐待はあったが重篤でない	頻度	<u>164</u>	<u>147</u>	<u>8</u>	<u>0</u>	<u>247</u>	<u>292</u>	858
	カテゴリ別の%	58.2%	57.9%	40.0%	0.0%	72.2%	67.1%	63.7%
虐待はあったが問題が解消した	頻度	23	<u>17</u>	2	<u>5</u>	29	46	122
	カテゴリ別の%	8.2%	6.7%	10.0%	38.5%	8.5%	10.6%	9.1%
虐待はあったが支援の合意が取れた	頻度	<u>42</u>	<u>46</u>	2	0	<u>25</u>	<u>43</u>	158
	カテゴリ別の%	14.9%	18.1%	10.0%	0.0%	7.3%	9.9%	11.7%
子供が一時保護に同意しなかった	頻度	4	6	<u>3</u>	0	4	<u>2</u>	19
	カテゴリ別の%	1.4%	2.4%	15.0%	0.0%	1.2%	0.5%	1.4%
調査中である	頻度	18	12	<u>4</u>	<u>5</u>	18	18	75
	カテゴリ別の%	6.4%	4.7%	20.0%	38.5%	5.3%	4.1%	5.6%
接触が取れない	頻度	2	0	0	0	3	7	12
	カテゴリ別の%	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%	1.6%	0.9%
あるいは行方不明	頻度	29	26	1	<u>3</u>	<u>16</u>	27	102
	カテゴリ別の%	10.3%	10.2%	5.0%	23.1%	4.7%	6.2%	7.6%
	総数	282	254	20	13	342	435	1346

\*太字とイタリックお表記の解釈は他の表に準ずるが、本解析は期待度数5未満のセルが20%を越えており参考程度に見る必要がある。

### 一時保護を行わなかった理由と虐待重症度のクロス表

回答数が少ない項目が多く明確なことは言えないが、虐待の危惧あり・軽度虐待では「重篤ではない」、中度虐待・重度虐待では「支援の合意が取れた」が一時保護を行わない理由としてそれぞれ報告頻度が高かった。

Q41 一時保護を行わなかった理由と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の危惧あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の危機あり	不明	合計
虐待はあったが重篤でない	頻度	<u>207</u>	<u>453</u>	<u>178</u>	<u>3</u>	<u>0</u>	<u>11</u>	852
	カテゴリ別の%	73.9%	68.7%	58.2%	7.9%	0.0%	22.9%	63.7%
虐待はあったが問題が解消した	頻度	25	56	29	7	0	5	122
	カテゴリ別の%	8.9%	8.5%	9.5%	18.4%	0.0%	10.4%	9.1%
虐待はあったが支援の合意が取れた	頻度	<u>10</u>	83	<u>46</u>	<u>11</u>	2	<u>0</u>	152
	カテゴリ別の%	3.6%	12.6%	15.0%	28.9%	33.3%	0.0%	11.4%
子供が一時保護に同意しなかった	頻度	<u>0</u>	9	<u>9</u>	2	0	0	20
	カテゴリ別の%	0.0%	1.4%	2.9%	5.3%	0.0%	0.0%	1.5%
調査中である	頻度	14	<u>28</u>	15	1	1	<u>16</u>	75
	カテゴリ別の%	5.0%	4.2%	4.9%	2.6%	16.7%	33.3%	5.6%
接触が取れない	頻度	2	4	5	0	0	<u>1</u>	12
	カテゴリ別の%	0.7%	0.6%	1.6%	0.0%	0.0%	2.1%	0.9%
あるいは行方不明	頻度	22	<u>26</u>	24	<u>14</u>	<u>3</u>	<u>15</u>	104
	カテゴリ別の%	7.9%	3.9%	7.8%	36.8%	50.0%	31.3%	7.8%
	総数	280	659	306	38	6	48	1337

\*太字とイタリックお表記の解釈は他の表に準ずるが、本解析は期待度数5未満のセルが20%を越えており参考程度に見る必要がある。

## Q42. 家族の援助プラン

- 「(プランを) 作成している」が 13.1%、「作成していない」が 28.3%となった。
- 家族にどのように対応するのかについて担当者なりの考えのもと援助が行われていると思われるが、援助プランとして明確化し、組織的にその効果の検証を行っていく上では、より多くの事例について計画が作成されることが望ましいといえる。

Q42 家族の援助プラン

	度数	%	%グラフ
作成している	825	13.1	
作成していない	1784	28.3	
無回答	3691	58.6	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「作成している」が 11.5%であり、今回の調査の方が割合が高くなっていました。

### 家族の援助プランと虐待種別のクロス表

身体的虐待・ネグレクト・同居人虐待放置については家族の援助プランを「作成している」、DV 目撃については「作成していない」報告がそれぞれ多かった。

Q42 家族の援助プランと虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計	
		作成している	頻度 <b>278</b> カテゴリ別の% 38.5%	<b>243</b> 42.0%	<b>31</b> 46.3%	19 39.6%		180 30.5%
作成していない	頻度 <b>444</b> カテゴリ別の% 61.5%	<b>335</b> 58.0%	<b>36</b> 53.7%	29 60.4%	410 69.5%	<b>524</b> 87.6%	1778 68.3%	
	総数	722	578	67	48	590	598	2603

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 家族の援助プランと虐待についての考え方のクロス表

「行為認めるが虐待認めない」「虐待認めて援助求める」の場合は家族の援助プランを「作成している」、「虐待認めるが援助求めない」場合は「作成していない」報告がそれぞれ多かった。

Q42 家族の援助プランと虐待についての考え方のクロス集計表

		行為も虐待も認めない	行為は認めるが虐待は認めない	虐待を認めるが援助求めない	虐待を認めるが援助求める	不明	合計
		作成している	頻度 87 カテゴリ別の% 33.6%	<b>165</b> 38.1%	<b>189</b> 26.5%	<b>307</b> 50.0%	
作成していない	頻度 172 カテゴリ別の% 66.4%	<b>268</b> 61.9%	<b>523</b> 73.5%	<b>307</b> 50.0%	<b>490</b> 88.0%	1760 68.3%	
	総数	259	433	712	614	557	2575

\***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q43. 児相の援助に対する虐待者の態度

- 「働きかけに応じる」が25.1%（無回答を除くと60.2%）となり、「当初応じなかったものの現在応じる」2.7%（無回答を除くと6.5%）と合わせた場合、27.8%（無回答を除くと66.7%）が応じる態度を示していた。また「働きかけに応じない」ケースが3.8%であることも注目される。こうした態度の虐待者に対して、そのまましておけば子どもに虐待的な行動を変えない可能性が高い。

Q43 児相の援助に対する虐待者の態度

	度数	%	%グラフ
働きかけに応じる	1579	25.1	
当初は働きかけに応じなかったが現在は応じる	171	2.7	
当初は働きかけに応じていたが現在は応じない	138	2.2	
働きかけに応じない	237	3.8	
その他	497	7.9	
無回答	3678	58.4	
合計	6300	100	

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「働きかけに応じる」51.4%、「当初応じなかったものの現在応じる」6%であり、今回の調査の方が働きかけに応じる態度が見られるようになっている。

### 児相の援助に対する態度と虐待種別のクロス表

心理的虐待は「働きかけに応じる」、身体的虐待は「当初は応じていたが現在は応じない」、ネグレクトは「当初は応じなかったが現在は応じる」「働きかけに応じない」の報告頻度が高くなっていた。

Q43 児相の援助に対する態度と虐待種別のクロス集計表

	身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の 虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
働きかけに応じる	頻度 459	350	48	30	<b>373</b>	<u>317</u>	1577
	カテゴリ別の% 62.4%	60.2%	69.6%	61.2%	64.2%	52.7%	60.3%
当初は働きかけに応じなかったが現在は応じる	頻度 57	<b>53</b>	2	2	37	<u>20</u>	171
	カテゴリ別の% 7.8%	9.1%	2.9%	4.1%	6.4%	3.3%	6.5%
当初は働きかけに応じていたが現在は応じない	頻度 <b>49</b>	31	1	1	26	28	136
	カテゴリ別の% 6.7%	5.3%	1.4%	2.0%	4.5%	4.7%	5.2%
働きかけに応じない	頻度 54	<b>79</b>	5	<u>0</u>	44	54	236
	カテゴリ別の% 7.3%	13.6%	7.2%	0.0%	7.6%	9.0%	9.0%
その他	頻度 <u>116</u>	<u>68</u>	13	<b>16</b>	101	<b>182</b>	496
	カテゴリ別の% 15.8%	11.7%	18.8%	32.7%	17.4%	30.3%	19.0%
総数	735	581	69	49	581	601	2616

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

児相の援助に対する態度と虐待についての考え方のクロス表
-----------------------------

「虐待認めるが援助求めない」「虐待認め援助求める」態度を示した虐待者は「働きかけに応じる」報告が多く、一方「行為も虐待も認めない」「行為認めるが虐待認めない」態度を示した虐待者は「働きかけに応じない」「当初は応じていたが現在は応じない」「当初は応じていなかったが現在は応じる」の報告頻度が高くなっていた。

Q43 児相の援助に対する態度と虐待についての考え方のクロス集計表

		行為も虐待も認めない	行為は認めるが虐待は認めない	虐待を認めるが援助求めない	虐待を認めるが援助求める	不明	合計
働きかけに応じる	頻度	<u>133</u>	<u>222</u>	<b>501</b>	<b>553</b>	<u>151</u>	1560
	カテゴリ別の%	50.6%	50.7%	70.5%	88.8%	27.3%	60.3%
当初は働きかけに応じなかったが現在は応じる	頻度	<b>32</b>	<b>48</b>	54	<u>25</u>	<u>11</u>	170
	カテゴリ別の%	12.2%	11.0%	7.6%	4.0%	2.0%	6.6%
当初は働きかけに 応じていたが現在は 応じない	頻度	<u>22</u>	<b>46</b>	37	24	<u>9</u>	138
	カテゴリ別の%	8.4%	10.5%	5.2%	3.9%	1.6%	5.3%
働きかけに応じない	頻度	<b>38</b>	<b>61</b>	57	<u>8</u>	<b>66</b>	230
	カテゴリ別の%	14.4%	13.9%	8.0%	1.3%	11.9%	8.9%
その他	頻度	<u>38</u>	<u>61</u>	<u>62</u>	<u>13</u>	<b>316</b>	490
	カテゴリ別の%	14.4%	13.9%	8.7%	2.1%	57.1%	18.9%
	総数	263	438	711	623	553	2588

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

## Q44. 援助の状況（複数回答）

- 「保護者に対して援助」22.1%、「子どもに対して援助」10.9%、「保護者と子供に同席での援助」6.2%で援助を実施していた。

Q44 援助の状況について（複数回答）

	度数	%	%グラフ
保護者に対して援助を行っている	1393	22.1	
子どもに対して援助を行っている	686	10.9	
保護者と子どもに対して同席での援助を行っている	390	6.2	
援助は行っていない	883	14.0	
該当ケース数	6300		

\*複数回答であること、また各設問の無回答数から度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「保護者に対して援助」24.2%、「子どもに対して援助」22.6%、「保護者と子供に同席での援助」25.3%であり、今回の調査はいずれもその割合を下げているものの、Q39-3で「助言指導」を選び一時保護を行わなかったケースが本設問への回答より外れた影響も大きいと思われる。

### 援助の状況（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

「子どもに対して援助を行う」頻度は6~11歳、12~14歳、15歳以上で高くなり、それ以下で低くなっていた。それ以外は年齢別に明確な傾向は認められなかった。

Q44 援助と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

		1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計
保護者に対して 援助を行っている	頻度	90	464	503	241	<u>88</u>	1386
	カテゴリ別の%	57.3%	54.0%	56.5%	58.9%	47.1%	55.4%
	総数	157	859	890	409	187	2502
子どもに対して 援助を行っている	頻度	<u>23</u>	<u>136</u>	<b>252</b>	<b>194</b>	<b>79</b>	684
	カテゴリ別の%	18.5%	18.8%	31.8%	47.7%	42.9%	30.6%
	総数	124	725	793	407	184	2233
保護者と子どもに対して 同席での援助を行っている	頻度	26	113	142	75	31	387
	カテゴリ別の%	22.0%	16.8%	20.8%	23.7%	20.1%	19.9%
	総数	118	674	683	316	154	1945
援助は行ってはいない	頻度	46	314	300	132	83	875
	カテゴリ別の%	40.0%	43.6%	43.1%	44.3%	48.5%	43.8%
	総数	115	720	696	298	171	2000

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 援助の状況（複数回答）と虐待種別のクロス表

身体的虐待・ネグレクト・性的虐待は「保護者への援助」「子どもへの援助」「保護者と子ども同席での援助」の報告頻度が多かった。同居人虐待放置については「子どもへの援助」の報告頻度が相対的に高く、DV目撃は「援助は行ってない」頻度が高くなっていった。

Q44 援助と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
保護者に対して 援助を行っている	頻度	<b>406</b>	<b>327</b>	37	<b>33</b>	338	<u>249</u>	1390
	カテゴリ別の%	63.1%	63.1%	62.7%	76.7%	54.4%	40.0%	55.5%
	総数	643	518	59	43	621	622	2506
子どもに対して 援助を行っている	頻度	<b>271</b>	<b>172</b>	<b>28</b>	<b>31</b>	<u>124</u>	<u>59</u>	685
	カテゴリ別の%	46.6%	39.2%	53.8%	75.6%	22.7%	10.2%	30.6%
	総数	581	439	52	41	547	576	2236
保護者と子どもに対して 同席での援助を行っている	頻度	<b>137</b>	<b>101</b>	8	<b>13</b>	<u>68</u>	<u>62</u>	389
	カテゴリ別の%	29.4%	27.4%	23.5%	52.0%	13.8%	11.0%	19.9%
	総数	466	369	34	25	494	562	1950
援助は行ってはいない	頻度	214	156	16	7	<u>193</u>	<b>300</b>	886
	カテゴリ別の%	46.2%	42.0%	47.1%	38.9%	37.5%	48.2%	43.8%
	総数	463	371	34	18	514	623	2023

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 援助の状況（複数回答）と虐待重症度のクロス表

援助の対象問わず、行われる頻度が相対的に高くなっているのは中度虐待以上であった。中度・重度虐待は全ての援助パターンの頻度が高かったが、生命の危機ありの場合のみ「同席での援助」が行われない傾向が見られた。

Q44 援助と虐待重症度のクロス集計表

		虐待の 危機あり	軽度虐待	中度虐待	重度虐待	生命の 危機あり	不明	合計
保護者に対して 援助を行っている	頻度	<u>171</u>	<u>573</u>	<b>477</b>	<b>124</b>	<b>18</b>	<u>22</u>	1385
	カテゴリ別の%	39.5%	50.5%	71.1%	84.4%	85.7%	28.6%	55.8%
	総数	433	1134	671	147	21	77	2483
子どもに対して 援助を行っている	頻度	<u>39</u>	<u>233</u>	<b>293</b>	<b>103</b>	<b>8</b>	<u>10</u>	686
	カテゴリ別の%	10.3%	22.8%	49.4%	75.2%	61.5%	13.9%	31.0%
	総数	380	1021	593	137	13	72	2216
保護者と子どもに対して 同席での援助を行っている	頻度	<u>49</u>	<u>155</u>	<b>146</b>	<b>33</b>	1	<u>4</u>	388
	カテゴリ別の%	12.8%	16.4%	31.8%	49.3%	14.3%	6.1%	20.1%
	総数	382	948	459	67	7	66	1929
援助は行ってはいない	頻度	184	434	174	22	4	<b>56</b>	874
	カテゴリ別の%	45.7%	43.1%	40.4%	38.6%	57.1%	70.9%	44.0%
	総数	403	1008	431	57	7	79	1985

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは統計的に有意に低い頻度を示したものの。

### 援助の状況（複数回答）と虐待に対する考え方のクロス表

「援助を求める」ケースには保護者・子供双方への援助を実施しているのに対して、「援助を求めない」ケースの援助提供率は低めになっており対応の難しさを感じさせる。「行為も虐待も認めない」ケースは実際の援助必要性の高さか、保護者・子供双方への援助の実施頻度が高いものの、援助を行わない選択も多い。

Q44 援助と虐待に対する考え方のクロス集計表

		行為も虐待も認めない	行為は認めるが虐待は認めない	虐待を認めるが援助求めない	虐待を認めるが援助求める	不明	合計
保護者に対して援助を行っている	頻度	<b>137</b>	242	<b>368</b>	<b>425</b>	<b>200</b>	1372
	カテゴリ別の%	64.3%	58.0%	50.7%	75.4%	35.8%	55.4%
	総数	213	417	726	564	558	2478
子どもに対して援助を行っている	頻度	<b>96</b>	<b>146</b>	<b>135</b>	<b>231</b>	<b>67</b>	675
	カテゴリ別の%	49.5%	38.3%	20.8%	49.1%	13.0%	30.6%
	総数	194	381	648	470	515	2208
保護者と子どもに対して同席での援助を行っている	頻度	<b>44</b>	<b>79</b>	<b>89</b>	<b>142</b>	<b>34</b>	388
	カテゴリ別の%	31.9%	25.3%	14.6%	37.9%	6.9%	20.1%
	総数	138	312	610	375	493	1928
援助は行ってはいない	頻度	<b>73</b>	<b>118</b>	263	<b>108</b>	<b>308</b>	870
	カテゴリ別の%	52.1%	38.4%	41.4%	32.0%	54.8%	43.9%
	総数	140	307	636	337	562	1982

\***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものを、イタリックは有意に低い頻度を示したものを。

### Q44-1. 保護者への援助の実施方法（Q44「保護者に援助」回答 1393 ケース限定）

- 「家庭訪問による面接」58.4%、次いで「来所してもらい個別面接」53.3%を実施しているケースが多くみられた。

Q44-1 保護者への援助の実施方法

（Q44「保護者へ援助」回答ケース限定：複数回答）

	度数	%	%グラフ
来所してもらい個別面接	742	53.3	
家庭訪問による面接	814	58.4	
施設に訪問しての面接	76	5.5	
個別心理療法	15	1.1	
グループ療法	5	0.4	
精神科医療	39	2.8	
その他の医療	4	0.3	
その他	107	7.7	
該当ケース数	1393		

\*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「家庭訪問による面接（不定期）」48.3%、「来所してもらい個別面接（不定期）」32.5%が多く、定期的面接と合わせても今回の調査と同様の傾向が見られた。

## Q44-2. 保護者への援助に関わった機関

(Q44「保護者に援助」回答 1393 ケース限定：複数回答)

- 「児童相談所」89.5%であり、「児童相談所以外」での援助も 33.9%あった。

**Q44-2 保護者への援助に関わった機関**  
(Q44「保護者へ援助」回答ケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
児童相談所	1247	89.5	
児童相談所以外	472	33.9	
該当ケース数	1393		

\*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「児童相談所」89.3%、「児童相談所以外」34.0%と同様の傾向が見られた。

## Q44-2-1. 保護者援助における児童相談所での対応者

(Q44「保護者に援助」かつ Q44-2「児童相談所」回答 1247 ケース限定：複数回答)

- 「児童福祉司」87.7%、「児童心理司」30.2%の 2 つが多くを占めた。医師による対応は 3.9%であった。

**Q44-2-1 児相に関わった援助での対応者**  
(Q44-2「児童相談所」回答ケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
児童福祉司	1093	87.7	
児童心理司	377	30.2	
医師	49	3.9	
家族支援のための専任担当者	15	1.2	
その他	57	4.6	
該当ケース数	1247		

\*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「児童福祉司」96.8%、「児童心理司」31.5%であり今回と同様の結果であった。

### Q44-3. 子どもへの援助の実施方法

(Q44「子どもへ援助」回答 942 ケース限定：複数回答)

- 「家庭訪問による面接」41.3%、次いで「来所してもらい個別面接」37.9%、「施設に訪問しての面接」27.1%となっていた。

**Q44-3 子どもへの援助の実施方法**  
(Q44「子どもへ援助」「子どもと保護者同席で援助」回答ケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
来所してもらい個別面接	357	37.9	
家庭訪問による面接	389	41.3	
施設に訪問しての面接	255	27.1	
個別心理療法	54	5.7	
グループ療法	4	0.4	
精神科医療	45	4.8	
その他の医療	11	1.2	
その他	93	9.9	
該当ケース数	942		

\*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「家庭訪問による面接（不定期）」27.7%、「来所してもらい個別面接（不定期）」17.7%であり、定期的な援助と合わせると今回の調査と同様の傾向が見られた。

## Q44-4. 子どもへの援助に関わった機関

(Q44「子どもへ援助」回答 942 ケース限定：複数回答)

- 「児童相談所」88.0%であり、「児童相談所以外」も31.7%あった。

Q44-4 子どもへの援助に関わった機関  
(Q44「子どもへ援助」回答ケース限定：複数回答)

	度数	%	%グラフ
児童相談所	829	88.0	
児童相談所以外	299	31.7	
該当ケース数	942		

\*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「児童相談所」85.8%、「児童相談所以外」26.8%であり今回の調査結果と同様の傾向が見られた。

### 援助機関（複数回答）と年齢カテゴリーのクロス表

多くは「児童相談所」が援助に関わっているが、1歳未満・1~5歳については、「児童相談所以外の機関」も援助に携わる報告が多くなっていた。

Q44-4 援助機関と年齢カテゴリー（5段階）のクロス集計表

	1歳未満	1-5歳	6-11歳	12-14歳	15歳以上	合計	
児童相談所	頻度 <u>37</u>	190	307	204	88	826	
	カテゴリ別の%	79.7%	84.1%	90.9%	89.4%	91.3%	88.1%
児童相談所以外	頻度 <b>26</b>	<b>91</b>	<u>92</u>	61	29	299	
	カテゴリ別の%	56.8%	38.4%	25.3%	25.1%	37.7%	31.9%
	総数	47	224	342	227	98	938

\***太字**はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの。イタリックは低い頻度を示したものの。

### 援助機関（複数回答）と虐待種別のクロス表

同様に多くは「児童相談所」が援助に関わっているが、ネグレクトにおいては、「児童相談所以外の機関」が援助にかかわる頻度が多かった。

Q44 援助機関と虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト		性的虐待	心理的虐待	心理的虐待（DV目撃）	合計
			ネグレクト	（同居人の虐待放置）				
児童相談所	頻度	312	<u>202</u>	28	35	157	94	828
	カテゴリ別の%	89.9%	83.5%	80.0%	94.6%	92.4%	86.2%	88.1%
児童相談所以外	頻度	100	<u>104</u>	9	11	<u>38</u>	35	297
	カテゴリ別の%	28.8%	43.0%	25.7%	29.7%	22.4%	32.1%	31.6%
	総数	347	242	35	37	170	109	940

\*太字はカイ2乗検定・残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したものの、イタリックは低い頻度を示したものの。

### Q44-4-1. 子ども援助における児童相談所での対応者

（Q44「子どもに援助」かつ Q44-4「児童相談所」回答 942 ケース限定：複数回答）

- 「児童福祉司」86.0%、「児童心理司」59.3%が多くのケースの対応を行っていた。

#### Q44-4-1 児相が関わった援助での対応者

（Q44-4「児童相談所」回答ケース限定：複数回答）

	度数	%	%グラフ
児童福祉司	713	86.0	
児童心理司	492	59.3	
医師	64	7.7	
家族支援のための専任担当者	14	1.7	
その他	33	4.0	
該当ケース数	942		

\*複数回答であることから度数合計は該当ケース数とは一致しない。

#### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査では、「児童福祉司」79.2%、「児童心理司」45.4%であり、今回の調査の方がこれらの 2 職種が対応する割合が高くなっていた。

## Q45. 保護者、子ども、保護者と子ども（同席）へ実施したプログラム

- 「プログラムを行っていない」ケースが多数（30.2%程度）を占めていた。実施されたプログラムの中では、「サインズ・オブ・セーフティ」が1.1%と最も多かった。

Q45 保護者・子どもに行われたプログラム（複数回答）

	度数	%	%グラフ
サインズ・オブ・セーフティ	70	1.1	■
パートナーリング・フォー・セイフティ	6	0.1	
精研式ペアレント・トレーニング	14	0.2	
ファミリー・グループカンファレンス	2	0.0	
MyTree ペアレンツプログラム	3	0.0	
PCIT（親子相互交流療法）	2	0.0	
CARE	7	0.1	
CRC	3	0.0	
トリプルP	4	0.1	
Nobody's Perfect	0	0.0	
コモンセンス・ペアレンティング	4	0.1	
旧称「コモンセンス・ペアレンティング」	11	0.2	
AF-CBT	1	0.0	
TF-CBT	0	0.0	
その他の母親グループ	0	0.0	
その他の父親グループ	5	0.1	
その他の親子同時に参加するグループ	0	0.0	
その他	37	0.6	■
プログラムを行っていない	1902	30.2	■
該当ケース数	6300		

\*複数回答であること、また各設問の無回答数から度数合計は該当ケース数とは一致しない。

### \*平成 25 年度調査との比較

平成 25 年度調査でも、「サインズ・オブ・セーフティ」が最も多く、同様の傾向が見られた。

### 実施したプログラムと虐待種別のクロス表

プログラムを実施した割合が非常に低いので慎重な解釈が必要だが、「同居人の虐待放置」は「サインズ・オブ・セーフティ」が実施されることが相対的に多く、心理的虐待には「精研式ペアレントトレーニング」が実施される頻度が多かった。

## 実施したプログラム（複数回答）と虐待種別のクロス表

Q45 実施したプログラムと虐待種別のクロス集計表

		身体的虐待	ネグレクト	ネグレクト (同居人の虐待 待放置)	性的虐待	心理的虐待	心理的虐待 (DV目撃)	合計
		サインズ・オブ・セーフティ	頻度	22	17	<b>6</b>	1	17
	カテゴリ別の%	3.1%	3.1%	8.7%	2.1%	2.9%	1.2%	2.7%
	総数	710	550	69	48	593	600	2570
パートナーリング・フォー・セイフティ <sup>a</sup>	頻度	5	1	0	0	0	0	6
	カテゴリ別の%	0.7%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
精研式ペアレントトレーニング	頻度	6	<b>0</b>	0	0	<b>8</b>	<b>0</b>	14
	カテゴリ別の%	0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	1.4%	0.0%	0.5%
	総数	711	549	69	48	585	598	2560
ファミリーグループカンファレンス <sup>a</sup>	頻度	<b>2</b>	0	0	0	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
MyTreeペアレンツプログラム <sup>a</sup>	頻度	1	0	0	0	2	0	3
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	0.1%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
PCIT (親子相互交流療法) <sup>a</sup>	頻度	1	0	0	<b>1</b>	0	0	2
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	2.1%	0.0%	0.0%	0.1%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
CARE <sup>a</sup>	頻度	3	1	0	1	2	0	7
	カテゴリ別の%	0.4%	0.2%	0.0%	2.1%	0.3%	0.0%	0.3%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
CRC <sup>a</sup>	頻度	0	3	0	0	0	0	3
	カテゴリ別の%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
トリプルP <sup>a</sup>	頻度	3	0	0	0	1	0	4
	カテゴリ別の%	0.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.2%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
コモンセンス・ペアレンティング <sup>a</sup>	頻度	3	1	0	0	0	0	4
	カテゴリ別の%	0.4%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
旧称「コモンセンス・ペアレンティング」 <sup>a</sup>	頻度	6	1	0	0	4	0	11
	カテゴリ別の%	0.8%	0.2%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	0.4%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
AF-CBT <sup>a</sup>	頻度	1	0	0	0	0	0	1
	カテゴリ別の%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
その他の父親のグループ <sup>a</sup>	頻度	2	0	0	0	3	0	5
	カテゴリ別の%	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.2%
	総数	710	549	69	48	585	598	2559
その他	頻度	<b>20</b>	<b>3</b>	2	1	<b>3</b>	8	37
	カテゴリ別の%	2.8%	0.5%	2.9%	2.1%	0.5%	1.3%	1.4%
	総数	711	549	69	48	585	598	2560
プログラムを行っていない	頻度	<b>489</b>	407	44	39	432	<b>487</b>	1898
	カテゴリ別の%	61.8%	66.4%	58.7%	75.0%	65.2%	70.2%	65.7%
	総数	791	613	75	52	663	694	2888

\***太字**はカイ2乗検定および残差分析で統計的に有意に高い頻度を示したもの。*イタリック*は統計的に有意に低い頻度を示したもの。a期待度数5未満のため検定としては十分なものではないが参考として示す。またNobody's Perfect、TF-CBT、その他の母親のグループ、その他の親子同時に参加するグループは導入ケースが0であったため結果表示からは外した。

## 8. 考察

以上の所見をもとにテーマごとの考察を以下に加える。

### 1. 通告される虐待事例の変化特に DV 目撃による心理的虐待事例について

通告される虐待事例の変化を表す所見として以下が注目された。

- ① 通告した者（機関）では、H25 年度に比べ「警察」の通告等が 2.5 倍以上に増加していた。
- ② 虐待種別について回答のあった 6300 ケースにおいて、「心理的虐待 (DV 目撃)」が 2111 人 (33.5%) と最も多く、「心理的虐待」1493 人 (23.7%)、「身体的虐待」1433 人 (22.7%)、「ネグレクト（同居人等による虐待の放置以外）」1043 人 (16.6%) であった。平成 25 年調査では、「身体的虐待」が 2,434 人 (32.7%) と最も多く、「ネグレクト（虐待放置以外）」が 1,921 人 (25.8%) 「心理的虐待 (DV 目撃除く)」が 1,363 人 (18.3%)、「心理的虐待 (DV 目撃)」が 1,245 人 (16.7%) であり、今回の調査では、心理的虐待 (DV 目撃) が急増していることが確認された。
- ③ 主たる虐待者は、最多が「実母」が 2904 件 (46.1%) で次が「実父」2569 件 (40.8%) であった。平成 25 年調査では、「実母」が 3,828 件 (51.1%) と最も多く、次いで「実父」2,556 件 (34.4%) であったので比較すると、実母の割合が 1 割低下し、実父が 1 割増加していた。

以上のように、今回の調査で現在の児童相談所で扱っている虐待事例の全体的な特徴として、警察からの通告とくに DV 事例における心理的虐待の割合が急激に増え、主な虐待者が実父である事例が増えていることが明示された。これは、最近の虐待事例自体の特徴も含まれている可能性があるが、警察が以前よりも子どもが同居している DV 家庭の事例を児童相談所に通告する方針が明確になったことでの変化が大きいと思われる。これまで実母が主要な虐待者として示されることが多かったが、それは子どもを直接世話しているのが母親であることを反映しているので、母親のみが問題なのではなくて父親の問題もその裏にある場合が多いと以前から指摘されてきたことを考えると、DV という視点を通して暴力的な側面をもつ父親の問題が事例として顕在化してきたといえるだろう。

こうして最近増加している心理的虐待 (DV 目撃) 虐待の事例について検討するために今回のデータから得られた所見を以下に示した。

- ④ 心理的虐待 (DV 目撃) の事例では、虐待通算期間が 1 か月未満と評価される事例が 3 割を占め、他の虐待の種類と群よりも、この一番短い期間のカテゴリーに入る割合が有意に多いという結果であった。
- ⑤ 虐待重症度をみると、心理的虐待 (DV 目撃) 虐待の事例では「虐待の危惧あり」という最も重症度を低く評価された群で 40.5% を占めるが、重症度が深刻である「中度虐待」の 43.4%、「重度虐待」の 23.5% を占めていた。
- ⑥ 心理的虐待 (DV 目撃) の事例の主たる虐待者は多い順に、実父 65.2%、実母 21.3%、母の内縁の夫 4.7%、普通養子縁組の養父 4.4%、継父 2.3% などであり、他の虐待の種類と比べた場合、実父、母の内縁の夫、普通養子縁組の夫の割合が有意に高く、実母の割合が有意に低いという結果であった。

- ⑦ 主たる虐待者との面接において、心理的虐待（DV）では、「主たる虐待者に会った」37.3%、「従たる虐待者に会ったが、主たる虐待者には会っていない」18.6%、「会っていない」43.5%であり、他の虐待の種類と比べて、「従たる虐待者に会ったが、主たる虐待者には会っていない」「会っていない」の割合が有意に高かった。保護者との面接回数が「なし」の割合（34.1%）が他の虐待よりも多いことが示された。
- ⑧ 保護者や子どもへのサービス導入を聞く質問で、「DV 被害者支援支援機関等」への紹介をおこなった事例は9.9%であった。
- ⑨ 要保護対策協議会の個別ケース検討会開催の開催してない割合（92.5%）は、虐待の種類別の群で最も高かった。

④の所見は、本来の DV 問題が長期的な性質を持つことと反するようだが、児童との関連で見ると別居や離婚をした場合だと直接的には虐待と判断しにくい状況になるので、虐待の通算期間としては1か月以内という短いカテゴリーに入れられる事例が多いと思われる。これが⑤の所見で虐待重症度における「虐待の危惧あり」という重症度としては低い判断に迷うという回答の事例が他の虐待に比べて、多かったことと呼応していると思われる。一方で DV 事例では重症度としては、中等度以上の深刻な虐待であると評価された事例も多く、暴力そのものは深刻である事例は少なくないといえる。⑥のように。加害者は実父や養父や妻の交際相手が他の虐待よりも多いため、子どものことで接触をとることが、実母の場合よりも難しいということも評価や対応を難しくしていると考えられる。實際上、⑦に示すように主な虐待者の面接にこぎつけることができない場合が他の虐待よりも割合が多く、保護者全体への面接回数がゼロである割合も最多である。DV 加害者と面接が難しいこともあるし、また現に子どもと住んでいないような場合には面接までの必要性がないと判断されている可能性がある。しかし、DV 問題のある家庭では加害的でない親も SOS が出しにくく、状況を知ることが困難であり、被害を受けた配偶者と子が家をでて、裁判や面会交流などの関係が継続したり、再同居する場合もまれではなく、理想的には長期的な評価や支援が必要であると思われるが、虐待事例の通告が激増している中でこうした事例に継続的な対応をすることは容易ではないといえる。その分、DV 被害者支援機関や区市町村、警察などとの連携が重要になると思われる。これについては⑧にみるとおり DV 被害者支援機関へのつながりが全体の1割程度行われているが、多い割合とは言えない。また⑨の所見のように、DV 目撃事例は要保護対策協議会での事例検討会が他の虐待に比べて開催の割合が少なかったが、DV 事例の評価や対応の難しさを考えれば、区市町村や DV 被害者支援機関などとの連携を高めていくことが有効であるといえる。

## 2. 189の使用の状況と効果

189の使用について今回の調査結果から以下のような所見を得た。

- ① 児童相談所全国共通ダイヤル（189）を使用したのは515件（6.7%）であった。
- ② 通告者別に189使用の割合を比べた場合に、189使用が多かったのは、通告者が「虐待者本人」（189使用割合17.9%）、「児童本人」（189使用割合22.0%）、「その他の家族・親族」（189使用割合11.7%）、「近隣知人」（189使用割合27.7%）であった。
- ③ 虐待重症度と189の使用の関連について検討した結果、「虐待の危惧」では189使用した事例の割合が高く、中度・重度虐待では189使用頻度が低くなっていた。

## 調査 2

- ④ 主たる虐待種別と 189 使用との関連について検討した結果、「身体的虐待」と「心理的虐待」は 189 を使用したケースが多く、「ネグレクト」「DV 目撃」は 189 を使用しないケースの頻度が多かった。

以上より、児童相談所への通告された虐待事例の中で、1189 が用いられていた事例は、515 件（6.7%）であり、まだ使用率は高いとは言えないものの、「近隣知人」「児童本人」「その他の家族・親族」では比較的高い割合で用いられていた。虐待通告は前よりも全体的に敷居が下がり、多くの通告がなされるようになったが、虐待者本人や児童本人など訴えが難しいと思われ、これらの人々の通告で 189 を使った割合が 2 割前後であったことは一定の効果がみられているといえる。虐待の重症度では虐待の危惧ありのレベルの者が多かったことも 189 の役割の位置づけからうなずけるものであった。虐待種別では、身体的虐待のみでなく心理的虐待が比較的多かったことも周囲からわかりにくい事例の訴えに役立っていることをうかがわせる。DV や性的虐待など訴えにくい虐待では期待ほどは用いられていなかったが、これは虐待者がいる家庭では電話をすることの難しさがあるためかもしれない。

### 3. 虐待者のリスク要因

虐待者のもつリスク要因として以下の所見が注目された。

- ① 乳幼児健診で受診したというものは、3～6 か月健診 50.1%、1 歳 6 か月 44.9%、3 歳児健診 38.2%であり、平成 25 年調査の 3～6 か月健診 37.9%、1 歳 6 か月 34.1%、3 歳児健診 28.9%と比べると全ての段階で上がっていた。「不明」が 4 割程度を占め、これらの値がそのまま受診率ではないが、一般の受診率が 8 割を超えていることと比較すると、高いとはいえない。3～6 か月健診を「受診した」という所見と虐待重症度の一番低い「虐待の危惧あり」段階であることが関係しており、また「受診していない」と中度虐待が関係しており、健診の受診状況が、虐待の重症度の指標になり得ることを示している所見であった。
- ② 経済状況としては、「生活保護世帯」10.0%、「非課税世帯」6.5%。「課税世帯」49.4%であり、平成 25 年度調査における「生活保護世帯」16.5%、「非課税世帯」8.9%「課税世帯」が 40.7%と比べるとやや今回の方が良い傾向があるが、一般に比べると今回の事例では生活保護の率など高く、経済的問題を有することが子育てを難しくしていると思われる。
- ③ 虐待者の就労状況としては正規就労 45.2%、非正規就労 17.1%、内職 0.3%、家事専念 10.0%、無職 10.9%であり、無職であることは、虐待の重症度で、中度虐待や重度虐待と関連していた。また虐待種別では、ネグレクト及びネグレクト（同居人の虐待の放置）と関連していた。
- ④ 虐待者自身の生育時の状況は、「ひとり親家庭」6.9%が最も多く、「親からの身体的虐待」「両親の別居・離婚」がともに 4.3%であり、圧倒的に多いのは「不明」67.1%であった。背景を知ることの難しさを感じさせる結果であったが、一方で生育家庭の状況と虐待種別を調べると虐待者自身が生育時に体験した虐待と行った虐待に関連が明確に認められた。すなわち、ネグレクトの虐待者は「ひとり親家庭」「両親の別居・離婚」「生活保護受給」「親からの物理的・心理的ネグレクト」の報告頻度が高くなっており、身体的虐待の虐待者は「親からの身体的虐待」「ひとり親家庭」の報告頻度が高く、心理的虐待の虐待者は「親からの心理的虐待」の報告頻度が高かった。これらはいわゆる虐待の世代間連鎖を色濃く物語る結果となった。また虐待の重症度、特に中度虐待以上の深刻な虐待と生育期の逆境的体验（「ひとり親家庭」「親からの虐待（身体的・ネグレクト・心理的）」「両親の別居や離婚」「生育環境での DV」等）があることが関

係していた。特に「親からの身体的虐待」「ひとり親家庭」「親からの情緒的ネグレクト」は重度虐待や生命の危機のような重篤例での報告頻度が高くなっていた。

- ⑤ 虐待者の精神障害又はその疑いについては約半数(53.9%)が「精神障害はないと思われる」であったが、1193名(18.9%)で「精神障害又はその疑いがある」と報告された、虐待重症度が高くなるほど(中度虐待以上)精神障害が報告される頻度が高く、比較的重症度が軽度であるほど(危惧あり・軽度虐待)精神障害はないと報告される頻度が高くなっていた。虐待種別との関係では、精神障害が報告される頻度が多い虐待種別として「ネグレクト」、精神障害はない報告される虐待種としては「身体的虐待」がそれぞれ該当していた。精神障害またはその疑いがあるとされた1193名を対象として、精神障害に対する治療・相談について尋ねると、496件(41.6%)が治療・相談に行っていたが、「不明」を含む「治療不十分」「治療していない」と思われるケースが半数以上を占めていた。治療相談の有無と虐待重症度の関連を検討したところ、中度虐待において「治療していない」との報告が多く見られた。また重度虐待においては「治療に行ったが不十分なもの」との報告が多かった。主な虐待者の精神障害の種類としては、感情障害が39.6%、パーソナリティ障害13.2%、発達障害13.2%、アルコール使用障害11.1%知的障害10.5%、不安障害10.6%、統合失調症7.5%であった。「感情障害」はすべての虐待種別で4～5割を占め、実母に多いことが示された。また「ネグレクト」において「知的障害」「発達障害」「アルコール使用障害」が多いこと、「DV目撃」において、「アルコール使用障害」が多い傾向がみられた。

以上のまとめると虐待者のもつリスク要因として、乳幼児健診の受診が確認されないこと、精神的問題(精神障害や知的障害や発達障害など)やその疑いがあること、経済的困難、不安定な就労、夫婦間不和、育児疲れ、ひとり親家庭、DV、養育者の別居、孤立、劣悪な住環境、頻繁な転居、アルコール等の乱用者、親自身の被虐待体験などが存在し、虐待重症度や虐待の種別とも関係していた。精神的な問題への治療を行っているかどうかは虐待の重症度と関係していることが確かめられ、こうしたリスク要因への対応することで虐待の重症化や再発を予防できる可能性がある。

#### 4. 被虐待児童の状態やリスク要因

- ① 子どもが経験する生育時の問題としては、「ないと思われる」43.4%、「不明」25.5%であるが、「発達障害疑い」が11.4%と最も多く、「精神発達の遅れ等」6.6%、「問題行動あり」6.9%、「分離体験」5.1%が続いていた。虐待重症度別の生育状況の特徴は、虐待の危惧ありと軽度虐待は「問題がない」と報告される頻度が高い。中度虐待は「発達障害疑い」「問題行動あり」「精神発達の遅れ」「分離体験」などの問題が報告される頻度が高かった。重度虐待も同様の傾向であった。また重度虐待と生命の危機ありにおいて、「予期しない妊娠」の報告頻度が高くなっていた。虐待種別の生育状況の特徴は、身体的虐待には「発達障害疑い」「問題行動あり」「精神発達の遅れ」の頻度が多い。ネグレクトは「予期しない妊娠」「分離体験」「精神発達の遅れ」「分離体験」「未熟児」が多かった。性的虐待は頻度そのものが少ないが、「発達障害の疑い」「精神発達の遅れ」が多かった。
- ② 被虐待児が生育時に経験した家庭・家族状況としては、「夫婦間不和」が33.0%と最も多く、次いで「ひとり親家庭」26.0%、「DV」24.0%、「養育者の別居」19.9%などが高い割合を示していた。家庭状況と虐待重症度の特徴としては、全般的に虐待の危惧ありと軽度虐待は問題の報告が少ないのに対し、中度虐待・重度虐待以上になると「夫婦間不和」「DV」「養育者の別居」「経済的困難」「精神障害のある家族」

## 調査 2

「ステップファミリー」「不安定な就労」などを代表とする様々な問題の報告頻度が高くなることである。

- ③ 被虐待児の調査時の身体状況としては、「ないと思われる」が8割以上を占めていた。該当のある身体状況では、「打撲傷・あざ」が7.5%と最も高く、次いで「不衛生」3.0%となっていた。身体的虐待の反映と見られる「打撲傷あざ」「頭部外傷」は重度虐待以上での報告例が多い。またネグレクトの反映と考えられる「不衛生」「栄養不良」「身体発達の遅れ」も重度虐待以上での報告が多くなる。逆に「ないと思われる」は軽度虐待や虐待の危惧ありのケースでの報告が多い。
- ④ 被虐待児の精神症状としては、未就学児童では「遊びに集中できず落ち着かない」「ぐずることやかんしゃくを起こすことが多い」が多く、就学以降の年代では「落ち着きのなさ」、「虐待者や特定の状況・人に怯える」、「引きこもり・不登校」、「怒りを抑えられず、人や物にあたる」が多かった。
- ⑤ 未就学児童の虐待重症度と精神症状の関係では、虐待の危惧あり・軽度虐待では「ないと思われる」が多く報告され、中度虐待では「おびえる・不安」「表情乏しい」「寝付けない・夜泣き激しい」が多く報告されていた。重度虐待は加えて「ぐずる・かんしゃく」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」「表情乏しい」が多く報告されていた。生命の危機ありは報告頻度が全体に少ないが、精神的問題については不明であるという報告が多かった。精神症状と虐待種別の関係では、身体的虐待とネグレクトにおいて多くの精神的問題が報告された。身体的虐待は「おびえる・不安」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」「ぐずる・かんしゃく」「感情の起伏激しい」「寝付けない・夜泣き」「表情乏しい」などの報告頻度が高かった。ネグレクトは「表情乏しい」「集中できず落ち着かない」「誰にでもべたべた」の報告頻度が高かった。心理的虐待では多くの精神的な問題が報告されることはなかった。
- ⑥ 就学時以降の被虐待児の精神症状と虐待の重症度との関係をみると、全体の傾向として、精神的問題は多様なものが中度・重度虐待などの重篤例で頻繁に報告され、虐待の危惧あり・軽度虐待では問題の報告頻度が少なかった。被虐待児の精神的問題（就学）と虐待種別の関係をみると、身体的虐待は「虐待者等におびえる」「感情表現少ない」「怒りが抑えられない」「大人への反抗的態度」「何事にも自信持てない」「自傷行動」「落ち着きの無さ」「反社会的問題行動」「ゲーム依存」の報告頻度が高くなっていた。ネグレクトは「引きこもり・不登校」「反社会的問題行動」「ゲーム依存」への報告頻度が高かった。性的虐待は「虐待者におびえる」「虐待を思い出させる場所を避ける」「感情表現少ない」「気持ちの動揺」「自信持てない」「落ち込み」「自傷行動」「引きこもり」など様々な問題の報告頻度が高かった。心理的虐待、特にDV目撃は精神的な問題の報告頻度は全体に低く、「問題ない」とする報告頻度が相対的に多かった。

以上の被虐待児の心身の状態は全体としては、不明やないとされる場合が多く、その評価の難しさがあると思われた。しかし、心身の症状があることと虐待の有無や重症度や種別および生育期の状況の有無と関係しており、子どもの心身の状態をもとに虐待の発見や支援計画を立てることが重要であることが改めて確認された。

## 5. 対応・援助とその効果

今回の調査で行われていた対応や援助やその結果は以下の通りである。

- ① 今回の事例における新規受理ケースは61.1%であった。他には、前回にも虐待で受理して今回繰り返してあった事例31.8%と、前は別の相談できて、虐待としては今回初めてという事例6.4%であった。
- ② 9割以上のケースで48時間以内の安全確認が行われていた。
- ③ 児童福祉司が、児童と面接しているのは約半数で、主な虐待者と面接は65%で行われていた。児童心理

司については、子どもとの面接は 18.9%であり、虐待者の中で主な虐待者と会っている場合が 55.0%、従たる虐待者のみの場合は 10.0%、虐待者に会えていない場合が 34.3%であった。

- ④ 保護者や子どもに対して、医療機関、生活保護、DV 被害者支援機関、保育所などへつなぐサービスが 24.8%におこなわれていた。要保護対策協議会のケース検討会は 15%に行われていた。
- ⑤ 保護者や子どもにあるいは両者に対してのプログラムとしては、サインズ・オブ・セーフティが 1.1%で最も多く、次に精研式ペアレンティング 0.2%であり、プログラムは行っていないという回答が 3 割を占めており、プログラムへの導入ということはまだ一部の事例に限られていた。
- ⑥ 調査時点では「援助方針を決定し終結している」68.9%、「援助中」22.0%と合わせると多くのケースで援助方針のもとに取り組みがなされていた。援助中のケースでは「継続指導中」68.6%、「児童福祉施設入所措置等」15.0%、「児童福祉司指導中」13.3%と続いた。
- ⑦ 虐待者の受け入れは、「働きかけに応じる」が 60.3%を占め、「当初応じなかったものの現在応じる」6.5%と合わせると 7 割近くが応じる態度を示していたが、十分応じない事例も数%みられた。また、支援後の保護者の状況として、「養育行動や状況が改善」34.1%、「養育行動や状況がある程度改善」42.7%、「養育の状況は変わらない」20.1%、「むしろ悪化」0.5%、「不明」2.7%で、改善する場合は 4 分の 3 であるが残りは十分な変化が確認できていないといえた。
- ⑧ 現在の虐待状況としては、「虐待は止まり、再発可能性が低い」47.0%、「虐待は止まっているが、再発の恐れがある」41.1%と 8 割以上で虐待が停止している。「虐待行為を生じ、危ない状況が続く」が 1.6%で、「不明」が 9.5%であった。この虐待状況について、虐待重症度が関係しており、中度虐待、重度虐待では、虐待が継続している事例は各々 2.4%、8.5%であり、介入してもその継続を止められない場合があることが示されていた。

以上、全体としては、6 割はある程度働きかけに応じ、最初は抵抗していても次第に受け入れ、虐待の停止にいたっている事例が 7 割以上であるとされた。しかし一方で、一旦は虐待が止まっても再発の恐れがある事例が 4 割や、虐待の自覚がなく、介入や支援を受け入れない一群は 1 割程度存在することになる。安全な状況が確保されない場合や調査を更に必要とする場合は一時保護 13%が行われていた。2 割は継続指導や施設入所という形での支援を継続していた。もともと虐待重症度が中度あるいは重度の事例の場合は介入しても虐待が止まらないままである場合が 2.4%、8.5%存在していた。働きかけを受け入れない事例等困難な事例への介入方法の開発が必要であるが、改善が難しかったり再発の可能性のある事例を的確に評価し、虐待的な行動の継続や再発から子どもを保護する体制を組めるようになることが重要であると考えられた。

## 9. 調査 2 のまとめ

H30 年度のケース分析では、警察などによる心理的虐待（DV 目撃）の通告が増え、主な虐待者が実父である事例が増えるなどの変化があることがわかった。また、189 が始まったことで、虐待者や児童本人などからの通告も増えて、より多様なケースが事例として顕在化していることが確かめられた。さらに調査では、虐待者のリスク要因（乳幼児健診の受診が確認されないこと、精神的問題、経済的困難、不安定な就労、夫婦間不和、育児疲れ、ひとり親家庭、DV、養育者の別居、孤立、劣悪な住環境、頻繁な転居など）や子どものリスク要因（発達障害疑い、問題行動あり、精神発達の遅れ、分離体験予期しない妊娠など）が虐待の重症度や種別などと関係することが改めて確かめられ、これらを的確に評価、支援していくことで虐待の停止や再発防止の可能性が高められると考えられた。現時点での児童相談所での働きかけにより、虐待者の 6 割はある程度これに応じており、虐待の停止に到っているいと判断される事例が 7 割以上であった。しかし一方で、一旦は虐待が止まっても再発の恐れがある事例が 4 割あり、虐待の自覚がなく、介入や支援を受け入れない事例も 1 割程度存在していた。DV 加害者や男性事例の増加は、育児ストレスで抑うつ的になる母親の虐待に対する働きかけの手法とは異なる手法が必要になってくると思われる。こうした困難な事例への行動変容をはかる介入方法の開発とともに、改善が難しかったり再発の可能性のある事例を的確に評価し、虐待的な行動の継続や再発から子どもを保護する体制を組めるようになることが重要であると考えられた。